国立国会図書館　平成 25 年企画展示

名勝負!!

ごあいさつ　2

相撲　3
サッカー　16
柔道　26
ラグビー　31
テニス　33
ゴルフ　35
ボクシング　36
プロレス　38
競馬　44
囲碁　47
将棋　52
野球　プロ野球　58
高校野球　67
大学野球　71
オリンピック　73

参考文献　92

年表　96

ごあいさつ

スポーツをはじめとするさまざまな世界で、誰もが記憶している「名勝負」があります。

本展示会では、野球、サッカー、相撲、柔道、テニス、ラグビー、ゴルフ、競馬、ボクシング、プロレス等の競技やオリンピックの舞台を中心に、さらに囲碁・将棋界を加え、20 世紀を彩る「名勝負」を選び、国立国会図書館が所蔵するスポーツ新聞や専門雑誌の記事や報道写真などを通じて、当時の興奮をお伝えします。

これら「名勝負」の誕生には、新聞・出版、ラジオ・テレビなどのメディアの発達を抜きにして語ることはできません。舞台上の熱闘をメディアが伝え、大衆が語りつぐことで生まれ記憶される「名勝負」という物語。それらの記憶をたどり、勝ち負けを超越して全力で闘う、ライバル同士の気迫を想い起こしながら、「名勝負」の歴史を振り返っていただく機会になれば幸いです。

今では貴重となった、勝負直後に刊行された資料が一堂に会する、国立国会図書館ならではの展示をお楽しみください。

平成 25 年 10 月
国立国会図書館長
大滝　則忠

相撲　Sumo

ライバル同士の激戦！

大相撲には、両横綱が好敵手として並び称され、1つの時代をつくる例がしばしば見られました。ここでは、「栃若時代」、「柏鵬時代」、「輪湖時代」の代表的な名勝負をご紹介します。

栃若、初の全勝千秋楽決戦！

名勝負!!

○若乃花　対　栃錦●　寄り切り

1960（昭和35）年3月場所千秋楽（1960年3月20日）

大阪府立体育会館

東西の横綱を分け合っていた栃錦と若乃花が、両者とも全勝を続け、史上初の14戦全勝同士での横綱対決となった一番。「栃若時代」を象徴する名勝負として知られる。

立ち合い、両者は左四つに組み合い、ともに両廻しを引いてがっぷり四つの体勢となった。若乃花の寄りを栃錦は吊り気味に残し、さらに栃錦の内掛けを若乃花が残すなど攻防が続いたが、いずれも決定打が出なかった。ついに、栃錦が左の差し手を抜いて若乃花の廻しを切る作戦に出たところを、若乃花が両差しとなり一気に出て寄り切った。2分30秒を超す大相撲であった。若乃花の自伝『厳しく美しい土俵』（1989（平成元）年）によると、この勝負の前夜、緊張をほぐすため映画館に行った若乃花は、前方の座席に栃錦がいるのを発見し「『ああ、やっぱり栃関も私と同じで勝負のことを忘れたいんだなあ』と思うと、何となく気持ちがスーッとした」という。

栃錦は翌5月場所、初日から2連敗すると潔く引退を表明し、この一番は最後の「栃若対決」としても歴史に残ることとなった。若乃花はその後も土俵を続け、栃錦と同じ優勝10回の記録を残して2年後に引退した。

1. 毎日グラフ　13（14）＝520　1960（昭和35）年4月3日　毎日新聞社＜Z23-6＞
見出しは「相撲史飾った若乃花」。

柏鵬初の全勝決戦、柏戸涙の復活優勝！

名勝負!!

○柏戸　対　大鵬●　寄り切り

1963（昭和38）年9月場所千秋楽（1963年9月22日）

蔵前国技館

東西に並んだ横綱の大鵬・柏戸が、前日までいずれも 14 戦全勝を続け、栃若に続き 2 度目の横綱同士による千秋楽全勝決戦の末、柏戸が 2 度目の優勝を手にした一番。

柏戸と大鵬は「柏鵬時代」と並び称されたにもかかわらず、前場所時点で大鵬は 11 回の優勝を記録していたのに対し、柏戸は 1 回と差を付けられていた。この日、立ち合いから大鵬は右を差して寄ったが、柏戸は左上手廻しを引いてこらえ、さらに右からおっつけ、うまく右差しに成功。大鵬は腰が伸び、柏戸は両まわしを引いて一気に寄り切った。

ケガのため 4 場所連続で休場していた柏戸は、復活優勝を果たした後の支度部屋で感涙にむせんだ。その一方、石原慎太郎が 9 月 27 日付の『日刊スポーツ』紙コラムで「八百長」の可能性を主張し、相撲協会が告訴（のち、石原の訂正で告訴取り下げ）する騒動も起こった。大鵬は、自伝『巨人、大鵬、卵焼き』（2001（平成 13）年）で「私は負けることはないと楽観的な気持ちになっていた。だから私にも心のおごりがあったのかもしれない」と回想している。

その後、大鵬は 32 回の優勝（史上 1 位）を記録するが、ケガ・病気に悩まされた柏戸は 5 回の優勝にとどまった。しかし、対戦成績では柏戸は大鵬に 16 勝 21 敗と健闘し、好敵手としての意地を見せた。

2. 毎日グラフ　16（42）＝706　1963（昭和 38）年 10 月 13 日　毎日新聞社＜Z23-6＞

輪湖、水入りの大熱戦

名勝負!!

○北の湖　対　輪島●　吊り出し

1977（昭和 52）年 3 月場所千秋楽（1977 年 3 月 27 日）

大阪府立体育会館

前日まで 14 戦全勝で 8 回目の優勝を既に決めている西横綱・北の湖が、12 勝 2 敗の東横綱・輪島と「水入り熱戦」（展示資料 3 見出しより）を展開し、最後は吊り出しで勝って初の全勝優勝を果たした一番。「輪湖時代」を象徴する名勝負の一つである。

北の湖・輪島は左の相四つ（＝同じ四つ身を得意とすること）で、左四つにがっぷり組み合うことが多く、多くの熱戦を展開した。この一番でも立ち合い北の湖は右に回って上手を取ったが、輪島も左下手を引いて右から絞る。北の湖は左下手を取るも輪島に切られ、お互いの寄り・投げを残し合って両者譲らず、2 分 35 秒で水入りとなった。この時点で、輪島の側にややスタミナ切れが目立っていた。再開後、北の湖はすぐに左下手も引き、吊り寄りで攻め、顎が上がった輪島を吊り出しに破った。

その後、北の湖は 24 回、輪島は 14 回まで優勝回数を重ね、それぞれ 1985（昭和 60）年と 1981（昭和 56）年に引退するが、対戦成績は最終的に輪島が 23 勝 21 敗とわずかにリードしており、大横綱・北の湖の好敵手としての面目を保った。北の湖は日本相撲協会理事長を務めている（2013（平成 25）年現在）。

3. 大相撲　23（4）＝256　1977（昭和 52）年 4 月　読売新聞社＜Z11-474＞

新旧交代を象徴する一番

時代が移り変わる際には、その節目となる名勝負があるものです。また、有望な新鋭が上位力士をなぎ倒し、急速に注目を浴びることもあります。そうした一番をご紹介します。

ウルフ・千代の富士、第一人者を倒して初優勝！

名勝負!!

○千代の富士　対　北の湖●　上手出し投げ

1981（昭和 56）年 1 月場所千秋楽　優勝決定戦（1981 年 1 月 25 日）

蔵前国技館

前日まで 14 戦全勝、既に大関をほぼ手中にしていた東関脇・千代の富士が、13 勝 1 敗の東張出横綱・北の湖に本割で敗れた後、14 勝 1 敗同士となった優勝決定戦で北の湖を下し初優勝を決めた一番。大相撲が北の湖の時代から、千代の富士（その鋭い面ざしと取り口から「ウルフ」という異名を持つ）の時代へと移行していくきっかけとなった取組である。

本割では北の湖が吊り出しで勝利を収めたが、10 分後の優勝決定戦は異なる展開となった。千代の富士は立ち合い低く飛びこみ、左四つとなって右上手を引いた。左四つは本来北の湖の組み手だったが、右上手が取れないうちに千代の富士が強烈な上手出し投げを繰り出し、北の湖は膝から土俵に落ちた。館内では「祝福の座ブトンが数えきれないほど舞った」（『朝日新聞』1981（昭和 56）年 1 月 26 日朝刊）という。

その後、千代の富士は同年 9 月場所に早くも横綱に昇進。優勝 31 回（史上 2 位）の記録を残し、1991（平成 3）年に引退した。

4. Sports Graphic Number　271　1991（平成 3）年 7 月 20 日　文芸春秋社＜Z11-1057＞

敗れた北の湖が、10 年後にこの一番を「得意の型で勝ったと思ったら足がついていかなかった」と回想している。

黒船襲来！小錦、横綱初挑戦で完勝

名勝負!!

○小錦　対　隆の里●　押し出し

1984（昭和 59）年 9 月場所 11 日目（1984 年 9 月 19 日）

蔵前国技館

新入幕から 2 場所目ながら、215kg（当時）の巨体を生かした突き押し相撲で白星を重ねていた西前頭 6 枚目・小錦（ハワイ出身）が、横綱初挑戦で西横綱・隆の里を押し出しに破った一番。両者は 8 勝 2 敗同士で、いずれも優勝争いに残っていた。

小錦は立ち合いから激しく突っ張る。隆の里は左前みつを取って組み止めようと試みたが、小錦の強烈な張り手に後退。たちまち土俵際に詰まり、叩き込みを試みるも及ばず、一方的に押し出しに敗れた。所要時間 9 秒 1。

この場所の小錦の強さは強烈な印象を残した。優勝こそ逃したものの、2 横綱（隆の里、千代の富士）・1 大関（若嶋津）を敗る大活躍で 12 勝 3 敗の成績を挙げ、まだ外国出身力士が少なかった相撲界で「黒船襲来」と騒がれた。

その後、小錦は 1987（昭和 62）年に大関に昇進し、優勝 3 回を記録して 1997（平成 9）年に引退、のちタレントに転向した。既に盛りを過ぎていた隆の里は、1986（昭和 61）年に引退した。

5. スポーツニッポン［東京］　12858　1984（昭和 59）年 9 月 20 日　スポーツニッポン新聞東京本社＜Z86-4＞

見出しは「『国技』パニック」。元大関・貴ノ花（藤島親方・当時）が「小錦は強い。恐るべきパワーだ」と評している。

千代から貴へのバトンタッチ

名勝負!!

○貴花田　対　千代の富士●　寄り切り

1991（平成 3）年 5 月場所初日（1991 年 5 月 12 日）

両国国技館

この場所、西前頭筆頭に躍進した 18 歳 9 カ月の新鋭・貴花田が、長年第一人者として相撲界に君臨してきた西張出横綱・千代の富士を初顔合わせで破り、千代の富士が引退を決意するきっかけを作った一番。

前年 11 月場所で 31 回目の優勝を果たした千代の富士は、故障のため 1 月場所・3 月場所を休場し、この場所に進退を賭けていた。一方、貴花田は兄の若花田とともにいわゆる「若貴

ブーム」を巻き起こしており、必然的にこの一番も注目を集めた。立ち合い、貴花田は鋭く突っ込んで右差しに成功。千代の富士は、右差し手もおっつけで封じられ苦しい体勢となり、右へ回り込みながらかいなひねり・突き落としを試みるも及ばず、貴花田の寄り切りに屈した。

敗れた千代の富士は、翌々日の貴闘力戦でも敗れて 1 勝 2 敗となると引退を表明し、貴花田について「こういう力士に負けても悔しくはない。今まで対戦を待ってたかいがあった」(『大相撲』1991（平成 3）年 6 月号）とコメントした。貴花田はのち貴ノ花→貴乃花と改名し、優勝 22 回の記録を残すこととなる。

6. 週刊文春　33（19）=1636　1991（平成 3）年 5 月 23 日　文芸春秋社＜Z24-20＞
見出しには「ひたひたと押し寄せる世代交代の波」とある。時代を画する一戦であった。

連勝ストップ！衝撃の瞬間

大相撲で歴史に残る名勝負には、連勝を続けていたその時代最強の横綱が敗れた一番が少なくありません。ここでは、いずれも大横綱である、太刀山、双葉山、大鵬、千代の富士の連勝がストップした一番をご紹介します。

太刀山 4 年振りに敗れる！館内大熱狂

○栃木山　対　太刀山●　寄り切り
1916（大正 5）年 5 月場所 8 日目（1916 年 5 月 25 日）
両国国技館

前日まで 5 勝 2 敗の東小結・栃木山が、1912 年（明治 45 年）1 月場所 9 日目から前日まで 56 番連続土付かず（休場・引き分け・預かりが挟まるので、厳密には「連勝」ではない）の西横綱・太刀山を破った一番。

この場所新小結だった栃木山は、立ち合いから右差しに成功し、掬い投げから両差しとなって一気に攻めた。左手の指を痛めていた太刀山は小手投げを試みたが逆転ならず、栃木山がそのまま寄り切った。場内は熱狂の渦となり、勝った栃木山は部屋に戻ると大歓迎を受けた。展示資料 7 の『万朝報』は、「贔屓も贔屓でない者も総立になつて部屋に押寄せ、栃木山の背中を叩くやら髪に触るやら、顔を嘗（なめ）るやら……」と報じている。

太刀山は突き押し相撲を得意とし、明治末期～大正前期の相撲界に第一人者として君臨した。その突きは「四十五日の鉄砲」と称される（相手を「一突き半」で土俵から出してしまう強さを、「一突き半＝一月半＝四十五日」という語呂合わせで表現したもの）。勝った栃木山もその後横綱に昇進し、一時代を築いた。

7. 万朝報　8230　1916（大正 5）年 5 月 26 日　万朝報社
（復刻　日本図書センター　1997（平成 9）年）＜Z99-649＞

双葉山 70 連勝ならず！　瓶や火鉢が舞う館内

名勝負!!

○安藝ノ海　対　双葉山●　外掛け
1939（昭和 14）年 1 月場所 4 日目（1939 年 1 月 15 日）
両国国技館

1936（昭和 11）年 1 月場所 7 日目から、3 年間にわたって 69 連勝を続けてきた東横綱・双葉山が、初顔合わせの西前頭 3 枚目・安藝ノ海の外掛けに敗れた一番。69 連勝の記録はその後も破られておらず、この一番も今日まで語り伝えられる名勝負となっている。

安藝ノ海の所属する出羽海部屋の力士は、参謀役の笠置山を中心に「双葉山打倒」の策をかねてから練っていたという。この日、双葉山はいつものように受けて立ったが、安藝ノ海は突っ張りから右差しに成功。左上手を取れない双葉山は右から掬い投げを打ったが、そのタイミングで安藝ノ海は左から外掛けに行き、これが決まって双葉山は腰から崩れた。場内は熱狂の渦となり、作家の宮脇俊三の回想によれば「天井桟敷からいろいろなものが降ってきた。番狂わせがあると座ぶとんが降るのはいつものことだが、瓶や火鉢も降ってきた」（同文書院総合企画室編『大相撲この一番　″通″が選ぶ思い出の名勝負集 』1994（平成 6）年）という。

双葉山は 12 回の優勝を重ね、1945（昭和 20）年に引退。1957（昭和 32）年～68（昭和 43）年には日本相撲協会理事長として、定年制導入など改革に努力した。安藝ノ海はのち横綱に昇進し、1946（昭和 21）年に引退した。

8. 報知新聞　22296　1939（昭和 14）年 1 月 16 日　報知新聞社＜Z86-3＞
9. 野球界　29（5）　増刊相撲画報　春場所総評号　1939（昭和 14）年 2 月 5 日　野球界社＜雑 35-83＞
「あゝ不敗の横綱敗る」など印象的な見出しで、決定的瞬間を伝えている。

コラム　相撲のラジオ放送秘話

客が減る？

相撲の実況放送は 1928（昭和 3）年 1 月の春場所に始まった。全国中等学校優勝野球大会（現在の高校野球）が実況放送を渋ったのと同様に、大日本相撲協会は「客足が減る」と懸念したが、蓋をあけてみればかえって観客は増えた。

仕切り時間

実況放送が相撲に与えた大きな影響として、仕切り時間の設定がある。これまでは呼吸が合うまで無制限に仕切り直しをしていたが、それでは放送の終了時間が決まらない。そのため、中継開始とともに 10 分の制限時間を設けた。ところが、最初は力士たちが戸惑ってどんどん進めてしまったために、かえって時間が余ったという。

マイクを守る！

当時は周囲の雑音を遮断するため、マイクを木製の枠に仕込み、そこに顔を突っ込むようにして放送をしていた。双葉山連勝ストップの瞬間は、座布団やミカンが飛び交ったため、控えのアナウンサー達は放送中のアナウンサーとマイクを必死になって守ったという。なお、この大一番を放送したのは和田信賢アナウンサー。終戦の玉音放送のあとにポツダム宣言受諾の経緯などを伝えた名アナウンサーで、ラジオのクイズ番組『話の泉』でも有名。双葉山の断髪式の放送も担当した。

世紀の大誤審！大鵬 45 連勝でストップ

名勝負!!

○戸田　対　大鵬●　押し出し

1969（昭和 44）年 3 月場所 2 日目（1969 年 3 月 10 日）

大阪府立体育会館

前年 9 月場所 2 日目から前日まで 45 連勝を続けていた東横綱・大鵬が、初顔合わせの東前頭筆頭・戸田に押し出しで敗れた一番。展示資料 10 にもあるとおり「世紀の大誤審」として広く知られている。

大鵬は前場所時点で優勝 29 回を記録しており、大横綱として円熟期に達していた。この日の大鵬は、新鋭・戸田のノド輪からの一気の押しで土俵際に詰まったが、右に回り込んで叩

くと、戸田の右足が早く土俵を割った。行司・式守伊之助の軍配も大鵬に上がったが、土俵下の審判から物言いがつき、協議の結果「行司差し違え」で戸田の勝ちとなった。しかし、写真からは戸田の足が先に出ていたのが明らかであり、この一番をきっかけに、勝負判定の参考としてビデオテープが取り入れられることが決定した（翌 5 月場所から実施）。

その後、大鵬は 32 回まで優勝回数を重ね、1971（昭和 46）年に引退。日本相撲協会理事・相撲博物館館長などを務め、2013（平成 25）年 1 月 19 日に逝去した。展示資料 11『相撲』増刊はその追悼号である。戸田はのち羽黒岩と改名して小結まで昇進、1978（昭和 53）年に引退した。

10. 大相撲　15（4）　1969（昭和 44）年 4 月　読売新聞社＜Z11-474＞
11. 相撲　62（3）=810　2013（平成 25）年 2 月増刊　大鵬幸喜追悼号　ベースボール・マガジン社＜Z11-252＞

千代の富士、53 連勝でストップ！

名勝負!!

○大乃国　対　千代の富士●　寄り倒し

1988（昭和 63）年 11 月場所千秋楽（1988 年 11 月 27 日）
福岡国際センター

この年 5 月場所 7 日目から、前日まで 53 連勝を続けてきた東横綱・千代の富士が、10 勝 4 敗の西横綱・大乃国に敗れ連勝をストップされた一番。同時に、昭和時代の大相撲最後の一番でもあり、二重の意味で歴史に残る取組と言える。

前日に、14 戦全勝でこの場所の優勝（26 回目）を決めていた千代の富士にとって、この日の対戦相手・大乃国は戦いやすい相手とみられていた。しかし、この日の大乃国は立ち合い鋭く、すぐに左上手を引き、千代の富士は右下手を取ったものの上手が引けない不利な体勢となった。寄り進む大乃国に対し、千代の富士は下手投げを試みるが、大乃国は構わず土俵際まで攻め込む。最後は左からの強烈なノド輪押しで千代の富士を仰向けに倒した。決まり手は寄り倒しであった。

千代の富士は、貴花田戦（名勝負「千代から貴へのバトンタッチ」）の解説で述べたとおり、優勝 31 回を記録して 1991（平成 3）年 5 月場所に引退する。一方の大乃国は、横綱での皆勤負け越しを経験するなど苦闘を続け、千代の富士が引退した翌場所・同年 7 月場所に引退した。

12. 日経写真ニュース　1681　1988（昭和 63）年 12 月 1 日　日本経済新聞社＜Z80-1019＞

技能派力士の活躍

土俵上での多彩な技の応酬は、相撲の醍醐味です。ここでは、いずれも技能派力士として知られた、栃錦、栃赤城、貴ノ花、舞の海、琴錦が、個性的な技を発揮した取組をご紹介します。

コラム

技の解説

右四つ、左四つ

右四つとは、相手力士の左腕の下に自分の右腕を差し合った体勢のこと。左四つはその逆である。四つ相撲（突き押しでなく、組んで取る相撲）を取る力士は、このどちらかを得意としている場合が多い。

おっつけ

相手力士に腕を差されてしまった場合に、その差し手を封じ、使えなくする技のこと。たとえば、相手の右差しをおっつける場合は、自分の左腕で相手の差し手を下から上に絞り上げる。相撲の基本技術の一つである。

廻しを切る

相手力士に自分の廻しを取られた場合に、自分の廻しから相手の手を外すこと。元横綱・貴乃花は、廻しを切ることが得意なことで知られた。

掬い投げ

廻しを取らずに、差している腕を上に掬って相手を投げる技。

小手投げ

廻しを取らずに、相手の差し手を抱え込んで下に投げる技。

とったり・逆とったり

「とったり」は、両力士が左右に並んでいる状態で、相手の自分に近い側の腕を、自分の両手で抱え込むか引っ張りこみ、下にひねり倒す技。「逆とったり」は、「とったり」の返し技で、相手の抱えている手を逆に抱え込むか引っ張り込む。奇手に属する。いずれの技も、元関脇・栃赤城が得意とした。

小兵横綱、逆転の首投げ

名勝負!!

○栃錦　対　大内山●　首投げ

1955（昭和 30）年 5 月場所千秋楽（1955 年 5 月 29 日）

蔵前国技館

既に 13 勝 1 敗で優勝を決めていた西横綱・栃錦が、前日まで 9 勝 5 敗だった巨漢の新大関（東大関）・大内山を豪快な首投げで破った一番。展示資料 13 には、「5 尺 8 寸 5 分（177 センチ）の栃錦が、6 尺 6 寸 7 分（205 センチ）38 貫（142.5 キロ）の大内山をものの見事に打ち倒した」とあり、体重別にクラスを分けない相撲独特の妙味とされる、「小よく大を制す」の象徴的一番として知られる。立ち合い、栃錦は鋭く突っ込んだが、大内山の激しい突っ張りを受け、内掛け・二枚蹴りなど反撃を試みるも決め手とならなかった。大内山はさらに突っ張り、右から栃錦の左を絞って攻め優勢と見えたが、栃錦はここで左を抜いて捨て身の首投げに出て、「大内山の体は弧を描くように沈んでいった」。展示箇所の写真は劇的である。

栃錦はその後も「栃若時代」の一方の主役として活躍を続け、優勝 10 回の記録を残して引退した。一方、将来を嘱望された大内山は体調不良もあってのちに大関を陥落することとなり、その意味で本勝負は両力士の明暗を分けた一戦となった。

13. 名人栃錦絶妙の技　相撲技七十手

栃錦清隆、鳴戸海一行示範秀の山勝一本文解説　1991（平成 3）年 1 月　ベースボール・マガジン社＜KD971-E58＞

栃錦の逝去（1990（平成 2）年）をきっかけとして、現役時代の写真を題材に、栃錦の駆使した多彩な技をまとめた本。

後ろ向きからの大逆転！　サーカス相撲の真髄

名勝負!!

○栃赤城　対　貴ノ花●　小手投げ

1979（昭和 54）年 7 月場所 6 日目（1979 年 7 月 6 日）

愛知県体育館

前日まで 3 勝 2 敗の西関脇・栃赤城が、前日まで 5 戦全勝の西大関・貴ノ花に後ろ向きにされ背中に食いつかれる絶対不利の体勢となりながら、小手投げで大逆転した一番。とったり・逆とったり・かいなひねりなどの奇手を得意とした栃赤城の取り口は、「サーカス相撲」との異名をとったが、その象徴的な取組である。

立ち合い、栃赤城は右を差したが貴ノ花は左から小手に振り、栃赤城の後ろに回り込む。ところが栃赤城は右を抜いて、貴ノ花の左を抱え込んで土俵を半周して粘る。そして、土俵際まで追い込まれたところで左足一本を支えに強引な小手投げを打ち、貴ノ花が先に土俵に落ちた。貴ノ花も強靭な足腰と技能相撲で知られていたが、栃赤城がそのお株を奪った格好である。この場所、栃赤城は展示資料 14 の見出しにあるとおり「大関総ナメ」を達成して、9 勝 6 敗と勝ち越し、殊勲賞を獲得した。

その後、栃赤城は殊勲賞 4 回、敢闘賞 4 回の記録を残したが、ケガと病気で三段目まで陥落して 1990（平成 2）年に土俵を去った。

14. 日刊スポーツ［東京］　12050　1979（昭和 54）年 7 月 7 日　日刊スポーツ新聞社＜Z86-2-＞

髷をめぐる攻防

名勝負!!

○高見山　対　貴ノ花●　小手投げ

1980（昭和 55）年 9 月場所 7 日目（1980 年 9 月 20 日）

蔵前国技館

前日まで 5 勝 1 敗の東大関・貴ノ花が、前日まで 3 勝 3 敗の西前頭 5 枚目・高見山と土俵際で投げの打ち合いを演じ、貴ノ花の髷の先がわずかに早く土俵に着いたために高見山の勝ちとなった一番。敗れはしたものの、小兵の貴ノ花が大型力士・高見山に対し、足腰の粘りと勝負への執念（投げの打ち合いで顔から土俵に落ちていく）を見せつけた一番であり、今日でも語り継がれている取組である。

高見山は立ち合いから激しく突っ張ったが、貴ノ花はうまく回り込み、左で廻しを取って土俵際まで攻め込んだ。しかし高見山は、貴ノ花の右差し手を小手に極め、土俵際で高見山の小手投げと貴ノ花の掬い投げの打ち合いとなり、両者スローモーションのように落ちた。行司軍配は貴ノ花に上がったが、物言いがつき、行司差し違えで高見山の勝ちとなった。

貴ノ花は、1975（昭和 50）年に 2 回の優勝を記録していたが、この一番の時点では力士としての盛りは過ぎており、2 場所後の 1981（昭和 56）年 1 月に引退した。その子、若乃花（3 代目）・貴乃花が兄弟横綱となったことは周知のとおりである。一方の高見山は、幕内連続出場 1231 回（史上 1 位）の記録を残し、1984（昭和 59）年に引退した。

15. 大相撲　26（11）=284　1980（昭和 55）年 10 月　読売新聞社＜Z11-474＞

展示箇所の写真は、顔から落ちる貴ノ花の姿をよく捉えている。

小よく大を制す！　三所攻めからの内掛け

名勝負!!

○舞の海　対　曙●　内掛け

1991（平成 3）年 11 月場所 11 日目（1991 年 11 月 20 日）

福岡国際センター

入幕 2 場所目で、174cm・95kg の小兵である東前頭 9 枚目・舞の海が、204cm・198kg の西前頭筆頭・曙を、相手の両足・胸の三か所を同時に攻める「三所攻め（みところぜめ）」からの内掛けで下した一番。相撲の醍醐味と言われる「小よく大を制す」の代表的取組の一つ。この日まで、舞の海・曙とも 4 勝 6 敗であった。

立ち合い、舞の海は相手を見て立ち、うまく下に潜り込んで曙の左足を右で抱え、左下手を取った。さらに左内掛けを試みるが、曙はこれを残す。しかし舞の海は再度左内掛け、さらに曙の左足を抱えたまま胸に頭をつける「三所攻め」で相手の体勢を崩し、最終的には内掛けで勝利した。

「技のデパート」と呼ばれた舞の海は、技能賞を 5 回獲得したほか小結まで昇進し、1999（平成 11）年引退。曙は、外国出身力士として初めての横綱となり、優勝 11 回の記録を残して 2001（平成 13）年引退した。

16. サンケイスポーツ[東京]　10316　1991（平成 3）年 11 月 21 日　産業経済新聞社＜Z86-74＞

当時の相撲人気もあって、この一番を 1 面で大々的に報じている。

2 度目の平幕優勝へ大前進！

名勝負!!

○琴錦　対　貴乃花●　寄り切り

1998（平成 10）年 11 月場所 13 日目（1998 年 11 月 20 日）

福岡国際センター

前日まで 11 勝 1 敗の西前頭 12 枚目・琴錦が、10 勝 2 敗の東横綱・貴乃花を破って 1 敗を守り、前人未到の 2 回目の平幕優勝に向けて大きく前進した一番。琴錦はいったん右四つに組み止められたが、貴乃花の一瞬の隙をついて左差し（巻き替え）に成功し、得意の両差しとなった。琴錦はハズ押しも交えて一気に攻め上げ、第一人者の横綱を寄り切った。西前頭 12 枚目は、通常なら横綱とは当たらない地位であるが、優勝争いに絡むなどの場合は当たることがある。琴錦は、この関門を「死力を尽くし敢然と打ち破」った（展示資料 17 より）のである。

琴錦は両差しからの速攻や肩すかしを得意技とし、2 回の優勝のほか、殊勲賞 7 回、敢闘賞 3 回、技能賞 8 回を受賞し、2000（平成 12）年に引退した（三賞受賞回数 18 回は史上 2 位）。また、三役（関脇・小結）在位 34 場所は史上 1 位である。惜しくも大関への昇進は逃したが、技能派の名関脇として知られている。

17. 相撲　47（13）　1998（平成 10）年 12 月　ベースボール・マガジン社＜Z11-252＞

グラビアで 2 ページにわたってこの一番を特集し、琴錦が「秘術を尽くし」たと評している。見出しは「これぞ相撲の醍醐味！」。

サッカー　Soccer

ライバル同士のふたつの涙 ―ドーハからジョホールバルへ―

日本サッカー界にとって、プロ・リーグの発足と 2002（平成 14）年ワールドカップ招致は、低迷する人気回復の起爆剤であった。1993（平成 5）年 5 月 15 日にプロ・リーグ「J リーグ」が開幕、また、ワールドカップアメリカ大会アジア地区最終予選に進出し、ワールドカップ初出場の期待感から“サッカー・ブーム”は過熱した。最終予選最終戦の「ドーハの悲劇」として語り継がれる劇的な幕切れは、むしろ 4 年後への期待を募らせた。

その後、代表監督人事をめぐる混乱もあり、話題には事欠かなかった。日本サッカー協会（JFA）は、ファルカン元ブラジル代表監督（1994（平成 6）年 3 月～11 月）、加茂周前横浜フリューゲルス監督（1993（平成 5）年 12 月～）と契約し、オフト元日本代表監督を含めた 3 名から監督を選ぶ方針であった。しかし、1995（平成 7）年 11 月にはネルシーニョ（当時ヴェルディ川崎監督）に就任を打診するもすぐに撤回した。

そして 4 年後。日本国内が日本代表の試合結果に一喜一憂した。フランスワールドカップアジア地区最終予選途中での監督更迭、引き分け続きでも敗退は決まらず、アウェイの韓国戦勝利、第 3 代表決定戦の試合展開・・・。ドーハから続く大河ドラマのようであった。

ドーハの悲劇

名勝負!!

イラク代表　対　日本代表　2 - 2

1994FIFA ワールドカップアメリカ大会 アジア地区最終予選 第 5 戦

1993（平成 5）年 10 月 28 日 アルアリ・スタジアム（ドーハ、カタール）

ロスタイムの失点でワールドカップ初出場を逃した試合。

1992（平成 4）年 3 月、JFA は初の外国人代表監督としてオフトを招聘した。同年 8 月の第 2 回ダイナスティ・カップ（日本、中国、韓国、北朝鮮の 4 カ国による大会）で戦後の国際大会初優勝を果たすと、同年 10 月に日本で開催された第 10 回アジアカップでも初優勝した。

第 1 次予選を突破した 6 カ国（イラク、イラン、北朝鮮、韓国、サウジアアラビア、日本）による最終予選は、同年 10 月にカタールの首都ドーハで開催された。総当たりのセントラル方式で、上位 2 カ国が本大会への出場権を得る。日本は、第 5 戦のイラクに勝てば他チームの勝敗に関わらず、大会本戦に出場できる成績であった。

開始直後の 5 分、三浦知良が得点を決め 1 - 0 で前半を終えた。後半 55 分に同点とされるが、69 分に中山雅史の得点で再びリード。しかしロスタイム、イラクはコーナーキックを短く繋ぎゴール前にボールを浮かせた。そこで日本の守備が一瞬遅れ、ヘディングで同点ゴールを決められた。最終結果は韓国と勝点 6 で並んだが得失点差で日本は 3 位に終わった。なお、当時の勝点は、勝利 2、引き分け 1、敗戦 0 であった。

18. Sports Graphic Number　14（24）＝327　1993（平成 5）年 11 月 20 日　文藝春秋＜Z11-1057＞

展示箇所は、第 4 戦の韓国戦終了直後、喜ぶ選手たち。左から中山、三浦、都並。

第 3 試合までを終えて日本は 1 勝 1 敗 1 分けの 3 位、1 位は韓国で過去の対戦成績では大幅に負け越していた。勝利しないと本大会への出場が絶望的になる中、60 分に三浦が先制点を決めそのまま 1 - 0 で勝利した。9 年ぶりの勝利はスコア以上に日本が圧倒し、4 試合を終えて 1 位に立った。

19. 狂気の左サイドバック　一志治夫著　新潮社　1994（平成 6）年 9 月＜KD978-E257＞

1 - 0 で前半を終え、ハーフタイムに興奮している選手や監督の様子を伝えている。「狂気の左サイドバック」とはアジア最終予戦直前に左足首を疲労骨折した都並のこと。オフトは骨折にも関わらず代表に召集したが、都並は回復せず出場の機会はなかった。

なお、本書は第 1 回 21 世紀国際ノンフィクション大賞（現・小学館ノンフィクション大賞）受賞作品である。

20. J サッカーグランプリ　1（10）＝10　1993（平成 5）年 12 月　ソニー・マガジンズ＜Z11-2544＞

試合終了直後の写真。日本選手の多くが立ち上がることすらできなかった。背番号 10 はラモス瑠偉。ブラジル出身のラモスは 1989（平成元）年 11 月に帰化。オフト監督との確執はあったものの、日本代表の中心選手であった。

21. サッカーダイジェスト　14（24）=190　1993（平成 5）年 11 月 17 日　日本スポーツ企画＜Z7-1159＞

金子達仁の「夢を壊した“3 つの現実”」と題するこの記事は、限定的な J リーグ効果、オフト監督の限界、マスコミの責任を論じた。他のメディアの論調とは一線を画したこの記事は、発売直後から賛否両論大きな反響を呼んだ。

後日、金子は、「他の人とは違ったものを書きたい」というただそれだけだったと回想している。

コラム　ハンス・オフト

ハンス・オフト（Hans Ooft）は、1947（昭和 22）年にオランダ・ロッテルダムに生まれた。1982（昭和 57）年にヤマハ発動機のコーチとなり、短期間でチームの立て直しに貢献した。1984（昭和 59）年にマツダのコーチ、1987（昭和 62）年には監督に就任し、日本サッカーリーグ 1 部昇格、天皇杯準優勝などの実績を挙げた。マツダが日本サッカーリーグ 2 部に降格すると辞任、オランダに帰国していた。

1992（平成 4）年 3 月、日本代表監督就任。基礎戦術の徹底のため使用した「アイコンタクト」や「トライアングル」などの英単語が流行した。その一方で、ラモスが月刊誌でオフト監督を公然と批判するなど、基本戦術や規律（ディシプリン）を重視するオフトの方針には反発する選手もいた（その後、話し合いで和解）。特に、規律については、バス乗車や食事の時間など生活面にも及び、「管理主義」との批判もあった。オフトはその著書『Coaching』（1994（平成 6）年）でもディシプリンは戦術の意思統一・共通理解のためには重要だと述べている。

名勝負!!

○日本代表　対　イラン代表●　3 - 2（延長、ゴールデン・ゴール）

1998FIFA ワールドカップフランス大会 アジア地区第 3 代表決定戦

1997（平成 9）年 11 月 16 日　ラルキン・スタジアム（ジョホールバル、マレーシア）

「ドーハの悲劇」から 4 年、日本がワールドカップ本大会初出場を決めた試合。

第 1 次予選を順調に突破した日本の最終予選は、韓国、アラブ首長国連邦（UAE）、ウズベキスタン、カザフスタンと同じ B 組であった。最終予選は中立地でのセントラル方式の予定であったが、急遽、ホーム・アンド・アウェイで行われることになった。同年 9 月から 11 月にかけて、A 組、B 組各 5 カ国で争われ、各組 1 位は本大会出場、各組 2 位が中立地で第 3 代表決定戦を行い、勝者が本大会に出場できる。

１勝１敗１分で迎えた第 4 戦、アウェイでのカザフスタン戦は終了間際のゴールで同点とされると、JFA は加茂監督を解任しコーチの岡田武史を昇格させた。続く第 5・6 戦を引き分け、ホームでは逆転負けを喫した韓国にアウェイで勝利し、最終戦でも勝利し 2 位に滑り込んだ。

22. 竹田の子守唄　翼をください　東芝音楽工業＜YMB-18-59-1＞

「翼をください」は、フォークグループ「赤い鳥」の 1971（昭和 46）年のヒット曲。日本代表のサポーター団体ウルトラス・ニッポンの植田朝日から相談を受けたサポーター団体、日本サッカー狂会の久保田潤が提案し、第 6 戦の UAE 戦から歌われた。1997（平成 9）年に解散した鳥栖フューチャーズがサガン鳥栖として再出発する際にサポーターが歌ったことで知られ、日本代表の復活への思いと重なること、教科書に採用され広く知られていることから選ばれたという。

23. 週刊朝日　102（57）＝4234　1997（平成 9）年 11 月 21 日　朝日新聞社＜Z24-18＞

第 7 戦アウェイの韓国戦を伝える村上龍のルポ。試合は 2 - 0 で日本が勝利した。

欧州サッカーに通じた村上は、試合結果に一喜一憂する国内メディアに冷めた視線を送り、誰も日本代表の実力を把握していないのではないかと疑問を投げかけている。村上は韓国側の席で観戦し、折しも日韓 W 杯共催決定後であったため、友好的感情と反日感情が混ざり合う複雑なものであったことも伝えている。

「ジョホールバルの歓喜」

24. 日本は敵・Japan は友　朴景浩、金徳起著　オークラ出版　2002（平成 14）年 3 月＜Y77-G10686＞

2002（平成 14）年のワールドカップ開催をめぐって日韓は激しく招致を争ったが、1996（平成 8）年 5 月に日韓共催が決定した。当時の韓国における複雑な対日感情を言い表した邦訳タイトルである。なお、原題は『韓国サッカー100 年秘史』である。

25. サッカーの国際政治学　小倉純二著　講談社　2004（平成 16）年 7 月＜KD978-H160＞

A 組は、サウジアラビアとイランが 1・2 位を競っていた。サウジアラビアは、2 位になった場合には第 3 代表決定戦をバーレーンで開催するよう求めていた。しかし、バーレーンでは地理的にも気候的に日本が不利であることから、JFA の国際委員会委員長であった著者が FIFA 事務総長を説得し、マレーシアで開催することとなった経緯を伝えている。

26. 指揮官岡田武史　潮智史著　朝日新聞社　2001（平成 13）年 5 月＜KD978-G511＞

『朝日新聞』に連載（1998（平成 10）年 11 月～12 月）された「岡田武史の 301 日」の単行本化。第 3 代表決定戦を前に、イラン選手のアジジが車いすに乗って現れた事件を伝える。

当時のイラン代表監督のビエイラは、イランサッカー協会が同僚と喧嘩したアジジを強制送還しようとしたので負傷と偽り練習を休ませた、アジジを車いすに乗せたのは自身が仕組んだことだと語った（『読売新聞』47143　2007（平成 19）年 6 月 5 日朝刊）。

27. 報道写真　1998　1998（平成 10）年　中日新聞社＜Z42-356＞

118 分、中田英寿のシュートをゴールキーパーが弾いたところを、岡野がスライディングシュートで決勝ゴールを奪った瞬間。岡野は延長戦からの出場で、再三の決定機を決め切れていなかった。

ふたつの奇跡 ―60 年のときを隔てて―

番狂わせは時に「奇跡」と呼ばれる。

サッカーはほかの競技に比べ、番狂わせの多いスポーツである。自陣ペナルティエリア内のゴールキーパーを除き手の使用が認められないこと、ゴール数を競う球技としては得点数が少ないことなど、その理由として挙げられよう。

番狂わせは、単なる偶然、単に運が良かっただけなのだろうか。否。勝利する弱者には相応の準備が必要である。とはいえ、相応の準備をした弱者がすべて勝者になれるわけではない。

このコーナーではオリンピックにおける「奇跡」をふたつ採り上げる。どちらの勝利も、対戦相手国にとって屈辱と受け止められるほどの敗戦であった。「マイアミの奇跡」と呼ばれたブラジル戦勝利の陰には、「ドーハの悲劇」の教訓があった。「ベルリンの奇跡」と呼ばれたスウェーデン戦勝利の陰には、直前のシステム変更を可能とした柔軟性と、日本人の体格に即した戦術があった。

マイアミの奇跡

名勝負!!

○日本五輪代表　対　ブラジル五輪代表●　1 - 0

第 26 回オリンピック競技大会（アトランタ）　男子サッカー競技 グループリーグ D 組第 1 戦

1996（平成 8）年 7 月 21 日　マイアミ・オレンジボウル（マイアミ、アメリカ）

28 年振りに出場したオリンピックで強豪ブラジルを破った試合。

オリンピックにおけるサッカー競技の出場資格は、1984（昭和 59）年にプロ選手の出場容認後、紆余曲折を経て、アトランタ大会からは 23 歳以下の選手のほか 24 歳以上の選手（オーバーエイジ）3 名までの参加を認めるという現行の規定となった。

アジア地区最終予選では準決勝でサウジアラビアを 2 - 1 で破り、28 年振りに本大会出場が決定した。本大会は各 4 カ国からなるグループリーグの各上位 2 カ国が決勝トーナメント進出。日本は、ブラジル、ハンガリー、ナイジェリアと D 組となった。

初戦の相手ブラジルは 23 歳以下にも代表経験がある選手がいる上、オーバーエイジ枠 3 名は代表選手で補強し、優勝候補筆頭であった。しかし、72 分、守備の乱れをつき伊東輝悦が先制、ゴールキーパーの川口能活が好セーブを連発するなど堅守でブラジルの攻撃を耐えぬき、1 - 0 で破った。しかし、ナイジェリア戦は 0 - 2 で敗れ、ハンガリー戦は終了間際の 2 得点で 3 - 2 と勝利したが、得失点差で決勝トーナメントに進出できなかった。JFA の評価は「守備的なサッカーで将来につながらない」と厳しいものであった。

迎えたイランとの第 3 位決定戦、日本は 39 分に中山雅史が先制するが、46 分と 59 分に得点を許し逆転されてしまう。76 分、途中出場の城彰二の得点で同点に追いつき、延長戦に入った。延長戦は先に得点したチームが勝ちというゴールデン・ゴール方式であった。118 分、岡野雅行が決勝ゴールを奪い勝利した。

28. 日経写真ニュース　2061　1996（平成 8）年 3 月 28 日　日本経済新聞社＜Z80-1019＞

アジア地区最終予選でサウジアラビアとの準決勝に勝利し、オリンピック出場が決定した瞬間、喜ぶ選手やコーチの表情。前半を 1 点リードで折り返したハーフタイム、「ドーハの悲劇」の教訓から選手を落ち着かせてから後半に臨み、57 分には追加点を奪う。しかし、77 分に 1 点返されてからは十分な指示も出来なかったと監督の西野朗は『挑戦：ブラジルを破るまでの軌跡』で回顧している（展示資料 30）。

29. 別冊サッカーマガジン　23（5）＝84　1996（平成 8）年立秋　ベースボール・マガジン社＜Z11-643＞

初戦のブラジル戦を 1 - 0 で勝利し喜ぶ日本チーム。右から川口能活、山本昌邦（コーチ）、路木龍次、田中誠、伊東輝悦、城彰二、松田直樹、西野朗（監督）。下部の連続写真は、72 分、守備の乱れをつき伊東が先制した場面。

30. 挑戦　ブラジルを破るまでの軌跡　西野朗著　ニッポン放送プロジェクト　1997（平成 9）年 2 月＜KD978-G114＞

「“ドーハの悲劇”を教訓に」と題するこの節では、オフト監督の緻密な要求など当時の体験談が述べられている。「ドーハの悲劇」時、「マイアミの奇跡」の監督の西野はコーチの山本ともに、オフト監督のアシスタントコーチ（スカウティング＝「偵察部隊」）を担当していた。オフト監督以前の日本では必ずしもスカウティングは重要視されてこなかった。

31. 日本サッカー遺産　山本昌邦著　ベストセラーズ　2009（平成 21）年 6 月＜KD978-J105＞

当時コーチであった山本がワールドカップやオリンピックでの自身の経験をまとめたもの。山本によれば、ブラジル戦の勝利は「理詰めの戦略」によるものであった。ゴールキーパー川口の好守もシュートコースなどの情報収集と分析によるもので、ブラジルのフォワードの先発と交代選手の予想も的中し、これに対応した松田の起用も堅守に繋がった。また、日本の得点の場面もブラジル守備陣の弱点を突いたものであった。

32. Sports Graphic Number　18（1）＝408　1997（平成 9）年 1 月 2 日　文藝春秋＜Z11-1057＞

「断層」は「マイアミの奇跡」を起こしたオリンピック代表についての金子達仁のルポ。金子は、同誌オリンピック特集号（17（18）増刊 1996（平成 8）年 9 月 5 日）の川口へのインタビュー記事「叫び」でチーム内に軋轢があったことを明らかにしていたが、「断層」ではより多くの選手や関係者にインタビューし記事にしている。「断層」は「叫び」と併せて、ミズノスポーツライター賞を受賞した。

名勝負!!

○日本代表　対　スウェーデン代表●　3 - 2

第 11 回オリンピック競技大会（ベルリン）　サッカー競技　トーナメント 1 回戦

1936（昭和 11）年 8 月 4 日　ヘルタ・プラッツ（ドイツ）

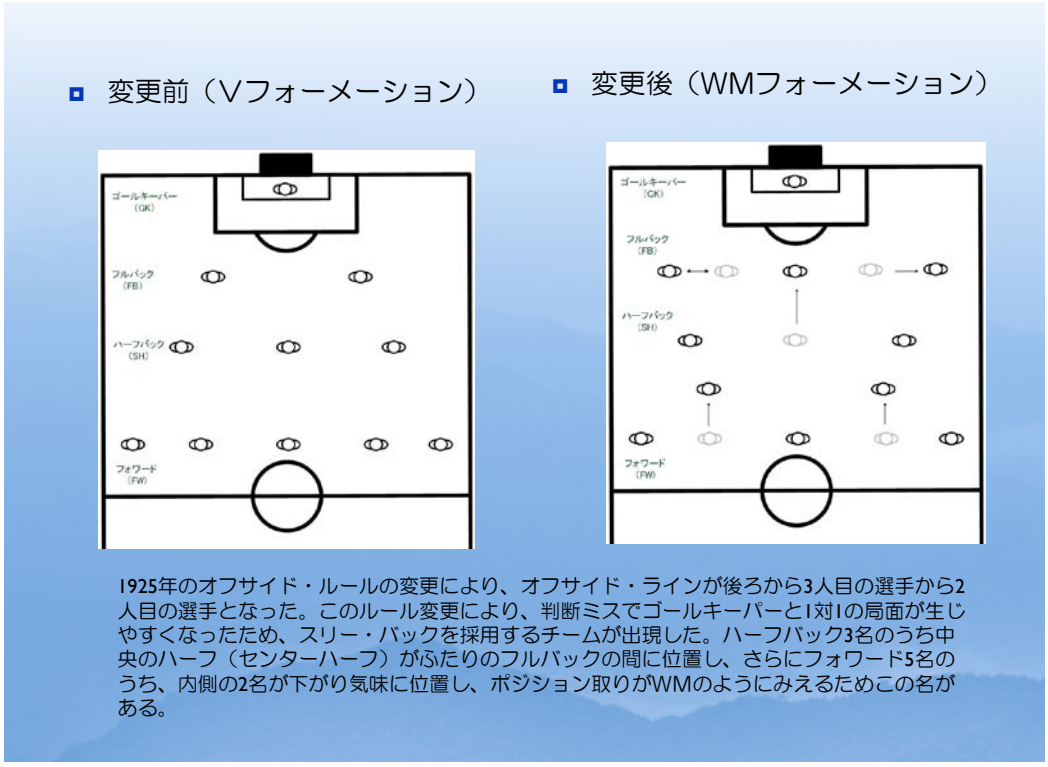
オリンピック初出場で強豪スウェーデンを破った試合。

当時は参加国が少ないため地区予選はなく、参加 16 カ国によるトーナメント戦で、日本はオリンピックのサッカー競技に初参加であった。

日本代表チームは、当初単独チームを派遣する方針であった。しかし、優秀なチームがないとして、早稲田大学を中心とした関東協会の選抜と決まった。関東協会以外からは朝鮮協会の金容植が選ばれたのみであった。

オリンピックのサッカー競技初参加の試合は、強豪スウェーデンに 24 分と 37 分に得点を奪われ 2 点のリードを許して前半を終了した。後半は風下であったが、49 分に川本泰三、62 分に右近徳太郎のゴールで追いついた。その後はスウェーデンの猛攻を堪え、85 分に松永行の得点で逆転勝利した。スウェーデンでは、この敗戦はラジオ中継でアナウンサーのスヴェン・ジェリングが俊敏な日本人選手の様子を実況した“Japaner, japaner, japaner”（日本人、日本人、日本人）とともに、同国のスポーツ史に刻まれることになった。

なお、2 回戦はこの大会で優勝するイタリアと対戦し 0 - 8 で大敗した。



【図】フォーメーションの変更

33. 伯林オリムピック大觀　滿州日日新聞社　1936（昭和 11）年 10 月＜FS27-G59＞

サッカー競技の様子を伝える写真。①と②が 3 - 2 で勝利したスウェーデン戦、③と④が 0 - 8 で大敗したイタリア戦。

34. オリンピック大会報告書　第 11 回　大日本体育協会編　大日本体育協会　1937（昭和 12）年＜648-69＞

現地での最初の練習試合を受け、ディフェンス・ラインをツー・バックからスリー・バックへ変更したことを伝えている。1925（大正 14）年にオフサイド・ルールが変更になったことを受けて、ヨーロッパではスリー・バックを採用するチームが出現したが、日本にはまだ伝わっていなかった。[【図】フォーメーションの変更 参照]

35. アサヒスポーツ　14（22）　1936（昭和 11）年 10 月 1 日　朝日新聞社＜雑 35-73＞

ドイツのサッカー評論家ハンス・ヤルケは、日本のサッカーについて、日本人選手は体格的に劣るが運動量があり、ロングボールを多用せず、ショートパスをつなぐ「近代的戦法」と評した、と伝えている。

コラム

戦前の代表的スポーツ雑誌『アサヒスポーツ』

朝日新聞で最初にスポーツが取り上げられたのは、1883（明治 16）年 2 月 24 日。相撲に関する記事である。現在のようなスポーツ面というのは存在せず、「雑報」という欄であった。

スポーツ記者の始まりは、新聞ではなく雑誌からだった。朝日新聞は、1923（大正 12）年 3 月 15 日に創刊した『アサヒスポーツ』のために、大阪本社社会部の中にあった運動係を、運動部として独立した。これがスポーツ記者の始まりである。『アサヒスポーツ』は、当時発達しつつあったビジュアル重視の雑誌として、全ページグラビアを売りにしていた。同年 1 月に創刊された『アサヒグラフ』のスポーツ版とも言えるが、技術的な解説も多く、別刷りの記録集が付されているのが特徴的である。

戦後はスポーツ新聞にその座を奪われ、1956（昭和 31）年に廃刊した。
＊アサヒスポーツの展示→サッカー展示資料 35、大学野球展示資料 138 等。

ふたつの日韓戦 ―メキシコへの 1 枚の切符―

1964（昭和 39）年の東京オリンピック開催に向けて、1960（昭和 35）年、JFA はドイツ人コーチ、デットマール・クラマー（Dettmar Cramer）を招聘し強化をはかった。その結果、東京オリンピックの 1 次リーグは初戦でアルゼンチンを破り、ガーナには敗れたものの、イタリアがアマチュア資格問題で棄権したため、決勝トーナメント進出を果たした（1 回戦でチェコスロバキアに敗退）。

クラマーの提言を受け、1965（昭和 40）年に実業団初の全国リーグとして日本サッカーリーグ（JSL）が発足。1968（昭和 43）年のメキシコオリンピックでは、アジア予選は韓国と 4 勝 1 分で並んだものの得失点差で本大会に出場し、銅メダルを獲得した。東京オリンピック当時は人気のないスポーツの代表格であったが、この銅メダルにより日本はサッカー・ブームに沸いた。

しかし、その後はオリンピックもワールドカップも予選を突破することができず人気は急落した。JSL 発足から 20 年後の 1985（昭和 60）年、ワールドカップへの切符をかけ最終予選に進む。相手は、メキシコオリンピック予選では得失点差で本大会出場を逃した韓国、奇しくも本大会の開催国はメキシコであった。

雨中の激闘

名勝負!!

日本代表　対　韓国代表　3 - 3

第 19 回オリンピック競技大会（メキシコシティ）サッカー競技アジア第 1 地区予選第 4 戦
1967（昭和 42）年 10 月 7 日　国立霞ヶ丘競技場（東京）

最も激しい日韓戦と語り継がれている試合。

メキシコオリンピックのアジア地区第 1 組予選は、日本、韓国、フィリピン、中華民国（台湾）、レバノン、南ベトナムの 6 カ国総当たりのセントラル方式（東京）で行われ、1 位が本大会に出場する。ともに 3 戦全勝で迎えた日本対韓国の試合は、東京オリンピックによる強化や JSL の発足による試合増加もあり、日本有利の予想であった。雨中の日韓戦は 2 点リードで前半を終えたが 51 分、69 分にゴールを奪われ同点。直後の 70 分に釜本邦茂のゴールで引き離すが、72 分に再度追いつかれた。終了間際に韓国のロングシュートがゴールのクロスバーに直撃するなど、薄氷の引き分けであった。最終戦は両国ともに勝利し、得失点差で日本が本大会への切符を手にした。

本大会の 1 次リーグは B 組でナイジェリアに 3 - 1 で勝利し、ブラジルには 1 - 1 で引き分け。最終戦の対戦はスペインであったが、トーナメント 1 回戦で開催国メキシコとの対戦を回避するため引き分け狙いで 0 - 0 とし、2 位通過となった。トーナメント初戦は 3 - 1 でフランスに勝利するも準決勝は 0 - 5 でハンガリーに大敗し、3 位決定戦にまわり、銅メダル獲得に至った。

36. スポーツ・マガジン　8（3）＝87　1966（昭和 41）年 3 月　ベースボール・マガジン社＜Z780.5-Su2＞

JSL 初年度の総括記事。初年度の成果として、競技力の向上とサッカーの普及をあげている。東京オリンピックの好成績は「一握りの選手に特殊な訓練を行って達成した特殊例」(『東京オリンピック選手強化対策本部報告 日本体育協会』1965 年) とあり、JSL は国内でのレベル向上のために実力の伯仲したチームによるリーグ戦が必要であるとして、東京オリンピックの翌年に発足した。

37. サッカーマガジン　2（12）＝19　1967（昭和 42）年 12 月　ベースボール・マガジン社＜Z11-19＞

事実上の決勝戦である韓国戦は、国立競技場に 6 万を超える観客を集めた。13 分、八重樫茂生のシュートが韓国でフェンスに当たり跳ね返ったボールを宮本輝紀がボレーで決め、先制した場面。その後も杉山隆一が追加点を決め、前半を 2 点リードで折り返した。

アサヒグラフ　2336　1968（昭和 43）年 11 月 8 日　朝日新聞社＜Z23-5＞

開催国メキシコとの 3 位決定戦は、17 分と 39 分に釜本が得点し、前半を 2 - 0 でリードした。後半開始直後、日本はペナ

ルティキックを取られるが、ゴールキーパー横山謙三が防いだ。自国の不甲斐なさに憤った観客が途中から日本を応援することになり、試合は 2 - 0 のまま勝利、銅メダルを獲得した。また、釜本が得点王に輝いた。

メキシコの青い空

○韓国代表　対　日本代表●　2 - 1

1986FIFA ワールドカップメキシコ大会東アジア地区最終予選（第 1 戦）

1985（昭和 60）年 10 月 26 日　国立霞ヶ丘競技場（東京）

「東京・千駄ヶ谷の国立競技場の曇り空の向こうに、メキシコの青い空が近付いているような気がします。」

サッカーの実況で知られる山本浩アナウンサーの名台詞と木村和司の芸術的フリーキックとで知られる試合。

1980 年代に入り、サッカー人気は回復しつつあった。1976（昭和 51）年度から全国高等学校サッカー選手権大会の日本テレビ系列での全国放送開始、1981（昭和 56）年 2 月からインターコンチネンタルカップ（トヨタカップ）の日本開催、同年 4 月からは『少年ジャンプ』で「キャプテン翼」の連載が始まる。1978（昭和 53）年から全国で巡回開催されたセルジオ越後らによる「さわやかサッカー教室」も競技人口の裾野を広げた。また、JSL でも旧来

の実業団とは一線を画する読売クラブと日産自動車が台頭し始めた。

ワールドカップメキシコ大会アジア予選は、東西に分けて行われた。日本は、東アジア地区1次予選第4組Aゾーンを3勝1分で突破し、2次予選は同組Bゾーン1位の香港に勝利し最終予選に進んだ。最終予選、韓国に勝利すればワールドカップ初出場が決まるところだったが、国立競技場での第1戦を1-2で落とすと、ソウルでの第2戦も0-1で敗れた。

38. サッカーダイジェスト　7（1）＝80　1986（昭和61）年1月　日本スポーツ企画＜Z7-1159＞

第1戦、国立競技場には6万人を超える観客が集まった。前半のうちに2点を奪われるが、前半終了間際、木村がドリブルで持ち込み、ゴール前 25mで倒されフリーキックを得た。木村のフリーキックは美しい弾道を描きゴール右隅に決まった（右ページ最下段及び左ページ下段の写真）。

39. イレブン　16（1）＝188　1986（昭和61）年1月　日本スポーツ出版社＜Z11-486＞

「日韓の差は何か？」と問うこの記事の答えは、森孝慈監督の「日本サッカーもプロを」であり、選手の多くも同じ認識であった。韓国は1983（昭和58）年にプロ・リーグを発足させており、得点差以上の実力差があった。1986（昭和61）年3月、森監督はJFAに監督としてのプロ契約を求めたが受け入れられず辞任する。一方、同年からJSLでは選手のプロ化が始まる。

40. イメージ・オブ・Jリーグ　Jリーグ公式写真集 1　J.league photos INC. 著　Jリーグフォト　1994（平成6）年3月＜KD978-E217＞

Jリーグ発足の開幕戦1993（平成5）年5月15日のヴェルディ川崎（現・東京ヴェルディ）対横浜マリノス（現・横浜F・マリノス）のチケットを手にする少年。開幕戦のチケットは抽選で平均倍率14倍であった。

試合前には開幕セレモニーが行われ、川渕三郎チェアマンがJリーグの開会を宣言した。試合は19分、川崎のマイヤーがJリーグ初ゴールを決めるが、48分にエバートン、59分にディアスが得点し2-1で横浜が逆転勝利した。

コラム

JSLからJリーグへ

1986（昭和61）年5月、日本体育協会は加盟団体の責任で選手資格を決めるとする「スポーツ憲章」を制定した。これを受けたJFAはプロ選手登録を認め、選手のプロ化が始まった。JSLは人気回復のため20周年記念ポスターを作成したり、国立競技場を満員にするプロジェクトを実施したりしたものの、観客数は伸び悩んだ。また、ソウルオリンピック予選は最終戦で中国に敗れ（1987（昭和62）年10月）、イタリアワールドカップ予選は1次予選で敗退（1989（平成元）年5月～6月）し、選手のプロ化は代表強化には繋がらなかった。

1988（昭和63）年、JSLは活性化委員会を設置、翌年3月にJFAに対しプロ・リーグ創設とワールドカップ招致を提言した。提言を受けたJFAは、同年6月、「プロ・リーグ検討委員会」を発足させ、プロ・リーグ創設へ大きく舵を切った。JSLの1990／1991シーズンは、「ペレストライカー」と銘打ち、ポスターには当時ソ連書記長であったゴルバチョフのそっくりさんを起用、日本サッカーの改革を前面に打ち出した。

1991（平成3）年7月、2年後に開幕する新たなサッカーのプロ・リーグの名称が発表された。「日本プロサッカー・リーグ」＝「Jリーグ」である。

柔道　Judo

戦前 ～ 戦後

触らずに投げる！？　空気投げ

○三船久蔵　対　佐村嘉一郎●

1930（昭和 5）年 11 月 16 日

明治神宮外苑相撲場

第 1 回全日本柔道選士権

名勝負!!

空気投げとは、相手の柔道着のはじをつかむだけで、空気のように投げる技。「隅落」とも言う。自分の重心を低くして、相手の攻撃の力を利用する。展示資料 43（三船久蔵『道と術　柔道経典』1954（昭和 29）年）には「自他接近した場合、自体の何処へも触れずに、相手を倒したいと思つた私の理想から生まれて来た技」「相手に触れず、身体の捌きによつて、見事に倒す」とある。

三船と佐村は当時の実力最高峰の二人。三船は空気投げを長年研究していたが、実力対等の相手にこの技をかけたのは初めてであった。見事決まって、拍手喝采だったという。

42. 柔道百年の歴史　1970（昭和 45）年　講談社＜FS37-23＞

講道館設立から 100 年を記念して出版された本。時代ごとにトピック、選手を紹介している。三船のページには、右上に空気投げが決まった瞬間の写真。右下には双葉山とのツーショットも。

43. 道と術　柔道教典　三船久蔵著　1954（昭和 29）年　誠文堂新光社＜789.2-M459m＞

晩年の三船が著した柔道の解説書。展示箇所は「隅落」＝「空気投げ」実演の様子。

木村の前に木村なく、木村の後に木村なし

○木村政彦　対　石川隆彦●

1940（昭和 15）年 6 月 20 日

皇居内済寧館

名勝負!!

紀元 2600 年を記念した剣道、弓道、柔道の天覧試合。1937（昭和 12）年～39（昭和 14）年の全日本柔道選士権を制覇していた木村政彦は最強と目されており、石川隆彦とはすでに 2 度戦い 2 度とも勝っていた。しかし、石川も天覧試合に向けて調子をあげてきている。木村には、師牛島辰熊が果たせなかった天覧試合での優勝というプレッシャーがかかってい

た。木村は何度も一本背負いをかけようとし、石川は必死に防ぐ。しかし、わずか 42 秒で背負い投げが決まった。

44. 紀元 2600 年奉祝昭和天覧試合　大日本雄弁会講談社　1940（昭和 15）年 大日本雄弁会講談社＜772-172＞

天覧試合の記録。木村対石川については、「石川、つと進み出て、右に組む。木村、受けて左に組む。石川、如何なる作戦ありや。」と臨場感あふれる記述となっている。

優劣つかず、二人優勝

木村政彦　対　石川隆彦　引き分け

1949（昭和 24）5 月 5 日

仮設国技館

全日本柔道選手権大会

戦後 2 回目の全日本柔道選手権大会。石川は木村への雪辱を誓い、これに負けたら引退する覚悟で臨んだ。一方木村は戦時中からほとんど稽古をしていない状態だったが、木村が一本背負いを何度も狙い石川が逃げる、の繰り返しとなり延長 2 回。30 分にも渡る試合は、結局引き分け（両者優勝）となった。審判は空気投げの三船久蔵。

45. サン写真新聞 ＝The Sun pictorial daily　952　1949（昭和 24）年 5 月 7 日　サン写真新聞社＜071-Sa628＞

サン写真新聞は、日本初のタブロイド版夕刊紙。1960（昭和 35）年廃刊。その後のタブロイド紙に影響を与えたが、文字は横書き。紙質や粗い印刷からは、戦後の雰囲気が伝わる。

神猪時代

1960（昭和 35）年前後の柔道界は「神猪時代」と呼ばれる。1959（昭和 34）年、60（昭和 35）年、61（昭和 36）年と 3 年連続で全日本柔道選手権の決勝を戦って神永の 2 勝 1 敗という結果は、当時の両者の実力が如何に拮抗し、かつ他の選手たちに比べて頭一つ抜けていたかを物語る。

このように国内では日本一の座をかけて激しく火花を散らした両者であったが、この頃の日本柔道界は海外にも目を向ける必要があった。外国人選手の台頭である。1956（昭和 31）年に開催された最初の世界柔道選手権では日本人選手が外国人選手を圧倒した。しかしそれからわずか 5 年後、1961（昭和 36）年パリ世界選手権におけるヘーシンク（オランダ）の優勝が日本柔道界を大混乱に陥れたのである。1964（昭和 39）年の東京オリンピックでは、日本国民の前で日本柔道が負けるわけにはいかない。ヘーシンクと対するのは神永か猪熊か。

結果として神永が対戦し、ヘーシンクに敗れた（⇒東京オリンピックへの参照）。その翌年にヘーシンクが引退したため、猪熊が雪辱を果たす機会は永久に失われた。神猪時代は日本柔道史の転換期だったのかもしれない。

○猪熊功－神永昭夫● 1959（昭和 34）年 5 月 5 日
○神永昭夫－猪熊功● 1960（昭和 35）年 5 月 1 日
○神永昭夫－猪熊功● 1961（昭和 36）年 4 月 30 日
東京体育館
全日本柔道選手権

46. 週刊東京　5（21）＝192　1959（昭和 34）年 5 月 23 日　東京新聞社＜Z051.6-Sy5＞
1959（昭和 34）年の全日本柔道選手権で、一本背負いに入る直前を捉えた貴重な写真。猪熊が初出場、しかも学生で全日本のタイトルを獲得したのは大会史上初であると伝える。
47. 日刊スポーツ[東京]　5134　1960（昭和 35）年 5 月 2 日　日刊スポーツ新聞社＜Z86-2＞
1960（昭和 35）年の全日本柔道選手権。神永が初優勝で猪熊に雪辱を果たしたことを伝える。
48. 週刊現代　6（40）　1964（昭和 39）年 10 月 8 日　講談社＜Z24-19＞
「打倒ヘーシンク」と題して、10 月 10 日から始まる東京オリンピックに向けた神永と猪熊のトレーニングを紹介した記事。

山下　対　斉藤

史上最強の柔道家は誰か？――柔道ファンの間で大激論になるはずのこの問題は、しかし、「戦後の柔道界で」という限定を付すならばおそらく「山下泰裕」で衆目は一致するのではないか。引退までに公式戦 528 勝 16 敗 15 分、そのうち 203 連勝（引き分け含む）、外国人選手に対して無敗（116 勝 3 分）という偉大な記録が破られることはないだろう。

全日本柔道選手権でも 1977（昭和 52）年から 85（昭和 60）年まで 9 連覇という空前絶後の記録を残しているが、その最後の 83（昭和 58）年から 85（昭和 60）年にかけて山下と決勝を戦ったのが斉藤仁である。84（昭和 59）年ロサンゼルス五輪において山下は無差別級で、斉藤は 95kg 超級でそれぞれ金メダルを獲得しており、山下と斉藤が争ったこの 3 年間の全日本柔道選手権はまさに「柔道最強者決定戦」であったと言っても過言ではない。

結果的に山下が 3 年連続で斉藤を下したが、いずれも接戦だった。特に 85（昭和 60）年の決勝戦ははじめ斉藤が優位に立ったが、終盤に山下が鬼気迫る追込みを見せて逆転勝利をおさめるという内容だった。この対決のあと山下は現役引退を表明し、「山下時代」は終わりを迎える。斉藤は山下との対決を通して大きく成長し、88（昭和 63）年ソウル五輪で優勝するなど日本柔道界を牽引する存在となる。

斉藤、山下の連覇阻止に挑む

○山下泰裕－斉藤仁●　1983（昭和 58）年 4 月 29 日
○山下泰裕－斉藤仁●　1984（昭和 59）年 4 月 29 日
○山下泰裕－斉藤仁●　1985（昭和 60）年 4 月 29 日
日本武道館
全日本柔道選手権

49. 近代柔道　5（6）＝44　1983（昭和 58）年 6 月　ベースボール・マガジン社＜Z7-1152＞
1983（昭和 58）年の全日本柔道選手権決勝は山下の判定勝ち。展示箇所は優勝旗を持つ山下と、試合の様子。

50. 朝日報道写真　1984（昭和 59）年 4 月 29 日＜Y811-11＞
1984（昭和 59）年の全日本柔道選手権決勝で、山下が技をかけた瞬間の写真。山下が有効（注意）優勢勝ち。

51. 近代柔道　7（6）＝70　1985（昭和 60）6 月　ベースボール・マガジン社＜Z7-1152＞
1985（昭和 60）年の全日本柔道選手権決勝で、判定により山下の 9 連覇が決まった瞬間。

52. 明星　33（8）　1984（昭和 59）年 8 月　集英社＜Z24-475＞
ロサンゼルスオリンピックに出場する選手を紹介する連載。二人がイラストで図解されている。スポーツ選手もこのような形でアイドル誌に登場した。この号の表紙は田原俊彦、松田聖子。

平成の三四郎、無差別級を席巻

「柔よく剛を制す」身体の小さな者が、身体の大きな力自慢を軽々と投げ飛ばす。まさに柔道の理想であり、また醍醐味でもある。だが、公式試合にウェイト制が導入されて以来、別階級同士の対戦は激減した。体重無差別の全日本柔道選手権大会はその貴重な例外だが、1967（昭和 42）年の岡野功を除き、歴代の全日本選手権優勝者はすべて重量級の選手であった。だからこそ、平成の三四郎と呼ばれた古賀稔彦が 1990（平成 2）年全日本選手権の予選を勝ち抜いて本戦に出場したことはそれ自体驚きをもって迎えられた。古賀の技量は誰もが認めるところであったが、体重のハンデはやはり大きい。観衆の興味は「どこまで勝ち上がれるか」であり、優勝争いに絡むことを、予想する者はほとんどいなかっただろう。

ところが、169cm・76kg の古賀は重量級の選手たちを次々と打ち破る。決勝進出を決めた瞬間の観衆の熱狂は如何ばかりであったか。

決勝で古賀を迎え撃つのは前年度覇者、193cm・130kg の小川直也。体重差は 54kg である。前年度の世界選手権（ベオグラード）で日本にただ二つの金メダルをもたらしたまさにその二人、日本柔道界の二枚看板が日本一の座を賭けて戦う――。日本中の柔道ファンの「夢」が結実した、まさにその瞬間である。

53. 近代柔道　11（12）＝125　1989（平成元）年 12 月　ベースボール・マガジン社＜Z7-1152＞
ベオグラードでの世界選手権において、小川は 95kg 超級で金メダル、71kg 以下級で古賀が金メダルを獲得した。二人が金メダルを見せながら並んだ表紙からは、体格差がよくわかる。二人とも当時大学 4 年生。二人の対談記事も掲載されている。

本武道館が奇跡に包まれた日

〇小川直也　対　古賀稔彦●

1990（平成 2）年 4 月 29 日

日本武道館

全日本柔道選手権

54. 日刊スポーツ[東京]　15911　1990（平成 2）年 4 月 30 日　日刊スポーツ新聞社＜Z86-2＞

「重量級の意地見せた」と小川の全日本柔道選手権連覇を報じると同時に、「歴史作った準 V」と古賀を讃える記事。左上には古賀の 2 回戦以降の対戦をまとめて掲載している。

55. 近代柔道　12（6）　1990（平成 2）年 6 月　ベースボール・マガジン社＜Z7-1152＞

展示箇所は、「夢　実現」と題し、二人の試合を写した折り込み写真。この号には「日本武道館が奇跡に包まれた日。」という、古賀の決勝進出を追った記事も掲載されている。

戦前 ～ 戦後

北の鉄人、前人未踏の 7 連覇

○新日鉄釜石　対　同志社大学●　31 - 17

1985（昭和 60）年 1 月 15 日

国立競技場

第 22 回日本ラグビーフットボール選手権大会決勝

名勝負!!

大会 7 連覇に挑む新日鉄釜石と史上初の大学選手権 3 連覇を達成した同志社大学との 3 年連続の対決となった。平尾誠二、大八木淳史の二人の日本代表を中心とした同大に対して、釜石にとっては司令塔としてチームを引っ張ってきた松尾雄治の引退試合でもあった。松尾は、社会人大会で痛めた足首のけがにより欠場も予想されたが、痛み止めを打って出場した。6 万人を超す大観衆で埋まった中で始まった試合は、同大が前半に 1 点差をつけ善戦したが、後半は地力に勝る釜石が連続トライを奪い同大を突き放して、日本選手権 7 連覇を達成、松尾の引退に花を添えた。

56. ラグビーワールド　2（3）＝5　1985（昭和 60）年 3 月　悠文社＜Z11-1423＞

突進する釜石フォワード。

57. ラグビーマガジン　14（4）＝135　1985（昭和 60）年 3 月　ベースボール・マガジン社＜Z11-511＞

表紙は松尾の胴上げ。

雪の早明戦

○早稲田大学　対　明治大学●　10 - 7

1987（昭和 62）年 12 月 6 日

国立競技場

関東大学ラグビー対抗戦

名勝負!!

前日からの雪のため、ぬかるんだグランドでの試合となった。試合終了間際、3 点を追う明大は、同点では優勝に届かないため、攻め込んだ早大ゴール前で、ペナルティーゴールを狙わずに、繰り返し FW 戦を挑んだ。再三のスクラムでは体から湯気が立ち上った。早大は伝統のタックルで必死に守り抜きノーサイド。なおこの試合では、早大の堀越正巳、今泉清、明大の吉田義人など、後の日本代表選手が 1 年生で出場した。

早大は年が明けた直後の大学選手権を制し、日本選手権では、社会人の東芝府中を破り 16 年ぶりの日本一となった。大学チームの日本選手権制覇はその後ない。

58. ラグビーワールド　5（2）＝41　1988（昭和 63）年 2 月　悠文社＜Z11-1423＞
両チームを「荒ぶる早大　重戦車明大」と形容。展示箇所は堀越、今泉の活躍を伝えるページ。

終了間際の劇的な逆転独走トライ

○神戸製鋼　対　三洋電機●　18 - 16
第 43 回全国社会人ラグビーフットボール大会決勝
1991（平成 3）年 1 月 8 日
秩父宮ラグビー場

3 連覇がかかる神戸製鋼と、悲願の初優勝を目指す三洋電機との対戦。

強力 FW の三洋は後半 30 分過ぎまで 16 - 12 とリードし、ここまで、神戸製鋼はノートライ。後半ロスタイムも 3 分を経過した頃、平尾誠二からのパスを受けたイアン・ウィリアムス（Ian Williams)が、50mを独走して、ゴール中央に同点のトライ。続くゴールキックも決まり、ノーサイド。神戸製鋼が劇的な逆転勝ちを収めた。

神戸製鋼は、引き続く日本選手権でも明治大学を圧倒して 3 連覇を達成。以後も連覇を重ねて、新日鉄釜石
並ぶ日本選手権 7 連覇の偉業を達成した。

59. ラグビーマガジン　20（4）　1991（平成 3）年 3 月　ベースボール・マガジン社＜Z11-511＞
ウィリアムスの独走を正面からとらえた写真。

伊達、グラフを破る

○伊達公子　対　シュテフィ・グラフ（ドイツ）●　2 - 1

フェド杯ワールドグループ１回戦　ドイツ対日本

1996（平成 8）年 4 月 28 日

有明コロシアム

名勝負!!

女子テニスの国別対抗戦のシングルス戦。世界ランキング 7 位の伊達は、前日の試合で左ひざを痛めていた。相手は世界ランキング 1 位の女王グラフ（Steffi Graf）。伊達は過去 6 回のグラフとの対戦で一度も勝っていない。第 1 セット、グラフが 5 - 0 で一方的にリードしたが、そこから伊達が大逆転し 7 - 6 で先取。第 2 セットをグラフが取った後、第 3 セットは一進一退の攻防が続き、第 22 ゲームまでもつれた末に、12 - 10 で伊達が奪い、グラフから初勝利を奪った。引き続くダブルス戦でも日本ペアがドイツペアを下し、準決勝に進出した。

60. テニスマガジン　27（11）＝446　1996（平成 8）年 6 月 20 日　ベースボール・マガジン社＜Z11-459＞

「これまでのテニス人生の中でも一番の勝利です」と伊達のコメント。

61. 日経写真ニュース　2066　1996（平成 8）年 5 月 2 日　日本経済新聞社＜Z80-1019＞

62. テニスジャーナル　15（7）　1996（平成 8）年 7 月　スキージャーナル＜Z7-1383＞

「伊達はこうしてグラフに勝った」と題した、フェドカップコーチ丸山薫による記事。脚の故障とその影響等、9 つの疑問を軸として勝因を解説する。

グラフ、伊達に雪辱

○シュテフィ・グラフ　対　伊達公子●　2 - 1

ウィンブルドン選手権女子シングルス準決勝

1996（平成 8）年 7 月 4 日、5 日

オールイングランド・ローンテニス・アンド・クローケー・クラブ（イギリス）

名勝負!!

ウィンブルドン選手権で準決勝に初めて進出した伊達と女王グラフとの最後の対戦。

第 1 セットはグラフが 6 - 3 で先取した。第 2 セットは、伊達が途中から 6 ゲームを連取して 6 - 2 で取り返したが、そこで日没のため試合が中断し、翌日に持ち越された。翌日再開後の第 3 セットは、サービスに勝るグラフが 6 - 3 で取り、日本人選手初の 4 大大会決勝進出はならなかった。当時のスポーツ新聞には「日没なければ勝てたかも」（『日刊スポーツ』

出はならなかった。当時のスポーツ新聞には「日没なければ勝てたかも」（『日刊スポーツ』1996（平成 8）年 7 月 6 日）といった文字が並んだ。

伊達はこの年秋に突然引退を表明したが、2008（平成 20）年に 12 年ぶりに現役復帰し、2013（平成 25）年の同大会の女子シングルスでは、3 回戦まで進出した。

63. 日経写真ニュース　2076　1996（平成 8）年 7 月 11 日　日本経済新聞社＜Z80-1019＞

64. Tennis classic　17（9）＝206　1996（平成 8）年 9 月　日本文化出版＜Z11-1545＞

文末には「来年こそ」とあるが、直後に引退が発表された。

青木・ニクラスの 4 日間

名勝負!!

○ジャック・ニクラス（アメリカ）　対　青木功●

8 アンダー（272）-6 アンダー(274)

第 80 回全米オープン

1980（昭和 55）年 6 月 12 日～15 日

バルタスロール・ゴルフクラブ（アメリカ、ニュージャージー州）

青木は、メジャー大会 15 勝を誇る「帝王」ニクラス（Jack Nicklaus）と 4 日間同組でプレーすることとなった。3 日目の第 3 ラウンド終了時点で、両者共に 6 アンダーで首位に並んだ。最終日、青木はアウトでスコアを 3 つ落とし、ニクラスと 2 打差がついた。インに入ってからは互いに譲らぬ死闘が続き、10、17、18 番ホールでともにバーディをとり、最終的にニクラスが 2 打差で逃げ切り、8 年ぶり 4 度目の全米オープン制覇となった。最終ホール、ニクラスが優勝を決めるパットを沈めた瞬間、一斉に沸き立つギャラリーに対して、青木が残されたパットに集中できるよう、これを制したニクラスの姿が印象的であった。なお青木の 2 位入賞は、現在でも日本男子ゴルフ界における海外メジャー大会最高記録である。

65. ゴルフマガジン　29（8）　1980（昭和 55）年 8 月　ベースボール・マガジン社＜Z11-107＞

「帝王を震撼させた青木の神技」「日本のゴルフ史に偉大なエポックを画した 6 月の熱い日」といった見出しが並ぶ。「（モスクワ）オリンピック日本不参加のうっぷんをはらしてくれた」という人も。

66. 日刊スポーツ[東京]　12387　1980（昭和 55）年 6 月 17 日　日刊スポーツ新聞社＜Z86-2＞

奇跡の逆転イーグル

名勝負!!

○青木功　対　ジャック・レナー（アメリカ）●

20 アンダー（268）- 19 アンダー（269）

ハワイアンオープン・ゴルフトーナメント

1983（昭和 58）年 2 月 13 日（最終日）

ワイアラエ・カントリークラブ（アメリカ、ハワイ州）

首位と 1 打差をつけられて、迎えた最終日の最終ホール、ピンまでの距離 128 ヤードの地点から青木の放ったショットは、グリーンに向かい直接カップインするイーグルとなり、劇的な逆転優勝を飾った。青木は米国ツアーに初参加してから 10 年目で、米国ツアーにおける日本人男子選手初優勝を成し遂げた。

67. 週刊アサヒゴルフ　13（8）　1983（昭和 58）年 3 月 2 日　廣済堂出版＜Z11-888＞

「神は我に味方せり」というタイトルがついた記事。左下には、日本人、日系人が応援にかけつけている様子も。

日本人初のタイトル獲得

名勝負!!

○白井義男　対　ダド・マリノ（アメリカ）●　3 - 0（判定勝ち）

世界フライ級タイトルマッチ

1952（昭和 27）年 5 月 19 日

後楽園球場

1943（昭和 18）年にプロデビューした白井は、翌年海軍に召集されたが、復員後、GHQ 天然資源局に勤務していたアルビン・R・カーン（Alvin R. Cahn）博士の支援のもと、科学的トレーニングにより実力をつけていった。1951（昭和 26）年、世界王者のマリノ（Dado Marino）とノンタイトル戦を 2 回戦い 1 勝 1 敗とした。世界タイトルをかけた試合は、後楽園球場の特設スタジオに 4 万人の観客がつめかけた。試合は最終 15 ラウンドまでの熱戦の末に白井が判定勝ちし、日本人初の世界王者となった。この快挙は、当時、戦後復興の途上にある多くの国民の希望を体現したものであった。

以後白井は 4 度の防衛を果たし、1955（昭和 30）年に引退したが、日本に永住したカーン博士との交流は白井の引退後まで続いた。

68. 毎日グラフ　5（17）＝122　1952（昭和 27）年 6 月 10 日　毎日新聞社＜Z23-6＞

試合の経過を、映画のコマ送りのように表示している。家庭にテレビが普及するまではよくとられた手法。右に白井の婚約者のラジオを聴きながらの応援、左にマリノ夫人の会場での応援の様子を配置している。

19 歳の世界チャンピオン

名勝負!!

○ファイティング原田　対　ポーン・キングピッチ（タイ）●

11R　KO 勝

1962（昭和 37）年 10 月 10 日

蔵前国技館

当時 19 歳の原田は、世界フライ級王座に初挑戦。原田は、序盤から連打で試合の主導権を握り、11R に世界王者のポーン（Pone Kingpetch）を相手コーナーに追い詰めて連打を浴びせ、コーナーロープに腰を落としたポーンからダウンを奪って勝利した。

しかし 3 か月後にバンコクで行われた再戦では、ポーンが際どい判定で勝利をおさめ、原田は王座を失った。以後、原田はバンタム級に転向し、2 階級制覇を成し遂げた。

69. プロレス＆ボクシング　8（13）　1962（昭和 37）年 11 月 ベースボール・マガジン社＜Z788.2-P2＞
試合の経過のほかに、所属ジムでの祝賀会、疲れを癒すお風呂場での原田の様子を掲載。白井義男が原田の頭をなでる図も。

悲劇のチャンピオン

名勝負!!

○大場政夫　対　チャチャイ・チオノイ（タイ）●　12R　KO 勝

1973（昭和 48）年 1 月 2 日

日大講堂

常に減量に苦しんだ大場にとって 5 度目の防衛戦となった相手は、ベテランで「稲妻小僧」といわれたチャチャイ・チオノイ（Chartchai Chionoi）。初回、いきなりの右ロング・フックをまともに受けた大場はダウンして右足首をねんざしたが、試合中盤から形勢を逆転。12 回にチャチャイに連打を浴びせて 3 度のダウンを奪い、逆転 KO 勝ちを収め、5 度目のタイトル防衛に成功した。

ところが、タイトル防衛後間もない 1 月 25 日、大場は愛車を運転中に首都高速のカーブで、反対車線の大型トラックと正面衝突する事故を起こし、23 歳で死去した。悲劇的な最期により、大場の試合はより強くファンの記憶の中に刻まれることとなった。

70. 日刊スポーツ[東京]　9719　1973（昭和 48）年 1 月 3 日　日刊スポーツ新聞社＜Z86-2＞
71. ボクシングマガジン　3（3）　1973（昭和 48）年 3 月　ベースボール・マガジン社＜Z11-1006＞
タイトル防衛を伝えた 2 月号に続いて、3 月号では、無残に壊れた愛車シボレーの写真や葬儀の様子を掲載。

コラム

ボクシング番組ブームがあった

初めてテレビでボクシングが放送されたのは、1953（昭和 28）年 5 月 18 日の白井義男対ダニー・カンポ戦である。NHK が録画を放送した。民放では日本テレビの同年 10 月 27 日の白井義対テリー・アレン戦が最初である。日本テレビは翌年の 12 月から定期番組「ダイナミック・グローブ」を開始。この頃は街頭テレビで観戦する人が多かった。

高視聴率が取れることがわかり、各局がボクシング番組を始め、1961（昭和 36）年の年末には紅白歌合戦の裏番組としてボクシングが登場（今でも格闘技が裏番組になることが多い）。1962（昭和 37）年 10 月 10 日の原田対キングピッチ戦でブームは頂点に達した。同一局でも週に複数の番組が放送され、1962（昭和 37）～1963（昭和 38）年は、なんと 1 週間に 10～12 ものボクシング番組が放送されていた。

しかし、その後は徐々に番組は減っていく。かわりに、60 年代後半から数年にわたりキックボクシングがブームとなった。スポーツの流行は一体何によるものなのだろうか。

力道山の時代

第二次大戦後、大相撲からプロレスに転向した力道山は、特に街頭テレビ時代、国民的ヒーローとして注目を集めました。ここでは、力道山の数多い勝負の中から、代表的な 3 つをご紹介します。

相撲対柔道、“昭和の巌流島”対決　流血の結末

名勝負!!

力道山　対　木村政彦　15 分 49 秒ドクター・ストップ
1954（昭和 29）年 12 月 22 日
蔵前国技館

大相撲の元関脇で、前年に「日本プロ・レスリング協会」を立ち上げた力道山と、柔道で全日本選士権 3 連覇などの記録を打ち立てた木村政彦が対決し、力道山の一方的な勝利に終わった試合。大相撲・柔道出身の大物対決ということで注目され、しかも凄惨な試合展開となったことから、歴史的勝負として語り継がれている。

力道山と木村は、同年 2 月のシャープ兄弟との対決ではタッグを組んでいたが、その後独自団体を立ち上げた木村が、力道山のプロレスはショー的であるとして対決を挑んだ。

試合開始後しばらくは、木村が一本背負いから寝技に持ち込もうとするのを力道山が二丁投げで逆襲するなどの攻防はあったが、比較的穏やかな展開であった。しかし 15 分過ぎ、木村が力道山の下腹部を蹴り上げたのを機に、力道山が張り手・空手チョップ・蹴りの猛攻を浴びせる。木村は流血し昏倒、15 分 49 秒でドクターストップとなった。

試合後、力道山は「木村君はひそかに引分けに持って行こうといってきた。自ら挑戦状をたたきつけながら、そのようなことをいうのはとんでもないことだ」（展示資料 72 より）と木村を非難したが、引き分けという合意を力道山が一方的に破棄したという説もあり、こうした試合展開となった背景は今日まで論議を呼んでいる。

72. スポーツニッポン[東京]　2142 1954（昭和 29）年 12 月 23 日　スポーツニッポン新聞東京本社＜Z86-4＞
掲載写真は、木村を容赦なく猛攻撃する力道山の気迫をよく捉えている。

73. 面白倶楽部　8（3）　1955（昭和 30）年 2 月　光文社＜Z31-232＞
東武者男なる人物による「プロレス戦国史」という記事。力道山や木村がプロレス入りした経緯から、この試合までのいきさつを詳述。プロレスはそもそも筋書きがあるものであり、二人がタッグを組んでいたときに筋書きの不公平により感情的なしこりが生じていたことを伝える。試合の前に書かれたもので、「大時代的な決闘模様が、近代的なスポーツとしての勝負に転化する」と期待している。

鉄人ルー・テーズへの力道の挑戦、引き分けで決着！

名勝負!!

力道山　対　ルー・テーズ　61 分フルタイムドロー

1957（昭和 32）年 10 月 7 日

後楽園球場

力道山が、NWA（全米レスリング同盟）ヘビー級チャンピオンの座にあったルー・テーズ（Lou Thesz）に挑戦した試合。

力道山は、「プロレス史に残る大レスラー」（同年 10 月 2 日『毎日新聞』朝刊）テーズとのタイトル・マッチをかねてから熱望していた。テーズは、羽田空港に降り立った際の歓迎ぶりに驚いたとのちに回想している。10 月 6 日の予定が雨で順延となり、7 日の試合当日、後楽園球場に集まった観客は 2 万 7 千人（展示資料 74 より）だったという。

力道山は当初空手チョップで攻めたが、テーズはレフェリーに反則をアピール。以後、寝技での攻防も目立つ。ヘッドロックでの攻めに切り替えた力道山に対し、テーズは得意技のバックドロップ（当時は「脳天割り」「岩石落し」とも呼ばれた）をかけ、力道山はフォール寸前となったが跳ね返した。その後、再度のバックドロップ攻撃には力道山が河津掛けでこれを防ぎ、終盤空手チョップで攻め込んだものの 61 分で時間切れ引き分けとなった。
10 月 13 日には大阪・扇町プールで再戦が行われたものの、こちらも両者リングアウトで引き分けとなり、力道山のチャンピオン奪取はならなかった。テーズはこれ以降しばしば来日し、「鉄人」の異名で親しまれた。

74. 日刊スポーツ[東京]　4264　1957（昭和 32）年 10 月 8 日　日刊スポーツ新聞社＜Z86-2＞
「力道、“世界一”を逸す」と大見出しで報じている。

覆面レスラーとの死闘、足 4 の字固めでレフェリーストップ！

名勝負!!

力道山　対　ザ・デストロイヤー　28 分 15 秒レフェリーストップ

1963（昭和 38）年 5 月 24 日

東京体育館

力道山が、覆面レスラーのザ・デストロイヤー（The Destroyer）と戦った、WWA（世界レスリング協会）ヘビー級選手権試合。

力道山、デストロイヤーともに絞め技から攻撃を開始した。途中、デストロイヤーが猛烈な頭突きを仕掛け、力道山は額から出血する。逆に力道山は、ロープにデストロイヤーの腹を

挟んで逆さ吊りにし、デストロイヤーはマットに倒れたものの、得意技の足 4 の字固め（技をかけたときに、両足の組み合わさった形が数字の「4」に見えることからこう呼ばれる）で逆襲。力道山もまたマットに倒れたが、両者の足は絡みついたまま動かせない状態で腫れあがり、レフェリーストップとなった。

この試合は日本テレビで 64.0%（ビデオリサーチによる）という高視聴率を得たが、プロレスから距離を置き始めていた朝日新聞・読売新聞はこの試合結果を報道しなかった。力道山は、暴漢に刺されたことが元で同年 12 月 15 日に死去、「力道山の時代」は終わりを迎えることになる。

75. 日刊スポーツ[東京]　6242　1963（昭和 38）年 5 月 25 日　日刊スポーツ新聞社＜Z86-2＞
「“死の足 4 の字” 力道たえる」という見出しで、足が絡みついた両者の写真が掲載されている。

コラム

街頭テレビとプロレス

テレビの本放送が始まったのは 1953（昭和 28）年。そのときの契約件数はわずか 866。家庭にテレビのない人は、街頭テレビに群がった。

挿絵：街頭テレビを見る人々の図
（毎日グラフ　8（41）＝283　1955（昭和 30）年 10 月 12 日　毎日新聞社＜Z23-6＞）

1955（昭和 30）年 10 月の調査によると、一カ月の間に街頭テレビをわざわざ見に行った人は 30%、そのうちプロレス 80.2、野球 36.1、相撲 35.4、映画 12.4%と、圧倒的にスポーツ中継、なかでもプロレスの人気が高い。

プロレスが初めてテレビで放送されたのは、1954（昭和 29）年 2 月 19 日、シャープ兄弟対力道山、木村政彦戦であった。NHK と日本テレビが放送した。NHK の河原武雄ははじめて見るプロレスを「大相撲のしょっきり（禁じ手を面白おかしく紹介する見世物）のよう」「観客は、力道山が白人をやっつけることで鬱憤した気持がすっきりするのか、とにかく大変な熱狂ぶりだった」と述べている。テレビなくしてプロレスと力道山の人気はあり得なかったし、プロレスと力道山あってのテレビ人気だったとも言えるだろう。

その後、1959（昭和 34）年の皇太子ご成婚パレードと 1964（昭和 39）年の東京オリンピックにより、テレビは一家に一台普及し、東京オリンピックの年には普及率 83%となる。

1970 年代 ～ 80 年代のプロレス

1963（昭和 38）年に力道山が亡くなると、プロレス界は群雄割拠の時代となり、1970 年代以降、全日本プロレス（ジャイアント馬場らが設立）と新日本プロレス（アントニオ猪木らが設立）がプロレス界の中心となっていきました。全日本が海外団体との太いパイプを武器としたのに対し、新日本は異種格闘技戦をも含めた新しいアイデアで挑戦しました。ここでは、全日本からは馬場の NWA ヘビー級選手権試合を、新日本からは 1980 年代のプロレスブームのきっかけを作ったタイガーマスク、長州力、藤波辰巳の試合をご紹介します。

ジャイアント馬場、日本人初の NWA 王者に！

名勝負!!

○ジャイアント馬場　対　ジャック・ブリスコ●　2 - 1（60 分 3 本勝負）

1974（昭和 49）年 12 月 2 日

鴨池体育館

全日本プロレスの看板レスラー・ジャイアント馬場が、NWA ヘビー級選手権試合でジャック・ブリスコ（Jack Brisco）に挑戦して勝利し、日本人初の NWA ヘビー級チャンピオンのタイトルを獲得した試合。

60 分 3 本勝負で行われたこの試合は、1 本目では前半馬場は守勢に回ったものの、後半攻めに転じ、河津落としでフォールを奪う。2 本目も、馬場は 16 文キックなどで攻めるが、ブリスコの足 4 の字固めに不覚を取る。そして決勝ラウンドの 3 本目、なおも足 4 の字を狙うブリスコに対し、馬場がネックブリーカー・バックドロップ（首折り落し）の大技を決め、ブリスコは後頭部からマットに沈んだ。この結果、馬場が 2 - 1 で NWA 王者の座を手にした。

1 週間後の 12 月 9 日、馬場は豊橋でブリスコに敗れ、わずか 8 日間でタイトルを失うが、2 度奪回を果たすなど息の長いレスラー生活を続け、1999（平成 11）年死去した。

76. プロレス　21（1）　1975（昭和 50）年 1 月　ベースボール・マガジン社＜Z11-1007＞

この試合について、グラビア・本文計 10 ページの特集を組んでいる。

タイガーマスク、衝撃のデビュー戦！

○タイガーマスク　対　ダイナマイト・キッド●

9 分 29 秒 ジャーマンスープレックスホールド

1981（昭和 56）年 4 月 23 日

蔵前国技館

名勝負!!

新日本プロレスの若手レスラーで、メキシコ・イギリスでのリング経験もあった佐山サトルが、梶原一騎原作の劇画『タイガーマスク』にちなむ覆面レスラー「タイガーマスク」としてデビューし、イギリス出身のレスラーであるダイナマイト・キッド（The Dynamite Kid）を、サマーソルトキック（コーナーにもたれている相手の胸板を蹴って、後ろ宙返りする技）など軽快かつ革新的な技を繰り出して破った試合。

試合開始から、タイガーマスクはイギリス仕込みの軽やかな身のこなしで、後ろ回し蹴り・ヘッドロック・サマーソルトキックなどの技を繰り出し、試合を優位に進めた。後半は一時場外での展開となり、カンフーキックを繰り出すタイガーマスクにキッドが延髄斬りで逆襲する場面もあったが、最終的にはリング内に戻り、ジャーマンスープレックスでタイガーマスクが勝利を手にした。展示頁では、得意技・サマーソルトキックを繰り出したタイガーマスクが鮮やかに宙に舞う写真が大きく掲載されている。

この試合はタイガーマスク、ひいてはプロレス全体の人気を呼び起こし、馬場・猪木に続く新世代のプロレスラーが台頭していくきっかけを作った。

77. プロレス　28（6）=352　1981（昭和 56）年 6 月　ベースボール・マガジン社＜Z11-1007＞

長州が藤波からタイトル奪取、“名勝負数え唄”の伝説的一戦に

○長州力　対　藤波辰巳●　16 分 39 秒 体固め

1983（昭和 58）年 4 月 3 日

蔵前国技館

名勝負!!

新日本プロレスの中堅だった長州力が、団体内では先輩にあたる藤波辰巳（現：藤波辰爾）から、WWF（世界レスリング連盟）インターナショナルヘビー級チャンピオンのタイトルを奪取した試合。

長州は、前年（1982（昭和 57））年 10 月 8 日の後楽園ホールでの試合で、タッグの仲間だった藤波に対しライバル意識を剥き出しにし、場外に藤波を蹴り出すなど挑戦的姿勢を示した。藤波は、「これが、『藤波、俺はおまえの噛ませ犬じゃない！』という言葉がのちに独り歩きして有名になる『噛ませ犬事件』である」（長州との共著『名勝負数え唄：俺たちの昭和プロレス』（2012（平成 24）年））と回想している。

これ以降、両者の間で多くのシングルマッチが組まれ、ついに本試合で長州がタイトルを奪取するに至った。
試合経過は、投げ技・固め技の応酬が続き、終盤に場外乱闘を経て藤波がジャーマンスープレックスを放ったが決まらず、逆に左足靭帯を痛めた。そして長州は独自のラリアット（「リキ・ラリアット」）で反撃、倒れた藤波にそのまま覆いかぶさり、ピンフォールを奪った。
本試合は、新しいタイプの「下剋上」的な一戦としてファンの間で反響を呼んだ。1980 年代に展開された両者の対決は、「名勝負数え唄」と呼ばれている。

78. 別冊ゴング　15（5）=167　1983（昭和 58）年 5 月　日本スポーツ出版社<Z11-1008>

コラム

大手一般紙がプロレスと縁遠くなった背景とは？

現在、プロレスについてはもっぱらスポーツ紙が記事としており、『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』といった大手一般紙が取り上げることはない。しかし、力道山が 1954（昭和 29）年に木村政彦と戦った頃、プロレスはその結果が大手一般紙にも掲載される存在であった。

本展示で紹介する勝負について、上記 3 紙の東京版を調査すると、1957（昭和 32）年の力道山対ルー・テーズ戦までは、いずれもその結果を取り上げている。しかし、1963（昭和 38）年の力道山対デストロイヤー戦は、力道山のプロレスを草創期からバックアップしていた『毎日新聞』のみが簡略に記載、1974（昭和 49）年の馬場対ブリスコ戦は 3 紙とも触れていない。

その背景として、「ショーかスポーツか」をめぐる議論と、プロレスの暴力性についての世論の批判があったと考えられる。早くも 1955（昭和 30）年 7 月 30 日、『朝日新聞』朝刊は「プロ・レス関係者の反省を望む」というコラムを掲載し、「流血を招くのはスポーツでもショーでもなく、ケンカ」であると批判した。また、1962（昭和 37）年にはプロレス観戦によるショック死が相次いで報じられ、『読売新聞』も読者からの「なぜプロレスを詳報しないのか」という問いに「正統なスポーツとみなしていない」からと答えている（5 月 1 日朝刊）。

五冠馬シンザン

○シンザン　対　ミハルカス●　1馬身3／4差

第10回有馬記念（グランプリ）

1965（昭和40）年12月26日

中山競馬場　芝2600m

名勝負!!

シンザンは1964（昭和39）年に史上2頭目、戦後初のクラシック三冠（皐月賞、東京優駿（日本ダービー）、菊花賞）を制した。この年もすでに天皇賞（秋）に勝利して、その走りは「鉈の切れ味」と評されていた。引退レースとなった有馬記念では、単勝オッズ1.1倍の圧倒的1番人気となり、最終の第4コーナーで先を行くミハルカスを大外から一気に追い込んで、史上初の五冠馬となった。デビュー戦から引退レースまでの19戦のうち15勝し、残り4戦すべて2着の戦績は、中央競馬界での記録となっている。引退後は種牡馬となり、ミホシンザン、ミナガワマンナなどの名馬を輩出。また満35歳まで生き、サラブレッドの日本最長寿記録を更新した。

79. 日刊スポーツ[東京]　7182　1965（昭和40）年12月27日　日刊スポーツ新聞社＜Z86-2＞

怪物ハイセイコー敗れる

○タケホープ　対　ハイセイコー●　5馬身差以上

第40回東京優駿（日本ダービー）

1973（昭和48）年5月27日

東京競馬場　芝2400m

名勝負!!

ハイセイコーは1972（昭和47）年に公営競馬の大井競馬場でデビューし、6連勝後、中央競馬に移籍した。この年3月の中山競馬場での中央デビュー戦から、皐月賞を含めて、ダービーの前哨戦のNHK杯まで4連勝を飾った。当時、「地方」出身の馬が「中央」で活躍するというストーリーは、従来の競馬ファンの枠をこえた一大ブームを巻き起こした。圧倒的な一番人気で迎えたこのダービーでは、最後の直線、ゴールまで残り400mの地点で先頭に立ったが、直後に失速し、大穴だったタケホープとイチフジイサミに交わされ、3着に敗れた。タケホープの記録はダービーレコードを更新した。ハイセイコーの「不敗神話」が崩れたにもかかわらず、人気はその後も衰えず、1974（昭和49）年12月の引退を機に、主戦騎手の増沢末夫が唄う「さらばハイセイコー」が大ヒットした。

80. 週刊競馬報知　13（22）　1973（昭和 48）年 6 月 7 日　報知新聞社＜Z11-556＞

81. 日刊スポーツ[東京]　9862　1973（昭和 48）年 5 月 28 日　日刊スポーツ新聞社＜Z86-2＞

パネル. 優駿　33（7）　1973（昭和 48）年 7 月　日本中央競馬会＜Z11-312＞

「人生は夢ではない」と題した、寺山修司による第 40 回日本ダービー観戦記。ハイセイコーが敗れた理由として、童話研究家、名探偵、怪奇作家といった設定で、奇想天外な説を提示する。それだけハイセイコーの敗北は予想外のことであった。競馬を人生になぞらえ、哀愁に満ちた寺山の競馬エッセイは、競馬人気の一時代を築いた。

「流星の貴公子」対「天馬」

○テンポイント　対　トウショウボーイ●　3／4 馬身差

第 22 回有馬記念（グランプリ）

1977（昭和 52）年 12 月 18 日

中山競馬場　芝 2500m

テンポイントは、額の流星と栗毛の馬体の美しさから「流星の貴公子」と呼ばれた。前年の 4 歳時のクラシックレースでは無冠に終わったが、この年の天皇賞（春）を制した。一方の「天馬」トウショウボーイは、前年の皐月賞、有馬記念を制覇し、6 月の宝塚記念でもテンポイントに勝利し、両者の対戦はテンポイントの 1 勝 4 敗となっていた。当時、両頭にグリーングラスを加えた 3 強の時代といわれた。レースは武邦彦騎乗のトウショウボーイと鹿戸明騎乗のテンポイントの一騎打ちとなり、2 頭の競り合いのまま最後の直線に入り、一気に抜け出したテンポイントが先頭でゴール。グリーングラスも両頭に最後までくらいついた。トウショウボーイはこのレースを最後に引退し、種牡馬生活に入ったが、産駒として三冠馬のミスターシービーがいる。一方テンポイントは、翌年 1 月、国外遠征を控えたレース中に骨折し、ファンの願いもむなしく、43 日間の治療の末に亡くなった。

82. 優駿　38（2）　1978（昭和 53）年 2 月　日本中央競馬会 ＜Z11-312＞

写真左がトウショウボーイ、右がテンポイント。

パネル. 優駿　38（2）　1978（昭和 53）年 2 月　日本中央競馬会＜Z11-312＞

「一騎打ち―有馬記念とその抒情」と題した寺山修司のエッセイ。10 ポイントの活字をポケットにしのばせる植字工の少年や、テンポイントの母ワカクモ、その母クモワカの悲劇を同業者に重ね合わせるホステスなど、様々な視点を通してテンポイントとトウショウボーイへの思いを語る。寺山はテンポイントの死後「さらばテンポイント」という詩を残した。

83. サンデー毎日　57（7）＝3112　1978（昭和 53）年 2 月　毎日新聞社＜Z24-15＞

大手術の後、ギプスをはめているテンポイントの様子。

○ホーリックス（ニュージーランド）　対　オグリキャップ●　首差

第 9 回ジャパンカップ

1989（平成元）年 11 月 26 日

東京競馬場　芝 2400m

名勝負!!

1987（昭和 62）年に公営の笠松競馬場でデビューしたオグリキャップは、翌年中央競馬へ移籍し、当時の中央競馬会での新記録である重賞レース 6 連勝を達成し、暮の有馬記念を制した。

休養明けとなったこの年の秋は、4 カ月の間に重賞 6 レースに出走するという過酷なローテーションとなった。マイルチャンピオンシップをハナ差の接戦で制し、翌週に臨んだジャパンカップでは、早いレース展開の中で、最後の直線で先を行くホーリックスを外から追い込み、世界レコードを出したが、わずかに及ばず 2 着に敗れた。

オグリキャップの常識をくつがえす走りぶりは、かつてのハイセイコーと同じく「怪物」の異名をとったが、翌年は、安田記念には勝ったものの、その後のレースでは不振が続いた。しかし引退レースとなった有馬記念（1990（平成 2）年 12 月 23 日　中山競馬場）では、武豊の騎乗のもと、スローペースの中で終始好位置につけ、最後の直線で先頭に立つとそのままゴールし、有終の美を飾った。

ハイセイコーと同様に、地方競馬から中央へ移籍して快進撃を続けたオグリキャップの活躍により、女性ファンの拡大や、関連グッズのヒットなどを伴う再度の競馬ブームが起こった。

84. 週刊競馬報知　29（47）　1989（平成元）年 12 月 7 日　報知新聞社＜Z11-556＞

首差で惜敗した瞬間を真横からとらえた写真。

85. 優駿　51（2）　1991（平成 3）年 2 月　日本中央競馬会＜Z11-312＞

引退レースを伝える記事。満員のファンからの声援に、オグリキャップが奮い立った、と記す。レース後、競馬場にはオグリコール、ユタカコールがこだました。

呉　対　木谷

呉清源と木谷實は昭和前期から昭和中期にかけて活躍した。

木谷實は若手時代から「怪童丸」の異名をとって将来を嘱望され、数々の棋戦で優勝した。家元制最後の本因坊・秀哉の引退碁では対局相手を務めており、川端康成はその対局模様を小説『名人』（展示資料 87）で活写している。また晩年の名伯楽ぶりも有名で、「木谷道場」は趙治勲や小林光一をはじめ数多の名棋士を輩出している。

一方の呉清源は中国福建省出身で、少年時代は「神童」と呼ばれる。瀬越憲作名誉九段に見いだされて来日した直後から大活躍し、木谷とともに日本囲碁界を牽引する存在となった。

自然、両者は互いに競い合うライバルとなるが、反目し合ったわけではなく、むしろ、「新布石」と呼ばれる序盤の革命的な打ち方をともに提唱するなどしていた。とはいえ、時代の最先端を突っ走る若手二人のどちらが強いのか、知りたくなるのが世間一般の人情だ。読売新聞社が企画した呉・木谷の十番勝負、世に言う「鎌倉十番碁」はこうして始まった。

天才少年現る

名勝負!!

○木谷實　対　呉清源●

呉少年出世碁　第 7 局

1929（昭和 4）年 6 月

来日した天才少年が日本の棋士と次々に対局するという、時事新報社の企画の第 7 局目。呉はまず天元（中央）に打ち、その後、木谷が打った手を対照に真似て打つという「マネ碁」を展開。天元に打つのは『天地明察』で知られる安井算哲のほか、いくつか例があるが、マネは秀吉が家来を困らせるために打ったという逸話のある奇想天外な手。呉の作戦は途中までは成功し、マネを解消した時点で呉（黒）が優勢だったが、木谷が地力を発揮し逆転勝ち。この対局から、呉と木谷を中心として新しい囲碁史が動き出した。

（挿絵キャプション）　時事新報　16511　1929（昭和 4）年 6 月 4 日　時事新報社＜新-3＞6 月 3 日から 25 日まで、順を追って棋譜を連載している。展示箇所は 11 手までのもの。対照に打たれていることがわかる。なお時事新報は明治 30 年前後から棋譜を新聞紙面に掲載し、当時、棋譜欄を掲載している代表的な新聞だった。

新布石の挑戦

○本因坊秀哉　対　呉清源●

1933（昭和 8）年 10 月 16 日～1934（昭和 9）年 1 月 29 日

日本囲碁選手権決勝戦

読売新聞本社

名勝負!!

読売新聞社主催の「日本囲碁選手権」は、4 段以上の棋士 16 名がトーナメントで争い、優勝者が本因坊秀哉と記念対局するというもの。勝ち残ったのは呉清源。読売は「不敗の名人本因坊秀哉対天才呉清源」とあおった。

呉と木谷は当時、「新布石」を考案していた。これまでの家元制度で培われた定石ではない打ち方である。多くの解説書が出版されてブームともなった。この対局で呉は、名門本因坊（江戸時代、囲碁は家元制で 4 つの家元があった。その最後の一つが本因坊）では禁じ手、邪道ともされる手を駆使し世間を沸かせるも、敗北する。

86. 古今の名棋譜名人最後の勝負碁　日本囲碁選手権手合　読売新聞社編　1934（昭和 9）年　読売新聞社出版部　＜662-27＞

日本囲碁選手権の準決勝（木谷対呉）、決勝（橋本宇太郎対呉）、そして本因坊対呉の棋譜と解説をまとめたもの。展示箇所は、7 日目の第 1 手を指した瞬間の写真で、左が本因坊、右が呉。本文に、呉が意表をつく手を打った場面で、呉は伝統を破壊する異端者ではなく、新しい伝統の創造者である、と記されている。末尾には、落ち込んでいる呉を木谷が食事に誘ったことを「棋界花形同志間の一つの美談」として紹介している。

新しい時代へ引き継ぐ引退碁

○木谷實　対　本因坊秀哉●

1938（昭和 13）年 6 月 26 日～12 月 4 日

芝「紅葉館」、箱根「奈良屋」、伊東「暖香園」

名勝負!!

家元制から実力制へ。囲碁も将棋も江戸時代の終焉とともに幕府という後ろ盾を失い、家元制度は成り立たなくなっていた。後継者問題に悩んでいた本因坊に対し、東京日日新聞社（現在の毎日新聞社）の働きかけがあり、本因坊の名を実力制のタイトルに残し、家元制度を解体することで決着した。部数拡大のために囲碁・将棋を題材にしていた新聞社が、囲碁将棋文化の新しい支え手となりつつあったのである。

記念の引退碁の相手は、挑戦者決定リーグ戦に 5 連勝した木谷實。木谷は「私がまずい手を打てば、それは私ひとりの失敗ではなく、名人をも汚す」と悩んだが「ともかく全力を尽くす」（木谷実著『わたしの碁：木谷實選集　第 1 巻』1967（昭和 32）年）との覚悟で臨んだ。

本因坊は当時 64 歳、大動脈不完全閉鎖で歩くのもおぼつかなくなるほどだったが、入院を間にはさんで打ち継ぎ、次世代にバトンを渡したのち、翌年 1 月に没した。

87. 呉清源棋談・名人　川端康成著　1954（昭和 29）年　文芸春秋新社＜913.6-Ka734g＞
『名人』はこの名勝負の観戦記。木谷は「大竹七段」として登場している。

鎌倉十番碁

○呉清源　対　木谷實●
1939（昭和 14）年 9 月 29 日～1941（昭和 16）年 6 月
建長寺等

名勝負!!

鎌倉の寺を舞台に、宿命のライバル対決が行われた。読売新聞社は「竜虎相打つ空前の大棋戦」と大いに宣伝した。木谷 30 歳、呉 24 歳である。日中戦争が拡大していた折り、呉の家には石が投げ込まれたりしたという。しかし師・瀬越憲作は「碁打ちが盤上のことで死ぬのは本懐」と励ました。

観戦記は「打込みを懸け十番の決戦を昭和棋史に刻みこむべき此の一戦は、最後の日の夜深く、鬼気人に迫り凄気地に満つるの一場景を展開した。それは黒 57 が打ち下ろされた直後木谷七段が鼻血を出してからであった。私はかほど迄に胸を打たれる盤側を知らない。」(『読売新聞』1939（昭和 14）年 10 月 20 日第一夕刊）と鬼気迫る対局の様子を記す。2 年近くにわたった勝負は、呉の 6 勝 4 敗で終わった。

88. 読売新聞[東京]　22505　1939（昭和 14）年 9 月 20 日夕刊　読売新聞東京本社＜Z81-16＞
鎌倉十番碁の予告記事。囲碁評論家安永一は呉を「奇想天外より落つる底の天才型」、木谷を「鉄筋に錐をもみ込むやうな執拗な地力」と評し、「両者は永遠に相会することはない。そしてその無窮遠点に囲碁の真理自体が横（よこた）はるのである。」と記す。

盤外でも激しい火花

○坂田栄男　対　藤沢秀行●
第二期名人戦第 6 局
1963（昭和 38）年 9 月 21 日～22 日
東京「福田家」

名勝負!!

王者坂田対無頼派藤沢。ピリピリした雰囲気の中、盤外もけわしかった。坂田が藤沢の親戚の立会いを拒否すれば、藤沢は坂田と親しい作家の観戦を拒否する。また、坂田が 2 連勝した後、藤沢が 3 連勝するという緊迫した第 6 局において封じ手を巡るトラブルもあった。2

日制の対局において、1 日目が終了する際に、手番の者が次の着手を紙に書き、封をして立会人に渡す。これを「封じ手」という。1 日目の終了時間が近づいたら着手せずに封じ手にするのが慣例だったが、坂田は規定時間の直前に着手する。封じ手が嫌いな藤沢に封じさせようという坂田の作戦である。カッとした藤沢はすぐさま打ち返し、坂田もそれに応じてこれまた打ち返すというやりとりがあった。藤沢は盤外戦術で負けたのではなく、「当時の坂田さんはまったく強かった」と語っている。

89. 囲碁クラブ　10（11）　1963（昭和 38）年 11 月　日本棋院＜Z11-133＞

第 6 局で勝った坂田の、喜びにあふれる顔が印象的である。

趙　対　小林

趙治勲と小林光一の対戦は、昭和末期から平成初期にかけてのゴールデンカードである。歴代タイトル数では趙が第 1 位、小林が第 2 位を占める。当然ながら両者はタイトル戦で幾度もぶつかり、数々の好勝負を演じた。

先に頭角を現したのは趙である。韓国からやってきた天才少年は史上最年少でプロ入りを果たし、1980（昭和 55）年に名人位を獲得したのをはじめ、若くして数々のタイトルを奪取する。大三冠（棋聖・名人・本因坊）を 2 度も成し遂げたのは趙だけである。

一方の小林も、最初のタイトル獲得は趙と比べて遅かったものの、棋聖 8 連覇、名人 7 連覇、碁聖 6 連覇し、歴代最多となる 3 つの名誉称号を保持している。

趙は囲碁に対する厳しさで有名だが、大盤解説会やエッセイでのユーモアあふれる言動は多くのファンを喜ばせている。一方の小林は、生真面目な人柄で知られる。師木谷實の娘（女流棋士・小林禮子）と、周囲の反対を押し切って結婚したエピソードも有名。

重傷の趙、車椅子対局

名勝負!!

○小林光一　対　趙治勲●

1986（昭和 61）年 1 月 16 日～3 月 13 日

岐阜「ホテル水明館」等

両者の対局で最も有名なのは 1986（昭和 61）年の棋聖戦だろう。開幕直前に趙が交通事故に遭って重傷を負ったのだ。約 3 時間に及ぶ手術、全治 3 カ月、両足と左手の骨折。開催すら危ぶまれたが、趙は車椅子で対局した。むしろ小林にとまどいがあったようで、「平常心に戻るまで、ずいぶん時間がかかりました」と後日語っている。

結果は小林が棋聖を奪取して趙は無冠となったが、趙の鬼気迫る対局姿勢はファンの感動を呼んだ。なお、判断力がにぶることを防ぐために、趙は麻酔無しで手術に臨んだとも言われるが、これについては、後日、趙自身が否定している（『週刊碁』2013（平成 25）年 3 月 18 日）。

90. 囲碁　36（4）　1986（昭和 61）年 4 月　誠文堂新光社＜Z11-132＞

写真は第 33 局の様子。趙の左手には包帯、車椅子に座っての対局である。

趙、小林の大三冠を阻む

○趙治勲　対　小林光一●

1992（平成 4）年 5 月 15 日～7 月 23 日

土肥「玉樟園新井」

1990（平成 2）年から 1992（平成 4）年にかけて 3 年連続争われた本因坊戦も激戦であった。小林の大三冠達成がかかっていたが、趙が小林の挑戦をことごとく撥ね退けた。特に 1992（平成 4）年は、趙が 3 連敗という絶体絶命の状況から 4 連勝で防衛を果たすという大逆転劇だった。現代囲碁のハイライトと言われている。

91. 囲碁クラブ　39（10）=460　1992（平成 4）年 10 月　日本棋院＜Z11-133＞

第 47 期本因坊戦第 7 局を伝える。趙の笑顔と、「シビレました。二人の世界。」という見出しが印象的。

坂田三吉

戯曲や映画、歌にもなった『王将』で知られる坂田三吉。貧しい育ちで字が読めず、偏屈な頑固おやじのイメージがあるが、実際は温かみのある礼儀正しい人物だったという。大正時代から戦後までの将棋界を語るにあたって、坂田を外すことはできない。

銀が泣いている

名勝負!!

○坂田三吉　対　関根金次郎●

1913（大正 2）年 4 月 6～7 日

築地「築地倶楽部」、新富町「小松将棋所」

「明日は東京　出て行くからは　なにがなんでも　勝たねばならぬ」坂田三吉を歌った村田英雄『王将』（作詞：西条八十）の一節だ。「勝たねばならぬ」相手は関根金次郎。1892（明治 25）年の最初の出会いで関根にこてんぱんにやられ、坂田はプロの道を志したという。その後、名人の座をめぐって争うことになる、終生のライバルである。

当時大阪に住んでいた坂田は、関根と対局するために何度か上京した。この対局は、「銀が泣いている」という台詞で有名。序盤での劣勢を表現している。「たゞの銀ぢやない。それは坂田が銀になつて、うつ向いて泣いてる銀だ。」「強情過ぎました、あまり勝負にあせり過ぎました」（『大阪朝日新聞』1929（昭和 4）年 1 月 12 日夕刊）しかし、2 日間 30 時間一睡もせずに指し続け、坂田は逆転勝利を飾る。

92. 一手千金将棋虎之巻　一名・昇進の友　坂田三吉著　1913（大正 2）年　前田文進堂＜67-344＞

坂田による新定跡の本。口絵に「銀が泣いている」の際の関根との対戦写真が使われている（中央は立会人である小野五平 12 世名人）。

序文には「三吉の棋譜は先人未発の妙手多し」とある。末尾には初心者のための Q&A が掲載されており、上手くなるコツの一つとして「一旦コーと極めた以上は変らぬといふ自信が必要」と述べている。

坂田、名人位まであと一歩に迫る

名勝負!!

○坂田三吉　対　関根金次郎●

1917（大正 6）年 10 月 8～9 日

柳澤保恵伯爵邸

当時「名人」は現在と異なる家元制であり、小野五平 12 世名人の後継者が誰になるか注目されていた。坂田は 1915（大正 4）年、柳澤伯爵の斡旋で小野名人から 8 段を許されており、当時は 8 段は準名人を意味していた。「関根の「技」と坂田の「力」が、ガップリ四つに組んだ勝負」となり、坂田が「力ずくで関根の駒を押し戻して」（週刊将棋編集部編『不滅の名勝負 100　昭和の将棋史』1988（昭和 63）年）終わった。この時点で坂田は次期名人候補の筆頭になったと言ってよい。

しかしそのわずか 1 週間後、関根の高弟・土居市太郎にまさかの敗戦を喫し、目前の名人位を逃してしまう。小野の死後、13 世名人となったのは関根だった。（関根はその後、実力制による名人戦を提唱する）

（挿絵キャプション）読売新聞[東京]　14547　1917（大正 6）年 10 月 9 日　朝刊　読売新聞東京本社＜Z81-16＞

初日の様子を伝える記事。「関西の棋界を代表する」坂田が全国を遊歴して他流試合をし、ついに「関東の総帥」関根と手合わせることになったと報じられている。

南禅寺の決戦

○木村義雄　対　坂田三吉●

1937（昭和 12）年 2 月 5～11 日

南禅寺

名勝負!!

天龍寺の決戦

○花田長太郎　対　坂田三吉●

1937（昭和 12）年 3 月 22～28 日

天龍寺

名勝負!!

1924（大正 13）年、坂田は「関西名人」を名乗って中央棋界から離れ、大阪に在ってしばらく孤高の時代が続く。

中央棋界への復帰はそれから 10 数年経った 1937（昭和 12）年、坂田は 66 歳になっていた。対するは木村義雄（後の 14 世名人）と花田長太郎。それぞれ「南禅寺の決戦」「天龍寺の決戦」と呼ばれることになるこれらの対局は、読売新聞が事前に大々的に報じたため一般読者の話題をさらった。
そして坂田はその期待に応えるかのように、後手番の初手に奇手を放つ。南禅寺における 9 四歩、天龍寺における 1 四歩である。後手はただでさえ一手遅れているのに、端の歩を突く

という一見無意味な手を指したのだ。（端の歩を突く手は、将棋漫画『月下の棋士』（能條純一著）で、坂田三吉をモデルとする人物の孫である主人公がよく指している。）

激戦の末敗れはしたものの、「坂田三吉此処に在り」を示す好局であった。また、東西に分かれていた棋界を統一するきっかけともなった。

パネル．読売新聞　21512　1936（昭和 11）年 12 月 24 日朝刊　読売新聞社＜Z81-16＞

「南禅寺の決戦」の予告記事。「待望の巨人」「関西の棋聖」である坂田三吉が、読売新聞社の熱意に動かされ、「日本将棋道のために、過去の段位・棋歴の一切を抛（なげう）つて聖僧の如き心境」で立ちあがった、と謳う。

93. 読売新聞　21555　1937（昭和 12）年 2 月 6 日夕刊　読売新聞社＜Z81-16＞

「南禅寺の決戦」初日の様子を伝える記事。「盤面に凝る両棋士の眼は刻一刻と熱して精魂は総て火花となって散る（略）九四の歩、これこそ実に奇想天外驚くべき駒の動きである、瞬間流石に木村八段の顔面もかすかに蒼白、心なしか羽織の紐もきりきりと震へるやうに見えた」

94. 坂田将棋・近代将棋争覇録　菅谷北斗星著　1937（昭和 12）年　千倉書房＜703-188＞

「南禅寺の決戦」「天龍寺の決戦」をまとめたもの。著者は読売新聞記者。後書きには「坂田氏は現在の棋界に残された唯一の謎」と記されている。

大山　対　升田

大山康晴は名人通算 18 期・歴代最多勝利などの偉大な戦績を残した、昭和将棋史に佇立する巨人である。特に昭和 30 年～40 年代の大山は無敵だった。好手を一手一手着実に積み重ね、相手の攻めを受けつぶす。

一方の升田幸三も、大山に対する分は悪かったものの、他の棋士と較べて実力と実績で抜けていた。また、升田は非常に人気があった。次々と新戦法や新手を披露してファンを喜ばせたし、終盤の鋭い寄せはプロをも唸らせた。盤上の活躍だけでなく、剣豪のような風貌やユーモアあふれる言動も人々を惹き付けた。

「大山は石、升田は火、大山は徳川家康、升田は豊臣秀吉、大山は丸刈り、升田はちぢれ毛」（『サンデー毎日』1948（昭和 23）年 3 月 21 日）…そんなふたりが激突するのだから、名勝負が生まれないはずがない。

高野山の決戦

○大山康晴　対　升田幸三●

1948（昭和 23）年 3 月 3 日

高野山総本山金剛峰寺普門院

第二期順位戦 A 級名人位挑戦者決定戦第 3 局

若き日の大山と升田が名人挑戦権を懸けて争った一戦である。このとき、升田は十二指腸虫を病み、暖かい場所での対局を希望していた。しかし寒冷な高野山での試合となったうえ、連絡の不備もあり、升田は対局拒否すら考えていた。そんな状況での対局、升田が優勢だっ

たが、大山の王手に対する応手を誤って「頓死」。投了の瞬間の、升田のおどけた台詞「錯覚いけない、よく見るよろし」は有名である。

（挿絵キャプション）サン写真新聞 ＝The Sun pictorial daily　585　1948（昭和 23）年 3 月 4 日　サン写真新聞社＜071-Sa628＞
第 2 局までの様子を「静寂の中にも闘魂はつづく」と伝える記事。

名人に香車を引いて勝つ

○升田幸三　対　大山康晴●
1956（昭和 31）年 1 月 19～20 日
赤坂「比良野」
第 5 期王将戦第 4 局

名勝負!!

升田の業績を語るにあたって 1956（昭和 31）年の王将戦は外せないだろう。王将戦で大山に挑戦した升田は、当時名人の大山を香落ちに指し込み（何連勝かすると、勝ったほうが一枚ずつ駒を減らす制度。最初は香車を減らす。現在のプロ戦では行われていない）、しかもその香落ち戦で勝利する。将棋界の頂点であるはずの名人が香落ちで敗北するという、まさに歴史的事件であった。

ちなみに、升田は 13 歳のとき、将棋指しになるために「名人に香車を引いて勝って大阪に行く」という書き置きを残して家出をしている。『名人に香車を引いた男』（1980（昭和 55）年）は升田の自伝のタイトルとなった。

95. 毎日グラフ　9（5）　1956（昭和 31）年 2 月 5 日　毎日新聞社＜Z23-6＞
ゴロリと仰向けになる升田と、盤面を見つめる大山が対照的な写真。

升田、史上初の三冠

○升田幸三　対　大山康晴●
1957（昭和 32）7 月 10～11 日
代々木「初波奈」
第 16 期名人戦第 6 局

名勝負!!

当時は「名人」「王将」「九段」の三タイトルしかなかったが、すべてのタイトルを独占する者はいまだに現れていなかった。それゆえに升田三冠王の誕生は将棋史に残る偉大な事績となったわけだが、頂点を極めた升田の「たどり来て、未だ山麓」という言葉もまた、将棋史に残る名言となる。

なお、大山はこの対局で「名人」を升田に奪われて無冠となるも、1959（昭和 34）年 6 月 12 日に奪還している。

96. サングラフ　7（9）＝68　1957（昭和 32）年 9 月　サン出版社＜Z051.4-Sa1＞

報道陣がかけつけてみると、升田はトイレに立ち、大山が一人で盤をにらんでいたという（右上の写真）。

97. 週刊新潮　2（24）＝71　1957（昭和 32）年 6 月　新潮社＜Z24-21＞

大阪で行われた名人戦第 2 局を伝える記事。升田の横顔が印象的。なお、第 2 局は大山が勝った。

升田、最後の名人戦

○大山康晴　対　升田幸三●

1971（昭和 46）年 6 月 3～4 日

赤坂「福田家」

第 30 期名人戦第 6 局

升田は「石田流」という江戸時代から存在する戦法に改良を加え、大山を相手に善戦するが、急所でポカを連発。惜しくも名人位を逃し、これが最後の名人戦となった。このあと升田は病気休場を繰り返し、1979（昭和 54）年 5 月 1 日、引退する。引退後も升田人気は衰えず、テレビの将棋番組での軽妙な解説は、お茶の間のファンを大いに喜ばせた。

98. 朝日報道写真　1971（昭和 46）年 4 月 7 日＜Y811-11＞

大山が第 1 手を指した瞬間。

99. 週刊サンケイ　20（24）＝1059　1971（昭和 46）年 6 月　扶桑社＜Z24-17＞

和田誠による、二人の顔を将棋の駒に見立てた表紙。この号には「執念！　升田将棋 12 年目の挑戦」という記事も掲載されており、対局前の期待がうかがえる。

大七冠をめぐる攻防　　羽生　対　谷川

羽生善治六冠が第 45 期王将戦への挑戦権を獲得したとき、将棋界は大いに沸いた。七大タイトルをたったひとりの棋士が独占してしまう――そんな前人未到の「夢」が現実になってしまうのではないか？　迎え撃つのは谷川浩司王将。史上最年少名人記録（21 歳）を持つ、神戸が生んだ天才である。

谷川、執念の七冠阻止

○谷川浩司　対　羽生善治●

1995（平成 7）年 3 月 23～24 日

青森県「奥入瀬渓流グランドホテル」

第 45 期王将戦

名勝負!!

七冠誕生という、将棋史上燦然と輝くことになるであろう大事件が歴史に刻まれるのか、それとも夢は夢のまま露と消えるか――最高の役者と最高の舞台が揃って 1995（平成 7）年 1 月に開幕した王将戦、第 1 局を制したのは谷川だった。王将防衛に向けて幸先の良いスタートを切ったが、ここでまさかの大事件が谷川を襲う。同年 1 月 17 日、阪神淡路大震災である。被災した谷川はしかし崩れず、最強の挑戦者・羽生と互角の戦いを繰り広げる。七番勝負はフルセットにもつれ込み、最終局は千日手（同一局面が 1 局中に 4 回あらわれること）をはさんだ激戦の末、羽生が投了を告げた。谷川の王将防衛、即ち七冠阻止が成った瞬間であった。やはり七冠は夢だったのか――

100. 将棋マガジン　18（6）　1995（平成 7）年 6 月　日本将棋連盟＜Z11-905＞

上から撮影した写真では、羽生が頭を抱えている。

羽生七冠達成

○羽生善治　対　谷川浩司●

第 46 期王将戦

1996（平成 8）年 1 月 11 日～2 月 14 日

山口「マリンピアくろい」等

名勝負!!

翌年度の羽生は鬼神の如き活躍を見せる。並居る挑戦者たちを悉く撃破して六冠をすべて防衛し、しかも王将戦挑戦者決定リーグを勝ち抜いて再び挑戦者となった。騎虎の勢いは止まらない。第 46 期王将戦は羽生が開幕 3 連勝。そして迎えた第 4 局、谷川が駒を投げたのは 1996（平成 8）年 2 月 14 日午後 5 時 6 分のことであった。七冠をめぐる 2 年越しの激闘は幕を閉じた。その後の羽生フィーバーはご記憶の方も多いだろう。

101. サンデー毎日　75（11 臨時増刊）=4133　1996（平成 8）年 3 月 15 日臨時増刊　毎日新聞社＜Z24-15＞

「七冠天才棋公子　羽生善治の世界」と題した増刊。

102. 将棋世界　60（4 月号増刊）　1996（平成 8）4 月　日本将棋連盟＜個人蔵＞

羽生特集の増刊。棋譜や有名人の寄稿文などが掲載されている。口絵には、羽生の子ども時代の写真やオフ写真が多数掲載されていて、大スターの一面を知ることができる。

プロ野球

日本のプロ野球はここから始まった！　日米野球

○全米選抜　対　全日本●　1 - 0

日米親善試合

1934（昭和 9）年 11 月 20 日

静岡草薙球場

ベーブ・ルース（Babe Ruth）を含む大リーグ選抜チームが来日、全国 12 都市（東京、函館、仙台、富山、横浜、静岡、名古屋、大阪、小倉、京都、大宮、宇都宮）で全日本チーム等との 16 試合が開催された。野球の本場から有名選手が来るということで盛り上がり、試合の予想は「スコーアは十対零位か」「一点や二点は入れるさ」（『読売新聞』1934（昭和 9）年 11 月 4 日朝刊）といったもの。

予想通り日本チームは全敗したが、静岡草薙球場での試合で、沢村栄治投手が 8 回をルー・ゲーリッグ（Lou Gehrig）のホームランによる 1 失点に抑える好投を見せたことは球史に残る快挙である。この年の日米野球をきっかけとして、12 月に日本初の職業野球チームである「大日本東京倶楽部」（後の読売ジャイアンツ）が結成され、沢村も入団する。

なお、この来日は読売新聞社社長正力松太郎の発案によるもので、1931（昭和 6）年について 2 回目である。新聞の部数拡張のために大衆イベントを作りだすのが、当時の各社の戦略であり、正力の腕の見せ所であった。

103. 野球界　25（1）　1935（昭和 10）年 1 月 1 日　野球界社＜雑 35-83＞

左上が沢村栄治。

104. 国際写真新聞　84　1934（昭和 9）年 11 月 15 日　同盟通信社＜雑 53-53＞

右上は銀座でのパレード。

パネル. 国際写真新聞　84　1934（昭和 9）年 11 月 15 日　同盟通信社雑＜雑 53-53＞

ベーブルースの表紙。

コラム

戦後野球ブームとスポーツ新聞の誕生

戦後に野球が再開されたのは、1945（昭和 20）年 11 月の早慶戦。戦後の開放的な空気とアメリカ文化の流入のためか、様々なスポーツの中でも特に野球は人気だった。『野球時代』『野球ファン』『野球倶楽部』『野球日本』『野球世界』『野球ニュース』…様々な野球雑誌が創刊された。『ベースボールマガジン』もこの頃の創刊である。

スポーツ新聞もこの頃立て続けに創刊された。1946（昭和 21）年 3 月に『日刊スポーツ』、1948（昭和 23）年 8 月に『デイリースポーツ』、1949（昭和 24）年 2 月『スポーツニッポン』、同年 12 月に『報知新聞』がスポーツ新聞へ転換。これらの新聞社は、プロ野球を中心に報道し、女子プロ野球リーグ（日刊スポーツ）や、映画人野球祭（スポーツニッポン）を開催するなどのイベント戦略でも部数をのばした。

長嶋デビュー

東京六大学リーグで首位打者 2 度を獲得し、リーグの通算本塁打記録を更新した、立教大学のスター選手長嶋茂雄は、1957（昭和 32）年秋に巨人軍に入団、翌年の開幕戦からレギュラー出場し、打点王と本塁打王の 2 冠を獲得するとともに新人王に輝いた。

以後、球界を代表する選手として王貞治とともに ON 時代を築き、巨人の V9 に貢献、現役引退後も監督として巨人を 2 度の日本一に導いた。長嶋が現役で活躍した時代は、戦後の高度経済成長期に重なり、テレビの普及とも相まって、その独特のキャラクターがファンの熱狂的な支持を呼んだ。戦後のプロ野球人気を長嶋抜きに語ることはできない。

長嶋デビュー

○金田正一　対　長嶋茂雄●　長嶋 4 打席 4 三振

プロ野球セ・リーグ公式戦　巨人対国鉄　1 回戦

1958（昭和 33）年 4 月 5 日

後楽園球場

名勝負!!

長嶋の、公式戦デビュー戦は、国鉄のエース金田正一との対戦となった。しかし金田のプライドをかけた投球の前に初打席から 4 連続三振の洗礼を受けた。金田は次の対戦でも最初の打席で三振を奪い、長嶋のデビューから対戦 5 打席連続で三振に仕留めた。

その後、長嶋対金田の対戦は 1964（昭和 39）年までの 7 年間にわたり、長嶋は打率 3 割 1 分 3 厘、18 本塁打を記録し、金田から最も多くの本塁打を打った打者となった。

105. 明星　7（5）　1958（昭和 33）年 4 月　集英社＜Z24-475＞

「嵐を呼ぶ 3 人の男たち」と題して、石原裕次郎、フランク永井と並んで、まだ学生の長嶋が登場。当時、マダムキラーとして人気だった 3 人が、酒、女性、ファンのことを語るという趣向。長嶋は好みの女性を聞かれて「女らしい人」と答えている。最後は門限と卒業試験を理由に退散。まだ長嶋語は登場していない。

106. スポーツニッポン[東京]　3332　1958（昭和 33）年 4 月 6 日　スポーツニッポン新聞東京本社＜Z86-4＞

野球解説者小西得郎の「長嶋には良薬」というコメントが印象的。

西鉄奇跡の逆転優勝　神様、仏様、稲尾様

○西鉄　対　巨人●　西鉄 4 勝 3 敗

プロ野球日本シリーズ

1958（昭和 33）年 10 月 11 日～21 日

後楽園球場、平和台球場

三原脩監督率いる西鉄と水原茂監督率いる巨人の 3 年連続の対決となったシリーズは、二人の因縁から「巌流島の対決」と言われた。三原、水原とも高松出身でそれぞれ早大、慶大に進み、東京六大学リーグでライバルとなる。戦後、三原は巨人の総監督として指揮をとっていたが、シベリア抑留から帰国した水原との監督交代をめぐる確執によって巨人を離れ、西鉄の監督に就任。打倒巨人を掲げシリーズ 2 連覇を成し遂げていた。

3 回目の対決となったこのシリーズでは、ルーキー長嶋を 4 番に据えた巨人が 3 連勝と 3 年ぶりの日本一に王手をかけた。ところが第 4 戦以降、西鉄のエース稲尾和久の超人的な活躍により、西鉄が 4 連勝して逆転日本一を達成。稲尾は 7 試合中 6 試合に登板（うち 4 試合完投）、4 勝すべてを挙げ、「神様、仏様、稲尾様」と言われた。

この試合後、長年にわたり巨人のスター選手として活躍し、「打撃の神様」と言われた川上哲治が引退を表明した。

107. 日刊スポーツ[大阪]　3118　1958（昭和 33）年 10 月 22 日　日刊スポーツ新聞社＜Z86-7＞

108. ベースボール・マガジン　第 2 次　1（7）　1958（昭和 33）年 11 月 1 日　ベースボール・マガジン社＜Z783.7-B3＞

第 5 戦の様子を伝える「劇的！　稲尾のサヨナラホーマー」という記事。表紙は稲尾と巨人の藤田元司投手。

109. 野球少年　12（12）　1958（昭和 33）年 12 月　芳文社 ＜Z32-490＞

怪奇漫画で知られるつのだじろうによる「日本シリーズ速報」。当時はこうした漫画や、コマ送りを模した写真で試合の経過を知らせていた（ボクシング no.68）。「四勝のうち三勝をあげた巨人は意気けんこう」と途中までの経過を伝えており、日本シリーズの途中に締切が設定されていたようだ。『野球少年』は野球のほかにも相撲の情報や漫画も掲載されている。表紙は稲尾。

コラム

読売のテレビ戦略と巨人軍

日本初の民営テレビ局である日本テレビは、1951（昭和 26）年に読売新聞社の正力松太郎が構想。NHK には半年遅れたが、1953（昭和 28）年 8 月 28 日に本放送を開始した。

翌日、後楽園球場におけるプロ野球巨人対阪神戦を初中継。以後、巨人軍主催の試合の独占権を持ち、全国ネットで中継し、巨人ファンの拡大がはかられた。天覧試合で NHK が参入し、独占の解消が期待されたが、結局その後も独占は続いた。

また、街頭テレビを大々的に設置したのも日本テレビである。1953（昭和 28）年プロボクシング世界選手権白井義男対テリー・アレン戦、1954（昭和 29）年の力道山・木村政彦ーシャープ兄弟のプロレスを中継するなど、スポーツ中継に力を入れ、街頭テレビのブームを築いた。（→プロレス　コラム「街頭テレビとプロレス」）
（挿絵：野球界　25（1）　1935（昭和 10）年 1 月 1 日　野球界社＜雑 35-83＞　正力松太郎肖像）

天覧サヨナラ本塁打

○長嶋茂雄　対　村山実●　長嶋が 9 回裏サヨナラ本塁打
プロ野球セ・リーグ公式戦　巨人　対　阪神　11 回戦
1959（昭和 34）年 6 月 25 日
後楽園球場

名勝負!!

天皇、皇后が後楽園球場のバックネット裏貴賓席からナイターを観戦した、プロ野球史上唯一の「天覧試合」。先発投手は巨人が藤田元司、阪神が小山正明とエース同士の対決となった。7 回裏巨人は新人王貞治の本塁打で同点に追いつき、阪神も新人の村山実がリリーフ投手としてマウンドに立った。同点のまま迎えた 9 回裏、先頭バッターの長嶋がレフトポール際に入る本塁打を放ち、5 - 4 で巨人が劇的なサヨナラ勝ちを収めた。この本塁打について、村山は生涯「あれはファールだった」と語っている。

110. 日刊スポーツ[東京]　4825　1959（昭和 34）年 6 月 26 日　日刊スポーツ新聞社＜Z86-2＞
111. 週刊サンケイ　8（31）＝391　1959（昭和 34）年 7 月 19 日　扶桑社＜Z24-17＞
200 万円で貴賓席を改造、3 倍の警備員を投入、後楽園遊園地のジェットコースターも停止させたといった、裏話を掲載。天皇の「ウン、ホームランだ」（長嶋の 5 回裏のホームランについて。長嶋はこの試合で、2 本のホームランを放った）といった感想も伝える。

杉浦の 4 連投

○南海　対　巨人●　南海 4 勝 0 敗

プロ野球日本シリーズ

1959（昭和 34）年 10 月 24 日～29 日

大阪球場、後楽園球場

名勝負!!

セントラル・リーグ 5 連覇を飾った水原茂監督率いる巨人と、パシフィック・リーグを 4 年ぶりに制した鶴岡一人監督率いる南海による 4 年ぶり、通算 5 回目の対決。南海が 5 回目の挑戦で初めてシリーズを制覇した。南海のエース杉浦忠は第 1 戦、第 2 戦に先発、第 3 戦はリリーフ、雨天順延となった第 4 戦でも先発して 4 勝をあげ、シリーズ MVP に選ばれた。なお日本シリーズで 4 連勝完全優勝を決めたのは史上初であった。巨人は 1956（昭和 31）年の対西鉄以来 4 年連続してシリーズ敗退となった。10 月 31 日に秋晴れの下でおこなわれた大阪市内の優勝パレードの沿道には、約 20 万人が集まり「御堂筋パレード」と呼ばれた。

112. ベースボール・マガジン　第 2 次　2（15）　1959（昭和 34）年 12 月　ベースボール・マガジン社＜Z783.7-B3＞

表紙は鶴岡監督と杉浦。展示箇所は「南海ホークス悲願の優勝なる」という記事で、鶴岡には“親分”という枕詞が付されている。ほかにも、「ツルさんおめでとう」という対談や「特集　人間鶴岡一人のすべて」といった記事が並び、鶴岡監督の人徳がしのばれる。

113. デイリースポーツ[大阪]　3914　1959（昭和 34）年 10 月 30 日　神戸新聞社＜Z86-5＞

巨人　V9

1965（昭和 40）年の南海との日本シリーズを制して、2 年ぶりに日本一の座に就いた巨人は、以後川上哲治監督のチームプレー優先の方針のもと、ON を軸とした打線と安定した投手力を擁して、1973（昭和 48）年の対南海の日本シリーズまで、9 年連続のリーグ優勝と日本シリーズ制覇を成し遂げた。この間阪急は 5 度日本シリーズに出場したが、巨人の厚い壁の前にシリーズ制覇はならなかった。

シリーズを決めたサヨナラ本塁打

○王貞治　対　山田久志●　王逆転サヨナラ 3 ラン

プロ野球日本シリーズ　巨人　対　阪急　第 3 戦

1971（昭和 46）年 10 月 15 日

後楽園球場

名勝負!!

阪急有利の下馬評で迎えた日本シリーズ。1勝1敗で迎えた第3戦、阪急先発の山田が巨人打線を無失点に抑える好投を続けていたが、9回2死の土壇場で王がライトスタンドへ逆転サヨナラ3ランを放ち、巨人が劇的勝利をおさめた。結局シリーズは4勝1敗で巨人が制し、日本シリーズ7連覇を達成した。王のサヨナラ本塁打がシリーズの流れを変えたと言われた。

114. デイリースポーツ[大阪]　9243　1971（昭和46）年10月16日　神戸新聞社＜Z86-5＞

飛び跳ねて喜ぶ王と、マウンドにうずくまる山田の姿が対照的。

巨人　「神話」が終わって

1974（昭和49）年、中日が巨人の10連覇を阻み、セントラル・リーグ優勝を勝ち取った。以後、巨人一極の時代が終わり（次の巨人の日本シリーズ制覇は1981（昭和56）年）、広島のリーグ初優勝、阪急、ヤクルト、広島、阪神のシリーズ初制覇などの場面からは、数々の名勝負が生まれた。

ヤクルト初の日本一

○ヤクルト　対　阪急●　ヤクルト4勝3敗

プロ野球日本シリーズ

1978（昭和53）年10月14日～22日

後楽園球場、西宮球場

名勝負!!

上田利治監督率いる阪急と、広岡達朗監督のもと、セントラル・リーグで初優勝したヤクルトの対決は、大方の予想では3年連続日本一の阪急が有利であった。なおヤクルトの本拠地である神宮球場での試合が、東京六大学野球と開催日が重複したため、ヤクルト主催は全て後楽園球場での開催となった。3勝3敗で迎えた最終第7戦の6回裏、ヤクルトの主砲・大杉勝男のレフトポール際への大飛球を本塁打とした判定に対し、阪急上田監督が猛抗議を行い、コミッショナーまで巻き込む混乱となった。試合は1時間19分の中断の後に再開された。8回裏には、大杉が再び本塁打を放ち、4 - 0でヤクルトが阪急を下し、球団創立29年目で初の日本一となった。

115. スポーツニッポン[東京]　10746　1978(昭和53)年10月23日　スポーツニッポン新聞東京本社＜Z86-4＞

中央の写真は、8回裏の2本目の文句なしのホームラン後に、ホームに帰ってきてからとびあがっている歓喜の大杉勝男。大杉は日本シリーズMVPに選ばれた。

116. サンケイスポーツ[東京]　5648　1978（昭和53）年10月23日　産業経済新聞社＜Z86-74＞

上田監督が辞意を表明したことも記されている。

江夏の 21 球

○広島　対　近鉄●　4 - 3

プロ野球日本シリーズ　第 7 戦

1979（昭和 54）年 11 月 4 日

大阪球場

名勝負!!

古葉竹識監督率いる広島と、パシフィック・リーグで初優勝した西本幸雄監督率いる近鉄の対決。ともにホームでの試合に勝利して 3 勝 3 敗で迎えた第 7 戦は、広島 1 点リードで迎えた 9 回裏、のちに「江夏の 21 球」として球史に残る劇的なドラマが待ち受けていた。

近鉄が無死満塁で迎えた絶好のチャンスに対して、広島の江夏豊投手は、代打佐々木恭介を三振にとり、続く打者石渡茂のスクイズをスローカーブで外して、三塁走者が本塁手前でタッチアウト。そして石渡を空振り三振にとり、広島が初の日本一に輝いた。

近鉄は翌年再度広島との日本シリーズに臨んだが惜敗、1989（平成元）年には、巨人との日本シリーズで 3 連勝のあと 4 連敗を喫して、悲願の日本シリーズ優勝を果たせぬまま、2005（平成 17）年、球界再編の中で球団は解散した。

117. サンケイスポーツ[大阪]　8911　1979（昭和 54）年 11 月 5 日　産業経済新聞社＜Z86-9＞

「広島日本一」の題字は古葉監督によるもの。古葉監督夫人の「祝・亭主関白さん」というコメント、当時西武ライオンズの選手だった野村克也による観戦記「芸術品、江夏の配球」も掲載。

118. Sports Graphic Number　1（1）＝1　1980（昭和 55）年 4 月 20 日　文芸春秋＜Z11-1057＞

山際淳司によるノンフィクション「江夏の 21 球」。この記事により、江夏の投球を軸にした 9 回裏の攻防は「江夏の 21 球」と呼ばれるようになった。関係者への丹念な取材で心理戦を浮かび上がらせる手法で、新しいスポーツジャーナリズムの世界を開いた。イラストは渡辺有一。

甲子園バックスクリーン 3 連発

○阪神　対　巨人●　6 - 5

プロ野球セ・リーグ公式戦　阪神　対　巨人　2 回戦

1985（昭和 60）年 4 月 17 日

甲子園球場

名勝負!!

阪神のクリーンナップ（3 番ランディ・バース・4 番掛布雅之・5 番岡田彰布）が 7 回裏の攻撃時に、巨人の槙原寛己投手より、3 者連続でバックスクリーンおよびその左へ本塁打を放った。勢いに乗った阪神は翌日も勝利し、巨人との 3 連戦を 3 連勝とした。

この年、阪神は最終的に対巨人戦 13 勝 12 敗 1 分とするとともに、21 年ぶりのリーグ優勝を決め、西武との日本シリーズも制覇して、初の日本一となった。

119. デイリースポーツ[大阪]　13078　1985（昭和 60）年 4 月 18 日　神戸新聞社＜Z86-5＞

バース、掛布、岡田の似顔絵を「3」に絡めたデザイン。

120. デイリースポーツ[大阪]　13256　1985（昭和 60）年 10 月 17 日　神戸新聞社＜Z86-5＞

紙面のほぼ全てが阪神のリーグ優勝に関する記事で、広告も「祝優勝」と題したものが並ぶ。阪神ファンの有名人からのコメントも多数。題字は藤本義一。山口洋子と上岡龍太郎の対談には「巨人ファンも楽しかったはずや」と記されている。

近鉄の執念とロッテの意地

ロッテ　対　近鉄　4 - 4　引き分け（延長 10 回）

プロ野球パ・リーグ公式戦　ロッテ　対　近鉄　26 回戦

1988（昭和 63）年 10 月 19 日

川崎球場

近鉄はこの日の対ロッテ戦のダブルヘッダーに連勝すれば、8 年ぶりのリーグ優勝が決まるが、1 試合でも引き分ければ、西武の 4 連覇が決まるという、絶対に引けない状況であった。第 1 試合は近鉄が 4 対 3 で勝ったが、続く第 2 試合は 4 対 4 のまま延長戦へ突入した。試合時間が 4 時間を超えたところで新しいイニングには入らないという規定となっており、10 回の表近鉄が無得点で攻撃を終えた瞬間に、西武の優勝が決まった。目前での近鉄の胴上げをなんとしてでも防ぎたいロッテの意地が、近鉄の希望を打ち砕いた。優勝の望みがついえたあと 10 回裏の守備に就く近鉄ナインの姿が印象深い。

121. 「日刊スポーツ[東京]　15367　1988（昭和 63）年 10 月 20 日　日刊スポーツ新聞社＜Z86-2＞

122. 報知新聞　38624　1988（昭和 63）年 10 月 20 日　報知新聞社＜Z86-3＞

ベンチで頭をおさえる仰木監督と、放心状態の近鉄ナイン。報知新聞はこの頃、二色刷りの紙面では他社と異なり緑色を使用して差異化をはかっていた。

コラム

スポーツ新聞のカラー化

現在のスポーツ新聞といえば、カラー写真に赤・青・黄の派手な題字が踊っている紙面が特徴である。しかし、このような形になったのは 1990 年代のことであった。（展示資料 124、136）
新聞にカラー写真が登場したのは 1951（昭和 26）年の元旦に、朝日、毎日、日経、中日が出した別刷り特集だと言われている。東京オリンピックの際にも一般紙、スポーツ紙ともにカラー写真を掲載したことはあったが、日常的ではなかった。この頃はカラーは出稿から印刷開始まで何日もかかり、日々の刊行には取り入れられなかった。

しかし、その後、1970 年代からのコンピューターを導入した版面作り、スキャナの発達、凸版印刷からオフセット印刷といった技術革新があり、徐々にカラー化が進んでいく。こうした過程で、70 年代半ばから 80 年代半ばまでは、モノクロに題字だけ色を用いる二色刷りが行われていた（主に朱色だが報知新聞は緑）。（展示資料 115、122 等）

一般紙も含めて、初めて本格的なカラー紙面をスタートさせたのは 1986（昭和 61）年 5 月のスポーツニッポンである。スポーツ紙がカラー化を急いだのは、駅の売店での販売が多いという要因があるだろう。見出しが目立たなければ売れないからである。

メークドラマの完成

○巨人　対　中日●　5 - 2

プロ野球セ・リーグ公式戦　中日　対　巨人　25 回戦

1996（平成 8）年 10 月 6 日

ナゴヤ球場

監督復帰 4 年目の長嶋茂雄監督のもと、首位と最大 11.5 ゲーム差をつけられていた巨人は、7 月より快進撃を開始。10 月 6 日、ナゴヤ球場での対中日 25 回戦で勝利し、巨人のリーグ優勝が決まった。「メークドラマ」は長嶋監督が使った和製英語で、巨人の大逆転を表す言葉として、同年の新語・流行語大賞に選ばれた。

123. 週刊ベースボール　51（48）＝2199　1996（平成 8）年 10 月 17 日増刊号　ベースボール・マガジン社＜Z11-24＞

巨人メークドラマを特集した増刊号。松井秀喜はインタビューでメジャー挑戦もほのめかしている。

124. スポーツ報知[東京]　41447　1996（平成 8）年 10 月 7 日　報知新聞社＜Z86-3＞

長嶋自身による「メークドラマ完結　ご声援有難う御座居ました」という題字。

延長 25 回の攻防

○中京商　対　明石中●　1 - 0　（延長 25 回）

第 19 回全国中等学校優勝野球大会準決勝

1933（昭和 8）年 8 月 19 日

甲子園球場

高校野球史上最長の延長戦。

名勝負!!

大会史上初の 3 連覇をねらう中京商のエース吉田正男投手と、明石中の中田武雄投手の投手戦は無得点のまま延長戦となり、ゼロ行進が続いた。延長 25 回裏、中京商は無死満塁のチャンスを迎え、続く打者の二塁ゴロを処理した送球が一塁側に大きくそれた間に、三塁走者がホームインし、ついに決着がついた。試合時間は 4 時間 55 分。投球数は吉田 336 球、中田 247 球で両者完投であった。当時スコアボードは 16 回分までしかなく、17 回以降は「0」の表示のスコアボードを継ぎ足していった。

実況担当のアナウンサー（高野国本）は前後含めて 5 時間半しゃべりつづけ、延長 20 回過ぎから声がかれはじめた。東京在住の高野の父親が打った「セガレ、ガンバレ」の電報が、試合の放送中に甲子園球場に届いたというエピソードも。

なお、現在は 15 回までとされている延長戦だが、当時は、25 回を投げ抜いたことが「非常時にふさわしい大和魂の発露」（『アサヒスポーツ』11（17）臨時増刊　1933（昭和 8）年 8 月 30 日）と賛美された。

125. 国際写真新聞　27　1933（昭和 8）年 9 月 1 日　同盟通信社＜雑 53-53＞

右下に、継ぎ足したスコアボードの様子が掲載されている。

パネル. アサヒスポーツ　11（17）臨時増刊　1933（昭和 8）年 8 月 30 日　朝日新聞社＜雑 35-73＞表紙

板東と村椿の投げ合い

徳島商　対　魚津　0 - 0 引き分け＜延長 18 回＞

第 40 回全国高等学校野球選手権大会準々決勝

1958（昭和 33）年 8 月 16 日

甲子園球場

名勝負!!

徳島商板東英二投手の剛速球に対して、魚津村椿輝雄投手は制球力で相手打者を打たせてとるタイプ。2 人の力投で無得点のまま、この夏から設けられた規定により、延長 18 回で引き分けとなった。板東の奪三振数は 25 を数え、一試合での大会新記録となった。

翌日の再試合は、先発投手を変えてきた魚津に対して、徳島商は板東が先発完投し、徳島商が 3 - 1 で魚津を振り切った。その後、板東は決勝までを一人で投げ切り、大会通算 83 の奪三振記録を達成した。

板東は翌年中日に入団し、11 年間のプロ生活を終えたあと、解説者およびタレントとして活躍している。

126. ベースボール・マガジン　第 2 次　1(5)　1958(昭和 33)年 9 月　ベースボール・マガジン社＜Z783.7-B3＞

左上は板東（左）と村椿（右）が互いの健闘を讃えて握手をする写真。

127. アサヒグラフ　1777　1958（昭和 33）年 8 月 31 日　朝日新聞社＜Z23-5＞

終了したのが夜の 8 時過ぎであったため、ナイターのライトが印象的である。

三沢旋風

三沢　対　松山商　0 - 0　引き分け（延長 18 回）

第 51 回全国高等学校野球選手権大会決勝

1969（昭和 44）年 8 月 18 日

甲子園球場

速球の太田幸司投手を擁し東北勢初優勝を目指す三沢と、制球力のある井上明投手の松山商との投手戦は、0 - 0 のまま延長戦に。三沢は延長 15 回裏、続く 16 回裏とも満塁のランナーを出したが、松山商がサヨナラ負けのピンチをしのぎ、4 時間 16 分におよんだ決勝戦は、両者無得点のまま、延長 18 回引き分け再試合となった。翌日の再試合は、連投の太田に対して、投手を替えた松山商が 4 - 2 で勝利した。惜敗した三沢への惜しみない讃辞ともに、甘いマスクの太田には、女性ファンが殺到した。翌年の近鉄入団後もコマーシャルに出演するなど、太田フィーバーが一世を風靡した。

この大会までは、高校野球がスポーツ新聞の 1 面を飾ることはほとんどなかった。1958（昭和 33）年の徳島商対魚津（展示資料 126、127）も、1961（昭和 36）年の報徳対倉敷の大逆転劇も、1 面には掲載されていない。太田フィーバーはそれまでの高校野球の扱いも変えたといえる。

128. サンケイスポーツ　2350　1969（昭和 44）年 8 月 19 日　産業経済新聞社＜Z86-74＞

再試合が決まった際の報道。二人のコメントが印象的。太田「別に疲れません」、井上「母のために優勝を」。

129. スポーツニッポン[東京]　7550　1969（昭和 44）年 8 月 20 日 スポーツニッポン新聞東京本社＜Z86-4＞

松山商が優勝を決めた際の報道。「太田、君にも深紅の大旗を」という見出しで、三沢高校の太田の健闘をも讃えている。

130. 朝日報道写真　1969（昭和 44）年 8 月 21 日　朝日新聞社＜Y811-11＞

地元青森で熱狂的に迎えられる三沢ナイン。

131. 週刊明星　13（1）＝598　1970（昭和 45）年 1 月 4&11 日合併号　集英社＜Z24-470＞

太田の学校や家庭での様子を掲載。大学進学の予定を取りやめて近鉄入りを決意したことも伝える。この号には、「スター太田投手をとりまく頭痛のタネ」という記事もあり、契約金が推定 3 千万、年俸 180 万、球場に女性用トイレを増設しグッズやレコードも発売することなど、人気の過熱ぶりを懸念している。

箕島驚異のサヨナラ勝ち

○箕島　対　星稜●　4 - 3(延長 18 回)

第 61 回全国高等学校野球選手権大会 3 回戦

1979（昭和 54）年 8 月 16 日

甲子園球場

延長戦の最後にまさかのサヨナラ勝ち。

甲子園の名勝負として筆頭にあげられることも多い試合。

箕島はこの年春の選抜選手権で優勝しており史上 3 校目の春夏連覇がかかっていた。試合は 1 - 1 の同点のまま延長を迎え、12 回表星稜が 1 点勝ち越したが、その裏箕島は 2 死から本塁打で同点に追いついた。16 回表にも星稜が 1 点勝ち越したが、その裏箕島は 2 死走者無しの絶体絶命のピンチの場面で、打者のファウルフライを、星稜の 1 塁手がつまづいて捕球できずにアウトを逃した直後、本塁打が飛び出し、またもや同点とした。迎えた 18 回裏、箕島が適時打でサヨナラ勝ちを収め、3 時間 50 分の試合に終止符を打った。結局箕島は、この試合の勢いのまま大会を制覇した。

132. スポーツニッポン[東京]　11038　1979（昭和 54）年 8 月 17 日　スポーツニッポン新聞東京本社＜Z86-4＞

パネル. スポーツニッポン[東京]　11041　1979（昭和 54）年 8 月 20 日　スポーツニッポン新聞東京本社＜Z86-4＞

作詞家の阿久悠がこの年からはじめた連載「甲子園の詩」。箕島－星稜は阿久の中でも最高の試合であったという。連載は 2006（平成 18）年まで続いた。

133. アサヒグラフ　1979（昭和 54）年 8 月 31 日　朝日新聞社＜Z23-5＞

箕島が決勝点をあげた瞬間。

名勝負!!

○横浜　対　PL 学園●　9 - 7
○横浜　対　明徳義塾●　7 - 6
○横浜　対　京都成章●　3 - 0

第 80 回全国高等学校野球選手権大会準々決勝、準決勝、決勝
1998（平成 10）年 8 月 20 日、21 日、22 日
甲子園球場

松坂大輔投手を擁する横浜は、準々決勝で強豪 PL 学園に先制を許しながらも、2 度同点に追いつき、試合は延長戦に入った。11 回表と 16 回表にともに横浜が 1 点リードするも PL 学園が追いつくという展開となったが、横浜は、17 回表に 2 点本塁打で逃げ切り、3 時間 37 分におよぶ熱戦に終止符を打った。松坂の投球数は 250 球におよび、これを機に選手の健康管理のために、3 年後の大会より延長戦が 18 回制から 15 回制に短縮されることとなった。

続く準決勝では、横浜は松坂を先発から外し、明徳義塾に 8 回表までに 6 点差をつけられたが、8 回、9 回の攻撃で一挙に大逆転した。

決勝戦では松坂が京都成章相手に、決勝戦では 59 年振りとなるノーヒットノーランを達成。横浜が史上 5 校目の春夏連覇を達成した。

134. 日刊スポーツ[東京]　18849　1998（平成 10）年 8 月 21 日　日刊スポーツ新聞社＜Z86-2＞
PL 学園との延長 17 回を伝える。

135. 報知高校野球　21（5）＝188　1998（平成 10）年 9 月　報知新聞社＜Z7-1188＞
展示箇所は明徳義塾との準決勝での逆転サヨナラ勝ち。横浜の快進撃を各試合ごとに掲載し、「怪物ダイスケくん大ブレーク」と題して、松坂の子ども時代の写真なども。

136. スポーツニッポン[東京]　号外　1998（平成 10）年 8 月 22 日　スポーツニッポン新聞東京本社＜Z86-4＞
優勝が決まった際の号外。リード文は「松坂、君はやっぱり平成の怪物だ！」で始まる。

137. 日経写真ニュース　2185　1998（平成 10）年 8 月 27 日　日本経済新聞社＜Z80-1019＞
優勝が決まった瞬間、松坂が捕手の小山と抱き合う写真。

リンゴ事件

○慶応義塾大学　対　早稲田大学●　9 - 8

東京六大学リーグ秋季戦　早慶 3 回戦

1933（昭和 8）年 10 月 22 日

神宮球場

名勝負!!

当時人気の絶頂であった大学野球において、応援が過熱するあまり乱闘騒ぎにまで至った試合。

この年の東京六大学リーグ戦は、年間 1 シーズン制が採用された。早慶 3 回戦は、8 回を終わって 8 - 7 と早大が 1 点をリードしていたが、審判の判定を巡ってトラブルが重なった。8 回に慶大選手の盗塁をめぐる判定で、慶大の三塁ベースコーチだった水原茂（のちの巨人軍監督）が塁審に詰め寄り猛抗議を行った。9 回表、水原が三塁の守備につくと、興奮した三塁側早大応援席からリンゴの芯が投げ込まれ、水原がこれを三塁側に投げ返したことで早大側が激高。試合は 9 回裏に慶大が 2 点を返し 9 - 8 の逆転サヨナラ勝ちとなったが、終了と同時に早大応援団は慶大ベンチ、応援席になだれ込み大乱闘となり、警官隊が出動する騒ぎ

138. アサヒスポーツ　11（22）　1933（昭和 8）年 11 月 1 日　朝日新聞社＜雑 35-73＞　表紙
パネル. アサヒスポーツ　11（22）　1933（昭和 8）年 11 月 1 日　朝日新聞社＜雑 35-73＞
応援席では「ウテ」と人文字を表示している。掲載されたコラム「スポーツと応援団」は、「応援団は従的の存在で、（略）進行に支障を来すやうなことは断じて許さるべきではない。」「明ろうなるべきスポーツに及ぼす禍（わざわい）の根源を一掃すべき」とリンゴ事件を厳しく批判する。

早慶六連戦

○早稲田大学　対　慶應義塾大学●

東京六大学リーグ秋季戦　早慶戦（2 勝 1 敗）、優勝決定戦（1 勝 2 分け）

1960（昭和 35）年 11 月 6 日～12 日

神宮球場

名勝負!!

8 シーズンぶりの優勝を目指す慶大と 3 シーズンぶりの優勝を目指す早大との早慶戦は、早大の 2 勝 1 敗となり、両校が勝ち点、勝率とも首位で並び、優勝決定戦へもつれ込んだ。しかし決定戦は 1 - 1 の引き分けとなり、史上初の決定戦再試合も 0 - 0 で引き分け、再々試合では、安藤元博投手の 4 連投により、早大が 3 - 1 で勝ち優勝を決めた。当時プロ野球人気

に徐々に押されつつあった大学野球だったが、この 6 連戦は連日満員（計 38 万人）の観客となり、試合の模様は NHK と民放各局が放映するなど盛り上がりを見せた。

139. 週刊現代　2（48）　1960（昭和 35）年 12 月 4 日　講談社＜Z24-19＞

歓喜の早大生たち。次のページには、新宿の盛り場で騒ぐ様子も掲載されている。

140. 日刊スポーツ[東京]　5327　1960（昭和 35）年 11 月 13 日　日刊スポーツ新聞社＜Z86-2＞

オリンピック Olympic

第5回　二人だけのオリンピック

ストックホルム大会

1912（明治 45）

三島通庸の五男彌彦と、のちに箱根駅伝を創設した金栗四三の二人が参加。予選は「学生たり紳士に恥じざるもの」という参加資格。スポーツはエリートのものであった。

パネル．グラヒック　3（26）　1911（明治44）年12月1日　有楽社〈雑53-13〉
のどかな予選の様子

第7回　初メダル

アントワープ大会

1920（大正 9）

テニスの熊谷一弥が、日本人初のメダル（銀）獲得。しかし当時は新聞で結果が報道された程度で、オリンピック自体の知名度が低いことがわかる。

第8回

パリ大会

1924（大正 13）

スポーツ専門誌にはオリンピックが取り上げられるようになる。

パネル．運動界 5（3）　1923（大正12）年3月 運動界社 〈Z7-2770〉
誰がオリンピック選手にふさわしいか、当時のスポーツ雑誌による投票呼びかけ。実際に選定するのは体育協会だが、スポーツを観戦し批評する層がまだ少なかったことが窺われる。5月号に結果発表が掲載されており、2002票が集まったと書かれている。

パネル．アサヒスポーツ　2（9）　1924（大正13）年5月1日　朝日新聞社〈雑35-73〉
まだあまり報道されていないが、当時発達しつつあったグラフ雑誌に躍動感あふれる記事が掲載されるようになる。

冬季第2回　冬季初参加

サンモリッツ大会

1928（昭和 3）

日本が初めて参加した冬季大会。しかし冬季スポーツが発展していなかったためか、報道はほとんどされていない。

第9回　初金メダル

アムステルダム大会

1928（昭和 3）

三段跳びの織田幹雄、水泳の鶴田義行による日本初の金メダルに、沸いた。しかし、国旗を用意しておらず、他国の4倍の大きさの国旗を掲揚、国歌もフルコーラス演奏できないなど、国策としてオリンピックに力を入れている時代ではなかった。オリンピック放送はまだ行われない。

日本人女性初のメダル

○リナ・ラトケ（ドイツ）　対　人見絹枝●

1928（昭和 3）年 8 月 2 日　陸上 800m 決勝

期待されていた100mの決勝に進出できなかったため、急きょ、練習で走ったこともない800mに挑んだ。監督の言葉「足が動かなくなったら腕を振れ」を頼りにラトケ（Lina Radke）に迫り、ゴールに入ったときには意識はなかったという。ラトケに負けたとはいえ、2分17秒6の世界タイ記録で、銀メダルを獲得。

パネル．キング　4（11）　1928（昭和3）年11月　大日本雄弁会講談社<雑52-27>

コラム

人見絹枝

人見絹枝は、世界記録をいくつも達成しているスーパー・ウーマンである。しかも、初の女性スポーツ記者でもあった。記者としての仕事、技術書の執筆、講演活動、後輩を連れての海外遠征とその資金集め…、肋膜炎から肺炎になり、アムステルダムオリンピックの3年後のちょうど同じ日に24歳で没した。「女が運動したから女らしく無い……とは云はれぬだらうと思ひます。」(『改造』1927（昭和2）年2月）と書いた人見には、「新しい女」の血が流れている。

第10回　初ラジオ放送

ロサンゼルス大会

1932（昭和 7）

排日運動の中、日系移民が多数駆け付けた。新聞・雑誌による報道が多数行われるようになった。
ラジオは、IOC と現地放送局のトラブルにより全ての国が中継出来ず。
後から思いだして語る「実感放送」が行われた。

パネル．アサヒグラフ 19（9）　1932（昭和7）年8月31日　朝日新聞社〈Z23-5〉

かけつけた日本人たち。日の丸のついた日傘をさしている人も。

第11回　ヒットラーのプロパガンダ

ベルリン大会

1936（昭和 11）

ヒットラーのプロパガンダとして有名なオリンピック。日独防共協定が結ばれる直前とあって、日本選手は大歓迎を受け、前回ロサンゼルス大会の排日感情とは大違いであった。（初出場のサッカーについては、サッカー　名勝負「ベルリンの奇跡」を参照）
時間限定ではあるがラジオ中継が実現。新聞・雑誌では、写真の即時電送が行われたが精度が悪く、鮮明な写真はフィルムを輸送して２週間を要した。海外ではテレビの試験放送も行われた。

パネル．運動競技資料とオリムピック事情 稲葉言治著　1936（昭和11）年　東京毎夕新聞社<430-83>

開会式のヒットラー

パネル．　アサヒグラフ 27（8）　1936（昭和11）年8月19日　　朝日新聞社 <Z23-5>

ヒットラーの入場を迎える「ハイルヒットラー！」

パネル．国際写真新聞　164　1936（昭和11）年8月1日　同盟通信社<雑53-53>

ラジオの番組表。朝と夜に時間を決めて、実況、実感、録音取り交ぜて放送されている。

前畑ガンバレ！

名勝負!!

○前畑秀子　対　マルタ・ゲネンゲル（ドイツ）●

1936（昭和11）8月11日　150m平泳ぎ決勝

予選では前畑がトップ通過だったが、準決勝ではゲネンゲル（Martha Genenge）のタイムが上回り、始まる前から接戦が予想された。本番では125mを過ぎるころから前畑とゲネンゲルの一騎打ちとなる。あと20mの地点で、満場は総立ち。前畑は五輪新の３分３秒６、ゲネンゲル３分４秒２。その差わずか０．６秒。NHK河西アナウンサーの「前畑ガンバレ！」はあまりにも有名。なお、放送は、中継終了予定時刻の午前0時を過ぎたため、中継局に対する「スイッチを切らないでください」という言葉から始まっている。

パネル．運動競技資料とオリムピック事情　稲葉言治著　1936（昭和11）年　東京毎夕新聞社<430-83>

コラム

貧しさに耐え、親孝行をし…

前畑は大会前に両親を亡くし、貧しい家庭の長女として、弟たちの面倒を見るために水泳を止めなければならない事態に陥った。結局、恩師のはからいで水泳を続けることができたが、当時のメディアには「必ず勝たうといふ決心はお母さんを想ふことによつて拍車をかけられました。」（教育思湖研究会編『水の女王前畑秀子物語』1936（昭和11）年）といった、孝行エピソードが添えられた。

第12回　幻の東京オリンピック

1940（昭和 15）

紀元二千六百年の記念行事として、東京市長永田秀次郎によって発案された。万博も同時開催の予定だった。ベルリン大会初日の前日に、次回開催地が東京と決定し、当時は、夏季大会開催国に冬季大会の優先権があったため、同年の冬季大会として札幌も開催が決定した。
（永田秀次郎肖像）国立国会図書館電子展示会「近代日本人の肖像」より

テレビ開発はすでにかなり進んでおり、NHKは東京オリンピックまでにテレビ放送を実用化し、実況中継を行うつもりで、各国に放送希望の有無まで確認していた。

しかし、1937（昭和12）年7月、日中戦争が始まり、国際連盟総会は日本を不戦条約に違反すると決議する。1938（昭和13）年3月、カイロでのIOC総会では中国やイギリスが東京開催に反対した。日本代表であった嘉納治五郎は、IOC総会出席の帰路、心労と発作で太平洋上で死去した。
（嘉納治五郎肖像）国立国会図書館電子展示会「近代日本人の肖像」より

軍部の中にもオリンピック反対の声が高まった。返上を決定したのは、1938（昭和13）年7月15日の閣議である。同年6月23日の閣議で軍事以外に金属を使用することが禁じられたことにより、競技場建設が不可能になったことが、直接の原因とも言われている。

なお、駒沢をメインスタジアムとする案は1964（昭和39）年の東京大会でも採用された。また、返上の急先鋒だった、当時政友会の衆議院議員だった河野一郎は、1964（昭和39）年の東京大会でオリンピック担当国務大臣を務めた。

141. *Tokyo Olympic news : 12th Olympiad, 1940.* No. 1 (May 10, 1937)-no. 16 (Aug. 25, 1938). The Organizing Committee of the XIIth olympiad, Tokyo 1940 [編]<Z67-S9>
第十二回オリンピック東京大会組織委員会による海外向けニューズレター。返上決定の5日前に発行された15号には、学生たちが競技場作りを手伝っている様子が掲載されている。最終号には、技術顧問として組織委員会に協力したクリンゲベルグによる「SAYONARA　OLYMPIA TOKYO」を掲載。

142. 第十二回オリンピック東京大会東京市報告書 東京市編 1939（昭和14）年<785-25>
東京市による報告書。展示箇所は、世田谷駒沢ゴルフ場の敷地に建設予定だった総合競技場の完成予想図。正面に紀元二千六百年記念塔、右が主競技場、左はプール。大会後は東京市直営の競馬場とする予定であった。

143. The Organaizing Committee of the XIIth Olympiad Tokyo 1940: *XIIth Olympiad Tokyo 1940.* 1938<Ea-230>
海外向けの宣伝パンフレット。プログラムや会場図を掲載。冒頭には二重橋の写真が掲載され、日本は武士道によりフェア

プレイの精神が根付いているという説明から始まる。表紙画は結城素明。鉄道省国際観光局が刊行していた海外向け雑誌『Travel in Japan』と似たデザインで、国をあげての誘致の様子がうかがえる。フランス語版もあり。

143-2. XIIth Olympiad Tokyo, 1940 : general rules and programme / pub. by the Organizing Committee of the XIIth Olympiad Tokyo, 1940.

Tokyo : [The Committee], 1938.＜Ea-236＞

東京大会の詳細なプログラムや規則が掲載されている「一般規則及びプログラム」。日程表や地図は宣伝パンフレット（展示資料 143）と同じで、日程は 8 月下旬から 9 月上旬（その後 9 月下旬から 10 月上旬に変更）、競技場も明治神宮周辺（その後駒沢に変更）と記載されている。組織委員会の報告書（展示資料 144）によると、1938（昭和 13）年 3 月、IOC カイロ総会で配布された。毎日新聞 2013（平成 25）年 10 月 6 日 1 面で「英語版発見」と紹介されているものと同一だと思われる。英語版のほかフランス語版、ドイツ語版、日本語版も作成されており、当館では、フランス語版＜Ea-235＞、ドイツ語版＜Ea-232＞も所蔵。背の色が言語ごとに異なる。

143-3. Sapporo, 1940 : règlement général et programme / pub. par the Vth Olympic Winter Games Committee.

Sapporo : [The Committee], 1938.＜Ea-234＞

展示資料 143-2 と同じ体裁の、幻の冬季オリンピック札幌大会の「一般規則及びプログラム」。同じく 1938（昭和 13）年 3 月 IOC カイロ総会で配布された。展示はフランス語版で、英語版、ドイツ語版、日本語版も作成されているが、当館では、フランス語版とドイツ語版＜Ea-233＞を所蔵。大倉山シャンツェの図面や会場付近の地図も折り込まれている。

144. ［第十二回オリンピック東京大会組織委員会］報告書　第十二回オリンピック東京大会組織委員会 1939（昭和14）年〈779-51〉

展示箇所はポスターやロゴマークの候補作。2位に資生堂のデザインで有名な山名文夫、ほかにも洋画家伊原宇三郎、脇田和、和田三造らの名前が並んでいる。

パネル．第十二回オリンピック東京大会一般規則及びプログラム　昭和15年　1940（昭和15）年　第十二回オリンピック東京大会組織委員会＜特202-268＞

コラム

天皇の開会宣言は不可能！？

オリンピック憲章には、君主が開会を宣言することが定められている。しかし、当時は天皇の声を放送してはならないという不文律があった。「不敬」だからだ。そうしたことも、開催返上派の理由のひとつとなった。

宮本武蔵、姿三四郎ブーム

現代でも人気がある、吉川英治著『宮本武蔵』（1935（昭和10）年連載開始）、富田常雄著『姿三四郎』（1942（昭和17）年書き下ろし）は、戦時下にブームとなった武道小説である。絵本などでも多数取り上げられた。無心になることでおのずから相手を倒すという武道の奥義が、試合で（戦争で）死んで捨て石となることもいとわない、という文脈で読まれていたと指摘されている。

パネル．宮本武藏　［大河内翠山］［文］　［石井滴水］［絵］［他］　1937（昭和12）年2月　大日本雄辯會講談社＜Y17-N03-H1000＞

第14回　招待されず

ロンドン大会

1948（昭和 23）

第二次世界大戦の責任を問われ、ロンドン大会に参加できず。

フジヤマのトビウオの友情

名勝負!!

○古橋廣之進　対　橋爪四郎●

1948（昭和 23）年 8 月 6 日　日本水泳選手権　1500m 自由形

日本水泳連盟はロンドン大会にあわせて日本選手権を開催。古橋が18分37秒0、橋爪が18分37秒8の世界新記録を出し、ロンドン大会同種目金メダルの19分18秒5をはるかにしのいだ。しかし、当時日本は国際水泳連盟から除名されていたため、公式記録としては認められていない。

記事には、ライバルであり友人である二人の笑顔がまぶしい。戦後貧しいおり、選手たちの主食はトウモロコシやサツマイモだったという。

翌年ロサンゼルス全米水泳選手権でも二人は好成績をおさめ、古橋は「フジヤマのトビウオ」と呼ばれた。

パネル．時事新報　20192　1948（昭和 23）年 8 月 7 日　時事新報社〈新-3〉

第15回　16年ぶりの参加

ヘルシンキ大会

1952（昭和 27）

「小さい日本人が大きな外人を倒す」と期待されていたフジヤマのトビウオ古橋は、南米遠征でかかった赤痢のために結果を出せず。実況は「古橋を責めないでください」と涙声になった。

パネル．キング　28（11）　1952（昭和27）年11月 大日本雄弁会講談社<Z051.6-Ki1>

詩人サトウハチローが、友人である古橋に捧げた詩。出演していたラジオ番組で、古橋が敗れた翌日に朗読した。「好きな選手が敗れた時に胸に漂う、底知れぬ哀愁」（文中より）に満ちている。

冬季第7回　冬季初メダル

コルチナ・ダンベッツォ大会

1956（昭和 31）

スキー（回転）猪谷千春が冬季初メダル。

猪谷がメダル圏内だということで、冬季も中継が行われることになった。

パネル．国際写真情報　30（3）　1956（昭和31）年3月 国際情報社<Z051.4-Ko3>

猪谷の謙虚さが選手村で好評である、との記載もある。猪谷は両親ともにスキー界の草分けで、メダルは英才教育の賜物でもあった。

第16回　初南半球

メルボルン大会

1956（昭和 31）

水泳古川勝の金のほか、レスリング、体操が以後お家芸に。

宿命のライバル

○マレー・ローズ（オーストラリア）　対　山中毅●

1956（昭和 31）年 12 月 4 日

メルボルン大会　400m 自由形

1960（昭和 35）年 8 月 31 日　ローマ大会　400m 自由形

メルボルン大会400m自由形予選で隣のコースだった山中とローズ（Murray Rose）。山中は0秒1でローズに負けたが、この因縁は長く続き、二人は宿命のライバルとなった。

1959（昭和34）年7月の日米対抗の400mでは山中がローズを敗り、同大阪大会でもローズを抑え、ローマ大会400mでは予選で山中が勝ったものの、決勝ではローズが金。通算成績では

五分五分なのに、オリンピックではいつもローズが金メダルだった。
二人は同年同月の生まれで、仲の良い友人同士。抱き合う写真からもその様子が見てとれる。

パネル．国際写真情報　31（2）　1957（昭和32）年1月　国際情報社<Z051.4-Ko3>

第17回　初テレビ

ローマ大会

1960（昭和 35）

男子マラソンでエチオピアのアベベが裸足で優勝。ボクシングで優勝したカシアス・クレイは帰国後、人種差別に抗議し金メダルを川に捨てて、モハメド・アリとしてプロに転身。ブラックパワーの活躍と人種差別問題は以後のオリンピックでも絶えない。
テレビ放送は実現したが、海外中継は行えず、録画を放送していた。そのため、実況をラジオで聴き、3日後にテレビで録画を見るというのが当時の楽しみ方だった。

パネル．国際写真情報 34（10）　1960（昭和35）年10月 国際情報社 <Z051.4-Ko3>
表彰台右端が山中。

コラム

テレビの放送権料

ローマ大会では、初めてテレビ放送に権利料が発生した。このとき日本が支払ったのは 5 万ドル。年々高騰し、24 年後のロサンゼルス大大会（1984（昭和 59）年）では 5,000 万ドルを支払った。テレビ放送はスポーツと結びつき、今ではテレビなくしてスポーツはあり得ないと言っても過言ではないだろう。

敗戦から19年、日本をアピールする！

第18回　東京大会

1964（昭和 39）

幻に終わった東京大会を実現すべく、日本は講和条約発効後すぐに名乗りを上げた。第17回（1960）の開催は逃したものの、復興ぶりと優秀さをアピールした結果、第18回大会が東京に決まった。

昭和30年代の東京は、高度経済成長に伴って急激に人口が増え、交通網や水道の整備が急務だった。東京大会を機に、首都高速、青山通り、環状七号線、利根川からの導水工事が行われ、東海道新幹線が東京大会の10日前である10月1日に開業。こうしたこともあわせて、東京大会には全部で1兆800億円が使われた。

東京大会はオリンピック史上初のテレビの衛星中継が行われた大会である。当時、米ソの宇宙開発競争が激しく、その副産物で衛星中継の技術が進んでいた。国内でも、テレビオリンピックと言われるほどテレビの影響力は大きく、皇太子ご成婚の1959（昭和34）年4月、テレビの契約件数は200万だったが、東京大会で1600万と激増。97.3%が東京大会の何らかの競技をテレビで見ている。

10月10日の開会式はその後、祝日「体育の日」となった。渋谷のNHK、武道館、駒沢公園、首都高速…現在の東京には多くの思い出が残されている。

なお、長嶋茂雄は、ＩＯＣ委員のコンパニオンを務めた女性と報知新聞の座談会で知り合い、翌年結婚した。

145. 朝日報道写真 1964（昭和39）年8月18日<Y811-11>

1945（昭和20）年8月6日に広島県で生まれた坂井義則。400mで国体優勝し、早稲田の陸上部に所属していた。選手として出場したかったが果たせず、聖火の最終ランナーとして声がかかった。写真は最終ランナーに決まった際のもの。時の人となり、世界は一変したという。大学卒業後はテレビ局に就職し、スポーツ部門で活躍した。

敗柔道日本がオランダの英雄に抑え込まれた日　★

名勝負!!

○アントン・ヘーシンク（オランダ）　対　神永昭夫●

1964（昭和 39）年 10 月 23 日　男子柔道無差別級決勝

この大会から正式種目になった柔道。名をはせていたオランダの巨人ヘーシンク（Antonius Geesink）を打倒すべしというプレッシャーが神永にのしかかる。しかしヘーシンクはすでに1961（昭和36）年のパリ世界選手権で神永を破っており（外国人として初優勝）、実力の差は明らか。神永は左ひざのじん帯をいため、全盛期を過ぎていた。負けるとわかっていても期待を背負って戦わねばならない。8分30秒、神永が繰り返し体落としを放った際に、ヘーシンクは神永の腰をとらえて寝技に誘い込んだ。袈裟固め。柔道の国際化が決定的になった瞬間だった。

146. 朝日報道写真　1964（昭和39）年10月26日<Y811-11>

東洋の魔女　★

名勝負!!

○日本　対　ソ連●

1964（昭和 39）年 10 月 23 日　女子バレーボール決勝

第1、2セットを連取して圧勝かと思わせたが、第3セットを13-7から追い込まれ、14-13になった。しかし、手に汗握る展開は、ソ連のオーバーネットで決着した。

すでに1960（昭和35）年の世界選手権で無敵と言われたソ連から1セットを奪って2位、1962（昭和37）年の世界選手権では1位に輝いていた日本代表。1961（昭和36）年のヨーロッパ遠征で全勝し、現地新聞に「東洋の魔法使い」と書かれたことにより、「東洋の魔女」の異名をとった。骨折しても練習を休まず、親が危篤でも見舞いに行けず、大松（だいまつ）監督は「鬼」と呼ばれたが、その“根性”が人気だった。この試合のNHKの視聴率66.8%は、現在でもスポーツ部門で歴代最高記録を誇る。

147. われらすべて勝者 東京オリンピック写真集 1965（昭和40）年　講談社<780.6-W45>

開催の翌年にまとめられた写真集。東洋の魔女の戦いぶりも見開きで紹介。メダリストのコメントや、三島由紀夫、石原慎太郎といった作家の文章も掲載されている。

最後のトラックでの激闘　★

名勝負!!

○ベイジル・ヒートリー（イギリス）　対　円谷幸吉●

1964（昭和 39）年 10 月 21 日　マラソン

アベベの後を追って国立競技場に入ってきた円谷。しかし、ゴールまで200mの地点でヒートリー（Basil Heatley）に抜かれ、3秒差で銅メダルに終わる。記録は2時間16分22秒の自己ベスト、東京オリンピック陸上競技で唯一のメダリストという栄冠に輝いたが、満場の観衆の前でヒートリーに抜かれた屈辱と、メキシコで金メダルをというプレッシャーが円谷を襲った。そのうえ持病のアキレス腱痛、椎間板ヘルニアでトレーニングは思うようにならない。メキシコオリンピックを控えた1968（昭和43）年1月8日、勤務先の自衛隊体育学校の宿舎で自殺。27歳であった。遺書は31人の親族それぞれに呼びかけ、「幸吉はもうすっかり疲れ切ってしまって走れません」と書かれていた。

148.国際写真情報　38（12）　1964（昭和39）年12月　国際情報社<Z051.4-Ko3>

円谷を「根性男」「自衛隊魂」と紹介する。

149.週刊TVガイド　3（40）＝112 1964（昭和39）年10月9日 東京ニュース通信社<Z21-102>

オリンピック番組表が掲載されており、それによると、朝6時から夜12時までほぼ間断なく放送されている。表紙は1962（昭和37）年からフジテレビ系列で放送されていたテレビ番組「オリンピックショウ」の様子。クイズに正解するごとに、聖火リレーの経由地が記された階段を一段ずつ降り、最後は東京にたどりつく仕掛け。左端は司会の桂小金治。

150.Official handbook to Tokyo Olympics オリンピック東京大会組織委員会 1964（昭和39）年<780.6-07662o>

公式ハンドブック。当日券販売から選手の移動方法まで、内容は幅広い。末尾に英文ページあり。表紙は駒沢会場の管制塔。設計は芦原義信で、五重塔をイメージしている。現在も駒沢公園内にオリンピック記念塔として残る。

151.オリンピック東京大会施設作品集　第1回日本建築祭実行委員会　1964（昭和39）年<780.66-0766>

オリンピックを機に、8つの建築関係団体が「日本建築祭」を開催した。それを記念して編まれた、主にオリンピックに使用された建築物の写真集。当時の東京を知るだけでなく、斬新な写真を見て楽しむこともできる本。

コラム

女子選手の結婚引退について

前畑秀子はロサンゼルス大会（1932（昭和7）年）時に18歳。当時の適齢期であった。ベルリン大会（1936（昭和11）年）まで出場したら適齢期を逃すと考えていた。つまり、結婚したらスポーツは続けられないという認識なのである。

東洋の魔女たちも、結婚問題に悩まされた。1960（昭和35）年の世界選手権で2位、1962（昭和37）年の世界選手権では1位、当然東京大会への期待がかかる。しかし当時の20代後半といえば完全な「行き遅れ」である。あと2年、あと2年と引退をのばし、「婚期を逃してまでスポーツをさせるのか」とマスコミにたたかれもした。大松監督はのちに「期待しながら非難するーそれが世間であり、その非難に黙って耐えることが、期待にこたえることでした。」（大松博文著『なせば成る！　続・おれについてこい』1964（昭和39）年）と語り、『月刊バレーボール』（1964（昭和39）年11月号）には、「女子は23才ぐらいになると、そろそろ引退だ（略）これでは、賽の河原」「家庭の環境、ご主人の理解、また同僚や会社の理解など（略）できないことではないと思う」と日本バレーボール協会理事長と副理事長の対談が掲載されている。主将河西は東京大会後に31歳で引退、佐藤栄作首相の仲人で結婚した。

スポーツ漫画への影響

1968（昭和 43）年に連載が始まったバレーボール漫画『アタック No.1』（浦野千賀子著）は、メキシコ大会で女子バレーボールがソ連に負けたことを踏まえている。同年『サインは V!』（神保史郎原作、望月あきら作画）も連載開始。両者ともアニメ化、ドラマ化され、バレーボールブームを加熱させた。1970（昭和 45）年に連載が始まったサッカー漫画『赤き血のイレブン』（梶原一騎原作、園田光慶・深大路昇介作画）も、メキシコオリンピックのメダリストが高校に赴任してくるところから始まる。これまでのスポーツ漫画は野球と相撲がほとんどだったが、オリンピックのテレビ中継により、それ以外のスポーツも題材となった。

第 19 回　初の海外テレビ中継

メキシコ大会

1968（昭和 43）

ソ連がチェコに進駐し、チェコの女子体操選手チャスラフスカには、ひときわ観客の同情が集まった。日本はバレーボールで男女とも銀。ウェイトリフティングの三宅兄弟がWメダル。サッカーも銅メダルと健闘した（→サッカー　名勝負「ベルリンの奇跡」を参照）。
テレビは衛星中継が始まり、海外のオリンピックを生で見られる時代が到来した。

アジアで初の冬季大会

冬季第11回　札幌大会

1972（昭和 47）

東京大会の開催が決まった翌1960（昭和35）年、冬季大会招致委員会を設置。東京と同じく、戦前に幻に終わった大会の実現に向けて招致活動を行った。1966（昭和41）年4月のローマでのIOC総会で、カルガリー16票の倍の32票で圧勝。東京大会の成功が後押しとなった。

札幌大会での大きな話題は、アマチュアリズムである。当時のIOC会長ブランデージが、選手が商業広告に出演すること等に反発し、アルペンスキーの金メダル候補カール・シュランツ（オーストリア）が、アマチュア規定違反で失格になった。アマチュアリズムはオリンピックの創始者であるクーベルタンが提唱したものだが、すでに札幌大会のときには現実的でなくなっており、ブランデージの退任後、オリンピックのアマチュア規定は削除された。

また、東京大会でのテレビ中継は白黒が中心で、冬季でも1968（昭和43）年のグルノーブル大会では一部が白黒であったが、札幌大会は冬季史上はじめて完全にカラー化した。

日の丸飛行隊のメダル独占　★

名勝負!!

笠谷幸生、金野昭次、青地清二

1972（昭和 47）年 2 月 6 日　ジャンプ 70m 級（現ノーマルヒル）

日本は冬季オリンピックではコルチナ・ダンペッツォの猪谷千春しかメダルを獲得できていない。札幌大会はアジアで初めての冬季オリンピックということで、メダルの期待が集中し

た。当日は無風の快晴。90m級のほうに勝負をかけていたため、リラックスして飛ぶことができた。笠谷が金メダル、金野が銀、青池が銅と、メダルを独占し、以後、日本のジャンプを「日の丸飛行隊」と呼ぶようになった。

152. 朝日報道写真 1972（昭和47）年1月20日〈Y811-11〉
聖火の札幌入り。
153. 毎日グラフ　25（9）＝1161　1972（昭和47）年2月29日臨時増刊　毎日新聞社＜Z23-6＞
笠谷の、目を見開き、口を大きく開いた表情が印象的。この号の表紙は表彰台の日の丸飛行隊。

第20回

ミュンヘン大会
1972（昭和 47）

パレスチナゲリラがイスラエル選手を襲撃して11人が死亡。
日本は男子バレーボールが悲願の金。水泳では、青木まゆみも金。

154. 朝日報道写真 1972（昭和47）年8月30日〈Y811-11〉
100m平泳ぎで世界新記録を出して金メダルを獲得した田口信教。メキシコ大会で金メダルのタイムを出したにもかかわらず、足の甲で水を打つ泳法が違反として失格となった雪辱を果たした。

第21回

モントリオール大会
1976（昭和 51）

女子体操選手コマネチが大人気。
開催国カナダは膨大な赤字を抱え、その後何年も税金で返済しなければならなかった。

155. 朝日報道写真 1976（昭和51）7月30日〈Y811-11〉
宿敵ソ連を危なげなく3 - 0のストレートで下した。

第22回

モスクワ大会

1980（昭和 55）

東西冷戦状態のさ中、ソ連のアフガニスタン侵攻をきっかけにアメリカが不参加を表明。日本、西ドイツ等がそれに追随。多くの選手が涙を飲んだ。

第23回　共産圏不参加

ロサンゼルス大会

1984（昭和 59）

モスクワのお返しに、共産圏が不参加となった。また、初めての民間主導の大会となり「商業五輪」と揶揄する声も。カール・ルイスが陸上四冠を達成。

第山下8年越しの金メダル

名勝負!!

○山下泰裕　対　モハメド・ラシュワン（エジプト）●

1984（昭和 59）年 8 月 12 日　男子柔道無差別級決勝

1980（昭和55）年のモスクワオリンピックの金メダル候補だった山下。しかし、国際紛争により、日本オリンピック委員会は不参加を決定。多くの選手が涙をのんだ中、山下は柔道選手では唯一ロサンゼルスまで現役を続け、満を持してロサンゼルスオリンピックに臨んだ。しかし、2回戦で西ドイツのシュナーベルと対戦した際、右足ふくらはぎに肉離れを起こす。決勝戦はエジプトのラシュワン（Mohamed Rashwan）。ラシュワンは怪我をしたところをわざと狙うようなことはしなかった。山下は寝わざに持ち込むという作戦。払い腰に出たラシュワンを一気に倒して横四方固め。1分5秒で一本となる。表彰台から降りる山下にラシュワンが手を差し伸べた場面も印象的だった。

156. 近代柔道　6（10）=61 1984（昭和59）年9月増刊　ベースボール・マガジン社〈Z7-1152〉

第24回

ソウル大会

1988（昭和 63）

ベン・ジョンソンがドーピングでメダル剥奪。

バサロ泳法の賭け

名勝負!!

○鈴木大地 対 デビッド・バーコフ（アメリカ）●

1988（昭和 63）年 9 月 24 日　100m 背泳ぎ決勝

予選でバーコフ（David Berkoff）が54秒51の世界新記録をマーク。鈴木大地は1秒4遅れの3位。急遽、これまで21回だったバサロの回数を、27回に増やすことにした。バサロとは、潜水でスタートダッシュをする泳法。スピードが出る反面、長く潜ると体力が落ちる危険性がある。75m過ぎ、バーコフの身体が浮いてきて、大地とポリャンスキーが追い上げる。0.13秒差、計算どおりのゴールだった。

157. 日経写真ニュース 1988（昭和63）年9月22日　日本経済新聞社〈Z80-1019〉

冬季第16回

アルベールビル大会

1992（平成 4）

ノルディック複合団体が金メダル、女子スピードスケートで橋本聖子が悲願の銅メダル、女子フィギュアスケートで伊藤みどりが銀メダルを獲得した。

負傷を押して回生の金

名勝負!!

○古賀稔彦　対　ベルタラン・ハイトス（ハンガリー）●

1992（平成 4）年 7 月 31 日　男子柔道 71kg 以下級決勝

稽古中に左ひざ副じん帯を故障。減量のために食事も取れず、栄養剤だけで本番に臨んだ。準決勝では、1分12秒で豪快な一本背負いを決める。決勝の相手はハンガリーのハイトス（Bertalan Hajtós）。脚をひきずりながら仕掛けるが、両者ポイントを取れないまま、5分間が過ぎた。判定は3本とも古賀を支持。古賀の雄たけびが会場に響いた。「技術面ではなく、絶対に優勝するとの気持ちを持ち続けた」と古賀は語る。

158. 日経写真ニュース　1992（平成4）年8月6日　日本経済新聞社<Z80-1019>

雄たけびをあげる古賀。

159. 日経写真ニュース　1992（平成4）年8月6日　日本経済新聞社<Z80-1019>

有森裕子のゴールの様子。

第25回

バルセロナ大会

1992（平成 2）

平泳ぎの岩崎恭子、史上最年少14歳で金。有森裕子の女子マラソン銀メダルも、女子陸上では人見絹枝以来の快挙。

コラム　スポ根から「コケちゃいました」へ

『巨人の星』（梶原一騎原作、川崎のぼる作画）に代表される「スポ根」が1960～70年代に流行したが、1980年代に入ると、『タッチ』（あだち充著）に代表されるように、根性とは無縁のスポーツ漫画が流行した。オリンピックの舞台でも、そうした発言が印象的である。ソウル大会において体操で銅メダルを獲得した池谷幸雄＆西川大輔の「ボクラ失敗しても笑っていこうと決めたんです。いままでの日本人は暗すぎたんと違いますか。」（『フライデー』1988（昭和63）年10月19日増刊）、バルセロナ大会のマラソンで優勝候補だった谷口浩美が、踵を踏まれて転倒し8位に終わっての発言「コケちゃいました」など、かつての円谷のような悲壮感は見られない。

第26回

アトランタ大会

1996（平成 8）

第1回の近代オリンピックからちょうど100周年。会期中にオリンピック公園でテロ事件が発生。聖火の点灯は、パーキンソン病を患ったモハメド・アリが行った。

冬季第18回　日本で二度目の冬季大会　★

長野大会

1998（平成10）

20世紀最後の冬季オリンピックは、二度目の日本開催となった。これまでの開催地の中では、最も南に位置している。これにあわせて長野新幹線がフル規格で開通した。開会式には、冬季大会で日本人初のメダル獲得者猪谷千春や札幌の日の丸飛行隊笠谷幸生、金野昭次らが出場した。

160.　日経写真ニュース　1998（平成10）年2月19日　日本経済新聞社<Z80-1019>

スピードスケート男子500mで、日本人のスケート競技初の金メダルを獲得した清水宏保。

日の丸飛行隊の金メダル　★

岡部孝信、斎藤浩哉、原田雅彦、船木和喜

1998（平成10）年2月17日　ジャンプ　ラージヒル団体戦

1回目のジャンプでは4位。4年前のリレハンメルで、金メダル確実な中、原田が失敗して銀メダルに泣いたことを想起させた。しかし、2回目は全員が好成績。原田も137mの大ジャンプを決め、最終ジャンパー船木が金を決めた。「Happy Harada」と呼ばれるキャラクターと高い位置で飛ぶスタイルの原田、ストイックなキャラクターと低い位置から「世界一美しいフォーム」で飛ぶ船木、対照的な二人が印象に残った。

161.　日経写真ニュース　1998（平成10）年2月26日　日本経済新聞社<Z80-1019>　★

162.　アサヒグラフ　3962　1998（平成10）年3月10日増刊　朝日新聞社 <Z23-5>

団体戦一回目を飛ぶ船木。この号の表紙は船木と原田。

参考文献

全般

・新聞集成昭和史の証言　第 1 巻～ 第 20 巻　本邦書籍　1983.10.～1987.12＜GB511-152＞
・昭和　二万日の全記録　第 1 巻～第 19 巻　講談社　1989.6.～1991.2＜GB511-E43＞
・戦後史大事典　1945-2004　増補新版　佐々木毅、鶴見俊輔、富永健一、中村政則、正村公宏、村上陽一郎編 三省堂　2005.7＜GB8-H40＞
・朝日新聞の記事にみるスポーツ人物誌　明治・大正・昭和　朝日新聞社編　朝日新聞社 1999.6＜FS6-G4＞
・昭和スポーツ列伝　文芸春秋編　文芸春秋　1992.7＜FS6-E18＞
・戦後スポーツあの場面あの記録　読売新聞社編　読売新聞社　1996.10＜KD961-G19＞
・大逆転!　血湧き肉躍る、33 の逆転劇　ベースボール・マガジン社　1998.1＜KD961-G43＞
・スポーツ名勝負物語　二宮清純著　講談社　1997.11＜KD961-G27＞

相撲

・厳しく美しい土俵　二子山勝治著　ベースボール・マガジン社　1989.5＜KD971-E18＞
・巨人、大鵬、卵焼き　私の履歴書　大鵬幸喜著　日本経済新聞社　2001.2＜KD971-G86＞
・大相撲この一番　"通"が選ぶ思い出の名勝負集　同文書院総合企画室編　同文書院 1994.3.＜KD971-E152＞
・朝日新聞.[東京]　1981.1.26 朝刊＜YB-2＞
・大相撲　37(6)=404　1991.6＜Z11-474＞
・昭和の大相撲　「昭和の大相撲」刊行委員会編　ティビーエス・ブリタニカ　1989.11＜KD971-E31＞
・目でみる昭和の大相撲　玉錦・双葉山から柏鵬まで　景山忠弘編・解説　国書刊行会, 1986.9＜KD971-82＞
・大相撲八十年史　財団法人日本相撲協会設立　日本相撲協会、ベースボール・マガジン社（発売）　2005.12＜KD6-H51＞
・日本相撲大鑑　窪寺紘一著　新人物往来社　1992.7＜KD971-E84＞
・物語日本相撲史　川端要寿著　筑摩書房　1993.11＜KD971-E143＞
・戦後新入幕力士物語　第 1 巻～第 5 巻　佐竹義惇著　ベースボール・マガジン社　1990.10－1994.7＜KD971-E48＞
・名調子・杉山邦博の大相撲この名勝負　道を極めた力士との出会い　杉山邦博著　エイデル研究所　1988.9＜KD971-E9＞
・図解平成大相撲決まり手大事典　新山善一著　琴剣淳弥絵　国書刊行会　2008.4＜KD971-J15＞
・大相撲の事典　沢田一矢編　東京堂出版　1995.9＜KD971-G13＞
・相撲随筆　尾崎士郎著　六興出版　1982.11＜KD971-53＞
・春日野清隆と昭和大相撲　川端要寿著　河出書房新社　1990.2＜KD971-E30＞
・歴史ポケットスポーツ新聞相撲　荒井太郎著　大空出版　2008.5＜KD971-J24＞
・相撲 47(5)=628　1998.5 ［他多数］＜Z11-252＞

サッカー

・すべては、あの日から。 金子達仁著　新潮社　2006.5＜KD978-H280＞
・Gainer　3（10）　1992.10　光文社＜Z6-4013＞
・Coaching　ハンス・オフト著　大原裕志訳　小学館　994.12＜FS35-E1089＞
・日本サッカー狂会　日本サッカー狂会編　国書刊行会　2007.7＜KD978-H403＞
・読売新聞　（47143）　2007. 6. 5 朝刊　読売新聞社＜YB-41＞
・Sports graphic number　17（18）増刊　1996.9.5　文藝春秋＜Z11-1057＞
・スウェーデンオリンピック委員会ホームページ　Olympisk Historia － Sommar-OS － Berlin -1936
http://www.sok.se/olympiskhistoria/olympiskaspel/olympiskaspel/berlin1936.5.18ea16851076df6362280009722.html
http://www.sok.se/inenglish/berlin1936.4.18ea16851076df63622800011189.html
・東京オリンピック選手強化対策本部報告　日本体育協会　1965　＜780.06-N689t＞
・メキシコの青い空　山本浩著　新潮社　2007.8＜KD978-H401＞
・「J リーグ」のマネジメント　広瀬一郎著　東洋経済新報社　2004.9＜KD978-H174＞
・財団法人日本サッカー協会 75 年史　日本サッカー協会 75 年史編集委員会　日本サッカー協会　1996. 9＜FS4-G18 ＞
・日本サッカー史　後藤建生著　双葉社　2002.11＜KD978-H20＞
・サッカー戦術の歴史　ジョナサン・ウィルソン著　野間けい子訳　筑摩書房　2010. 7＜KD978-J228＞
・スポーツ 20 世紀 v.6　サッカー名勝負の記憶　ベースボール・マガジン社 2000. 12＜KD961-G65＞
・賀川サッカーライブラリー
http://library.footballjapan.jp/index.html
・Sports graphic number　31（7）=750 2010. 4. 1　文藝春秋＜Z11-1057＞
・JSL yearbook　1989/1990　日本サッカーリーグ＜Z11-2058＞

柔道

・激動の昭和スポーツ史 16　ベースボール・マガジン社　1989.6＜FS22-E14＞
・激動のスポーツ 40 年史　1945～1985 9　ベースボール・マガジン社　1986.2＜FS22-E2＞
・柔道百年の歴史　講談社　1970 ＜FS37-23＞

ラグビー

・日本ラグビーフットボール協会ホームページ
http://www.rugby-japan.jp/

ボクシング

・ボクシング 100 年　日本スポーツ出版社　2001.1＜KD975-G403＞

プロレス

・名勝負数え唄　俺たちの昭和プロレス　藤波辰爾、長州力著　アスキー・メディアワークス　角川グループパブリッシング（発売）　2012.2＜KD975-J147＞
・毎日新聞.［東京］　1957. 10. 2 朝刊＜YB-6＞
・力道山　空手チョップ世界を行く　力道山光浩著　日本図書センター　2012.3＜KD975-J149＞
・力道山　人生は体当たり、ぶつかるだけだ　岡村正史著　ミネルヴァ書房　2008.10＜KD975-J27＞
・力道山をめぐる体験　プロレスから見るメディアと社会　小林正幸著　風塵社　2011.6＜KD975-J130＞
・木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか　増田俊也著　新潮社　2011.9＜FS37-J269＞
・プロレス黄金期伝説の名勝負　宝島社　2008.5＜Y94-J1540＞
・プロレス戦国史・仁義なき戦い　敗れざる男たちの外伝　地伏丈と VIOLETS 著　総和社　1996.10＜KD975-G97＞
・熱闘!プロレス・クラッシック　もっと知りたい!完全無欠のプロレス入門書　ブレット増井著　イカロス出版　2000.3＜KD975-G289＞
・歴史ポケットスポーツ新聞プロレス　荒井太郎著　大空出版　2007.9＜KD975-H206＞
・G スピリッツ　プロレス専門誌. vol.22 (特集:相撲とプロレス/天龍源一郎/輪島大士/曙/鈴川真一/アニマル浜口)　辰巳出版　2012.2＜Y94-J24406＞
・Hooker：An Authentic Wrestler's Adventures Inside the Bizarre World of Professional Wrestling / Lou Thesz, Kit Bauman. Washington：The Wrestling Channel Press, 2000.＜当館未所蔵＞

競馬

・日本中央競馬会ホームページ
http://www.jra.go.jp/

囲碁

・心に残る名局・名勝負　大正、昭和、平成-時代を貫く激闘の棋史　日本棋院　2004.9＜KD949-H50＞
・囲碁名勝負 100 番　田村竜騎兵著　立風書房　1993.2＜KD949-E179＞
・囲碁名勝負物語　安永一著　時事通信社　1972＜KD949-11＞
・昭和囲碁名勝負物語　上巻、下巻　伊藤敬一著　三一書房　1994.1＜KD949-E203＞

将棋

・不滅の名勝負 100　週刊将棋編　毎日コミュニケーションズ　1995.12＜KD953-G11＞
・写真でつづる将棋昭和史　毎日コミュニケーションズ　1987.3＜KD953-193＞
・孤高の棋士　坂田三吉伝　岡本嗣郎著　集英社　2000.3＜KD953-G197＞
・西条八十全集　10 巻　藤田圭雄［ほか］編　国書刊行会　1996.11＜KH519-E459＞
・反骨の棋士阪田三吉　その栄光と苦難の道　舳松歴史資料館編　舳松歴史資料館 1998.3.＜KD953-G129＞
・「新聞「碁・将棋欄」の争奪戦--「朝日」対「読売」名人戦のうらに」　頼尊清隆著（総合ジャーナリズム研究　12(2)　1975.4）＜Z6-8＞

野球

・甲子園野球と日本人　メディアのつくったイベント　有山輝雄著　吉川弘文館　1997.4＜FS35-G259＞
・「近代プロ・スポーツ」の歴史社会学　日本プロ野球の成立を中心に　菊幸一著　不昧堂出版　1993.2＜KD962-E353＞
・日本プロ野球機構オフィシャルサイト
http://www.npb.or.jp/
・日本高等学校野球連盟ホームページ
http://www.jhbf.or.jp/

スポーツ報道、オリンピック等

・日本スポーツ放送史　橋本一夫著　大修館書店　1992.4＜UC251-E72＞
・権力装置としてのスポーツ　帝国日本の国家戦　坂上康博著　講談社　1998.8＜FS22-G48＞
・戦時期日本のメディア・イベント　津金澤聰廣、有山輝雄編著　世界思想社　1998.9＜UC41-G32＞
・戦後日本のメディア・イベント　1945-1960 年　津金澤聰廣編著　世界思想社　2002.3＜UC41-G61＞
・幻の東京オリンピック　橋本一夫著　日本放送出版協会　1994.8＜FS27-E37＞
・消えた魔球　熱血スポーツ漫画はいかにして燃えつきたか　夏目房之介著　双葉社　1991.8＜KC486-E232＞
・「作家・重松清が戦前戦後の熱狂を甦らせる--雑誌が伝えた「勝者と敗者」の感動秘話」重松清著（現代　38(9)　2004.9）＜Z23-17＞
・「人間と世界を洞察する新聞スポーツ記事の視座」速水徹著（Journalism　(230)　2009.7）＜Z6-134＞
・「新聞のカラー化とその技術動向」　今田昭著（印刷雑誌　71(10) 1988.10）＜Z17-467＞
・「1 面をいかに作るか--スポーツ紙のビジュアル戦争」　小室進著（新聞研究　(492)　1992.7）＜Z21-88＞

年表

年	名勝負	オリンピック	スポーツ全体、メディア等
1878(明 4)			野球が伝わる
1882(明 15)			講道館設立
1896(明 29)		アテネ(近代初のオリンピック)	
1911(明 44)			野球害毒論
1912(明 45)		ストックホルム	
1913(大 2)	坂田三吉ー関根金次郎		
1915(大 4)			全国中等学校優勝野球大会(現在の夏の高校野球)始まる
1916(大 5)	栃木山-太刀山		
1917(大 6)	坂田三吉ー関根金次郎		
1920(大 9)		アントワープ	
1923(大 12)			『アサヒスポーツ』創刊
1924(大 13)		パリ	選抜中等学校野球大会(現在の春の高校野球)始まる
1925(大 14)			ラジオ放送開始
1927(昭 2)			全国中等学校優勝野球大会のラジオ中継が始まる
1928(昭 3)		サンモリッツ、アムステルダム(放送は行われていない)	相撲のラジオ中継始まる
1929(昭 4)	木谷實ー呉清源		
1930(昭 5)	空気投げ		
1932(昭 7)		ロサンゼルス(初のラジオ放送、しかし実「感」放送)	
1933(昭 8)	中京商ー明石中 リンゴ事件 本因坊秀哉ー呉清源		
1934(昭 9)	日米野球		
1935(昭 10)			『宮本武蔵』ブーム
1936(昭 11)	ベルリンの奇跡	ベルリン(初のラジオ中継)	プロ野球発足
1937(昭 12)	南禅寺の決戦、天龍寺の決戦		
1938(昭 13)	木谷實ー本因坊秀哉		
1939(昭 14)	安藝ノ海ー双葉山、鎌倉十番碁		
1940(昭 15)	木村政彦ー石川隆彦	幻の東京	
1946(昭 21)			『日刊スポーツ』創刊
1948(昭 23)	高野山の決戦	ロンドン(不参加)	テレビ本放送開始

1949（昭 24）	木村政彦ー石川隆彦		
1952（昭 27）	白井義男日本人初タイトル	ヘルシンキ	
1953（昭 28）			
1954（昭 29）	力道山ー木村政彦		
1955（昭 30）	栃錦ー大内山		街頭テレビブーム
1956（昭 31）	升田幸三ー大山康晴	コルチナ・ダンベッツォ（冬季初ラジオ放送）、メルボルン	
1957（昭 32）	力道山ールー・テーズ 升田幸三ー大山康晴		
1958（昭 33）	長嶋デビュー 西鉄ー巨人 徳島商ー魚津		
1959（昭 34）	天覧サヨナラ本塁打 南海ー巨人 神猪時代（～1961）		皇太子ご成婚でテレビ普及
1960（昭 35）	若乃花ー栃錦 早稲田ー慶應（大学野球）	ローマ（ラジオで実況、テレビは録画）	カラーテレビ放送開始
1962（昭 37）	ファイティング原田ーキングピッチ		ボクシング番組ブーム
1963（昭 38）	柏戸ー大鵬 力道山ーザ・デストロイヤー 坂田栄男ー藤沢秀行		
1964（昭 39）		東京（テレビ中継）	
1965（昭 40）	シンザン五冠		JSL 発足
1966（昭 41）			『巨人の星』
1967（昭 42）	日本代表ー韓国代表（サッカー）		
1968（昭 43）		メキシコ	『アタック No.1』、『サインは V!』
1969（昭 44）	戸田ー大鵬 三沢ー松山商		
1971（昭 46）	王貞治ー山田久志 大山康晴ー升田幸三		
1972（昭 47）		札幌、ミュンヘン	
1973（昭 48）	大場政夫ーチャチャイ ハイセイコー敗れる		
1974（昭 49）	ジャイアント馬場ーブリスコ		
1976（昭 51）		モントリオール	
1977（昭 52）	北の湖ー輪島 テンポイントートウショウボーイ		
1978（昭 53）	ヤクルトー阪急		

1979（昭 54）	栃赤城－貴ノ花 江夏の 21 球、箕島－星稜		
1980（昭 55）	高見山－貴ノ花 ニクラス－青木	モスクワ（不参加）	
1981（昭 56）	千代の富士－北の湖 タイガーマスクーダイナマイト・キッド		『キャプテン翼』、『タッチ』
1983（昭 58）	青木－レナー 山下－斉藤（～1985） 長州力－藤波辰巳		
1984（昭 59）	小錦－隆の里	ロサンゼルス	
1985（昭 60）	韓国代表－日本代表（サッカー） 甲子園バックスクリーン3連発 新日鉄釜石－同志社大学		
1986（昭 61）	小林光一－趙治勲		スポーツ新聞のカラー化
1987（昭 62）	早稲田大学－明治大学（ラグビー）		
1988（昭 63）	大乃国－千代の富士 ロッテ－近鉄	ソウル	
1989（平 1）	巨人－近鉄 ホーリックス－オグリキャップ		
1990（平 2）	小川直也－古賀稔彦		
1991（平 3）	貴花田－千代の富士 舞の海－曙 神戸製鋼－三洋電機		
1992（平 4）	趙治勲－小林光一	アルベールビル、バルセロナ	
1993（平 5）	ドーハの悲劇		Ｊリーグ開幕
1995（平 7）	谷川浩司－羽生善治		
1996（平 8）	マイアミの奇跡 伊達公子－グラフ 羽生善治－谷川浩司 メークドラマの完成	アトランタ	
1997（平 9）	ジョホールバルの歓喜		
1998（平 10）	琴錦－貴乃花 横浜フィーバー	長野	